

『源平盛衰記』全釈（一九—卷六—3）

山岡	森田	志立	橋本	村井	近藤	曾我	早川
瞳	貴之	正知	正俊	宏栄	泉	良成	厚一

1 是以テ先例^{三九三}ヲ思ニ、一年セ保元ノ逆乱^{ひとと}ノ時、2 六条判官為義ハ新院ノ御方ニ参リ、子息下野守義朝ハ内裏ニ3 参テ、父子4 致合戦^{うせ}。新院ノ御方軍破テ、5 大炊殿戦場ノ煙ノ底ニ成シカバ、院ハ讃州ヘ御下向、左府ハ流矢ニアタリテ失給ヌ。大將軍為義法師ヲバ、子息義朝承テ⁸朱雀大路ニ引出シ、⁹首ヲ刎タリシヲコソ、¹⁰同勅定ノ¹¹忝ナサト云ナガラ、¹²惡逆無道ノ至、¹³口惜事哉ト存候シカ。正御覽セラレシ事ゾカシ。其二人ノ上ノ様ニ浅増^{あさまし}ト悲カリシ事ノ、今日ハ又重盛ガ身ノ上ニ罷成ヌル事ヨト存コソ心憂覺候エ。悲哉、君ノ御為ニ奉公¹⁴ノ忠ヲ致サントスレバ、¹⁵迷廬八万ノ頂ヨリ猶高キ父ノ御恩忽ニ¹⁶忘ナントス。痛哉、¹⁷不孝ノ罪ヲ遁トスレバ、又朝恩疊重ノ底極カタシ。¹⁸君ノ御為ニ既ニ不忠ノ逆臣トナリヌベシ。『雖君不^レ為君不^レ可^レ臣以不^レ為臣、²⁰雖父不^レ為父不^レ可^レ子以不^レ為子』トイヘリ。『云レ彼云レ此進退コ、ニ²¹キハマレリ。思フニ無益^{むやく}ノ次第也。』

【校異】 1 〈近〉「こゝを」へ「蓬」 「是を」へ「静」 「是」へ「近」 「六てうのはうぐはん」へ「蓬」 「六条判官」へ「静」 「六条判官」へ「蓬」 2 〈近〉「まいて」へ「蓬・静」 「まいりて」へ「蓬・静」 「かつせんいたす」へ「蓬・静」 「合戦をいたしき」へ「蓬」 「おほいとのせんちやうの」へ「蓬」 「大炊殿戦場の」へ「静」 「大炊殿戦場の」へ「蓬」 3 〈近〉「うけ給はて」へ「蓬」 「承て」へ「静」 「承りて」へ「蓬」 4 〈近〉「しゆしやかおほちに」へ「蓬」

「朱雀大路に」〈静〉「朱雀大路に」。9 〈近〉「かうへを」〈蓬〉「首を」〈静〉「首を」。10 〈近〉「おなしく」〈蓬〉「同」。11 〈蓬〉「かたしけなきと」。12 〈近〉「あくきやくぶたうの」〈蓬〉「惡逆無道の」〈静〉「惡逆无道の」。13 〈近〉「ト」なし。なお、「ことかな」〈蓬〉「事哉と」。14 〈蓬・静〉「ノ忠」なし。15 〈近〉「めいろ八まんの」〈蓬〉「迷慮八万の」〈静〉「迷慮八万の」。16 〈近〉「ふけうの」〈蓬〉「不孝の」〈静〉「不孝の」。17 〈蓬〉「君君の」とし、最初の「君」に見せ消ち。丁替わりによる。18 〈近〉「けきしんと」〈蓬・静〉「逆臣と」。19 〈近〉「きみきみたらずといふともしんもてしんたらずはあるへからす」〈蓬〉「雖君不可臣以不為臣」〈静〉「雖君不可臣以不為臣」。20 〈近〉「ちちちたらすといふとも子もて子たらすはあるへからすと」〈蓬〉「雖父不為父」不可子以不為子と」〈静〉「雖父不為父」可子以不為子と」。21 〈蓬・静〉「きはまり」。

【注解】○是以テ先例ヲ思ニ……重盛が自分が手勢を率いて院の守護に参じること、結果的に父為義を討った義朝と同様の立場になることへの危惧を述べた一節。以下「心憂覚候エ」までの保元の乱に関する逸話を有するのは〈闕・延・長・中〉、ただし〈闕・中〉は乱の経緯を省略し、義朝が勅命によって朝敵となった父為義の首を刎ねたことのみを語る。〈闕〉「是以思昔保元逆乱六条判官為義依為朝敵」子息義朝承之於朱雀大路に誅頸思人の上只今成重盛身の上候事口惜覚候（是れを以て昔を思ふに、保元の逆乱に、六条判官為義、朝敵たるに依つて子息義朝之を承りて、朱雀大路に於いて頸を誅たりしをこそ人の上と思ひしに、只今重盛が身の上に成り候ふ事こそ口惜しく覚え候へ。下一一九ウ）〈中〉「保元の昔、さまのかみよしとが、ちちためよしほうしがかうべをはねし事は、ちよくぢやうのかたじけなきとは申ながら、むだうの心たり、くちおしき事とこそ見しに、けふはしげもりが身の上になりぬとおぼえ候ぞや」（上一一〇四頁）。〈屋・寛〉はこの逸話を欠く。〈延〉の叙述が最も詳しい。〈延〉「遠ク例ヲバ求ルニ及バズ、正ク御覽ジ見候シ事ゾカシ。保元逆乱之時、関白殿ハ内裏ニ候ハセマシ、弟ノ左大臣殿ハ新院ノ御

方ニ候給ヒ、陸奥判官為義ハ新院ノ御方へ参リ、子息下野守義朝ハ内裏ニ候テ、合戦ス。兵イクサ事終ヘテ後、大炊殿ハ戦場ノ煙ノ底ニナリシカバ、左府ハ流矢ニ中テ命ヲ失ヒ、新院ハ讃州へ配流セラレサセ給ヌ。其後大將軍為義ハ出家人道シテ義朝ヲ憑ミ顕レ、手ヲ合テ来リシカバ、勲功ノ賞ヲ進セ上テ父ガ命ヲ平ニ申シ、カドモ、正ク君ヲ射奉ル罪依テ難ニ遁死罪ニ定リシヲ、人手ニカケジトテ、義朝ガ朱雀ノ大路ニ引出シテ頸ヲ切候シヲコソ、同勅命ノ難背サト申ナガラ、惡逆無道之至、口惜キ事哉トコソ、昨日マデモ見聞候シニ、今日ハ重盛ガ身ノ上ニナリヌトコソ覚候ヘ。君打勝セ給候ハ、彼保元ノ例ニ任テ、重盛五逆罪ノ一分犯シ候ヌト覚候コソ、兼テ心憂ク覚候ヘ」（巻二一四五ウ—四六ウ）。〈長〉（一一七一頁）も〈延〉に近い。教訓状の場面と『平治物語』の光頼登場場面の共通性を指摘した日下力は、〈延〉の語る義朝の処刑の場（朱雀ノ大路）。〈長・同〉が『保元物語』と一致すること、重盛の心情吐露に至る表現が父処刑の勅命を受けた義朝の心情に共通すること、為義出頭の描写が『保元物語』と近似することなどから、『保元物語』体のものが筆者の座右にあったからかも知れない」（四七二頁）と指摘する。○一年セ保元ノ逆乱ノ時

前項の見出しを含めて示せば、近似する本文を持つのは、〈闘〉「是以思昔保元逆乱（是れを以て昔を思ふに、保元の逆乱に。下一一九ウ）、〈延〉「保元逆乱之時」（巻二四五ウ）、〈長〉「是をもて、昔をあんずるに、保元逆乱の時」（一―一七二頁）、〈中〉「保元の昔」（上一〇四頁）。成親の助命嘆願（所謂「小教訓」）においても、保元・平治の乱の先例が教訓として引き合いに出されていた（是（引用者注「信西」）ハサセル朝敵ニアラネ共、併保元ノ罪ノ報ト覚テ、恐シクコソ侍シカ」一―三三六頁）。重盛の主張においては、このように保元の乱の記憶が、道理喪失の先例として強く意識されている。〇六条判官為義ハ新院ノ御方ニ参リ 源為義は、官位は従五位下、左衛門大尉、檢非違使。清和源氏累代の六条堀河邸を居館としたことから、六条判官と呼ばれた。〈闘・長〉も「六条判官為義」とする。〈延〉のみ「陸奥判官為義」とするが、半井本『保元物語』には、為義が奈良法師を栗子山より追ひ返した賞に陸奥を所望したところ、『陸奥ハ、為義ガ為ニ不吉ノ国也。祖父ガ時、頼義十二年ノ合戦ヲス。親父義家三年ノ軍ヲス。意趣殘国ニテアリ。為義ニ給バ、乱ヲ発ナン』トテ、代々ノ君免シ給ズ」（新大系九二頁）と、為義と陸奥との関係が否定的に語られ、為義を「陸奥判官」と呼ぶこともない。とすれば〈延〉が「保元物語」を直接参照していたとすれば、この呼称は不審。米谷豊之祐は、古活字本『保元物語』には、「此為義は、……もとは陸奥四郎とぞ申ける」（三七六頁）とあることから、「これは為義が十一〜二歳迄の幼少時か、二十歳から二十八歳頃までの間に、一時陸奥に居を占めていたかも知れないことを示すとする。共に、先祖頼義・義家の開発した所領を幾干か同国に保持していたことをも示唆する。『上遠野

文書』に、久安^{（一五〇）}六年八月二十一日付にて平正光なる者を陸奥国白河領内、社・金山^{（一五〇）}両村の預所職に補任している右衛門大尉源朝臣は『平安遺文』二七〇（六号）為義に比定すべきであろう（一四四頁）とする。ただし、「陸奥判官」の呼称は、父（養父）義家の官職が陸奥国司で、自身の官職である檢非違使の衛門尉（判官）に由来すると見るべきであろう。「陸奥判官」の呼称については、『兵範記』久寿元年（一一五四）二月二日条に確認でき、『平家物語』や『保元物語』の叙述にかかわらず、当時から用いられていたことがわかる。西岡虎之助は、『愚昧記』仁安三年（一一六八）十一月記紙背に記された「散位源行真申詞」（永治二年（一一四二）四月三日。『平安遺文』二四六七号）に登場する「前奥陸判官」を、源為義のことと比定する（四四六頁）。為義が保延二年（一一三六）に衛門少尉を辞しており（〈尊卑〉）、これが源為義である可能性は高い。ただし、「前・判官」は複数人存在すると考えられ、「陸奥」と関係のあるものが他にいないという確証もないため、これについては可能性の範囲を出ない。また、米谷豊之祐が指摘する『上遠野文書』の「右衛門大尉源朝臣」についても、為義は久安六年（一一四六）に「左衛門大尉」（左右は写し誤りなどの可能性も）に還任しているので、『本朝世紀』同年正月三日条、これが源為義である可能性は高い。ただし、「令云、二人、然而輒不任之、為五位尉之輩中殊撰人」（『官職秘抄』「衛門府」大尉）とあるように、もう一人の大尉が源氏でないことが確認されて、初めて源為義であると確定できるもので、現状では可能性の範囲を出ない。〈尊卑〉によれば、為義は源義親の四男、正四位下、陸奥守、鎮守府將軍源義家の孫で、父義親が謀叛で誅されたために幼少の為義が義家の養子とされたと

される。しかし佐々木紀一は、〈尊卑〉の注記に「母同義国〈中宮亮有綱女〉」（3—289頁）とあり、「北酒出本『源氏系図』」では義家四男で「母同義忠」（義忠の母は藤原有綱女、義国の母も同）とあることなどから、義家の実子と見るべきと指摘する（2—286頁）。

藤原忠実・頼長に臣従していた為義は、保元の乱に際しては、兩名の支持する崇徳院側に参じた。○子息下野守義朝ハ内裏ニ参テ父子致合戦〈延〉「子息下野守義朝ハ内裏ニ候テ合戦ス」（巻一—146オ）。

源義朝は、鳥羽院の院宣によって保元元年八月一日から内裏の警護に召集されていた（『兵範記』保元元年七月五日条「去月朔以後、依院宣、下野守義朝并義康等、参宿陣頭守護禁中」）。八日には、東三条殿へ押入つての検知没官にあたるなど（同八日条「今日藏人左衛門尉俊成并義朝隨兵等、押入東三条検知没官了、東蔵町同前即被仰預義朝了」、天皇方として活動しており、合戦当日は二百余騎を率いて大炊御門方より崇徳院の居る白河御所の攻撃にあたった（同十一日条「義朝二百余騎自大炊御門方」）。義朝と後白河との結びつきはかなり以前から始まっており、元木泰雄は、義朝は父為義が藤原忠実と伺候した時期に嫡男の座を追われて関東へ下向、鳥羽院と緊密な関係を築くことによって官位を上昇させたが、これが摂関家の家産機構に組織された父為義との決別をもたらしたことを指摘する（三〇四—三〇七頁）。〈早（黒）〉「致シキ」。校異4参照。○新院ノ御方軍破テ大炊殿戰場ノ煙ノ底ニ成シカバ〈延〉「兵イクサ事終ヘテ後、大炊殿ハ戰場ノ煙ノ底ニナリニシカバ」（巻二—146オ）、〈長〉「合戦事をはりて、大炊殿、戦場のけぶりの底になりし後は」（1—171頁）。崇徳院は最初同母妹の斎院の御所に居たが、手狭である

として大炊殿へと移ったことが半井本『保元物語』には記される。「新院ハ斎院ノ御所ニ渡ラセマシクケルガ、分内セバクテ悪カリナントテ、夜半計ヨリ大炊殿ヘウツラセ給」（新大系二八頁）。大炊殿は、鴨川を東に渡って大炊御門大路に面した北側にあり、白川北殿とも呼ばれる。野中哲照①によれば、狭義の白河北殿は春日小路（の末）を北限としているらしいので、呼称からみて狭義の白河北殿を「大炊殿」と呼び、春日小路（の末）の北にあるのが前斎院の御所だろうとする（二〇六頁）。『兵範記』仁平三年（一一五三）一月十五日条「令参白川殿給（大炊御門末御所）。保元の乱に際しては、後白河天皇方が崇徳院御所に火をかけたことは『保元物語』に「義朝、御免ヲ蒙テ、御所ノ北ナル藤中納言家成卿ノ宿所ニ火ヲ放タリケル。西風ハゲ敷吹、猛火御所ヘゾ押羅ル」（新大系八九—七〇頁）と記される他、『兵範記』によっても確認できる（七月十一日条「辰剋、東方起煙炎、御方軍已責寄懸火了云々、清盛等乗勝逐逃、上皇・左府晦跡逐電、白川御所等焼失畢（斎院御所并院北殿也）」）。○院ハ讃州ヘ御下向〈延〉「新院ハ讃州ヘ配流セラレサセ給ヌ」（巻一—146オ。「左府ハ流矢ニ中テ命ヲ失ヒ」の後に続く）、〈長〉「一院、さぬきの国へ御下向」（1—171頁）。崇徳院の讃岐配流は、為義処刑に先立つ七月二十三日後に行われた。『兵範記』保元元年七月二十三日条「今夕、入道太上天皇（*崇徳院）、被奉移讃岐国、兼日公家有御沙汰、当日五位藏人資長、依勅定、参向仁和寺御在所奉出之、晩頭出御、網代御車（御乳母子保成車召々）」。『保元物語』も同じく二十三日に讃岐に配流になったとする（新大系一一八頁）。○左府ハ流矢ニアタリテ失給ヌ〈延〉「左府ハ流矢ニ中テ命ヲ失ヒ」（巻二—146オ）、〈長〉

「左府はながれ矢にあたりうせ給てのち」(1—171頁)。「保元物語」には、頼長が十一日の合戦に敗れて落ちのび、夜途中で流れ矢に頸を射られて瀕死となり、十三日宇治の父忠実^ニに面会を求めるが拒絶され、十四日に死去した経緯が記されるが、その経緯はおよそ『兵範記』の記事と符合する。七月十一日条「上皇・左府不知行方」、但於左府者、已中流矢由多以称申。七月二十一日条「顯憲僧玄顯申云、十一日合戦庭被^レ疵、十二日経廻西山辺、十三日於大井河辺乗船、同日申刻付木津辺、先申事由於入道殿、依不知食、扶持輩渡^ニ申^ニ覚律師房、其後一夜悩乱、十四日已刻許薨去、即夜乘輿窃葬^ニ於般若山辺、骨肉五体併雖不違、直殯了者、依此申状、今朝差^ニ定^ニ官使史生并滝口三人、相具彼玄顯遣^ニ南京了^ニ」。○大將軍為義法師ラバ、子息義朝承^テ朱雀大路ニ引出シ、首ヲ刎タリシヲコソ、為義は義朝の許に出頭するに先立って、出家を遂げていた。『兵範記』保元元年七月十六日条には、「為義出来義朝許、即奏聞、依勅定、令候義朝宿所、日来流浪、横川辺出家云々」とある。半井本『保元物語』は、東国へと通れる途中で病に倒れた為義は、黒谷辺に潜んでいたが、比叡山の月輪坊の堅者のもとで出家して義法房と名付けられたと記す(新大系九二—九三頁)。「延」は、為義投降から処刑に至る経緯を、「其後大將軍為義ハ出家人道シテ義朝ヲ憑^ミ顯^レ、手ヲ合テ来リシカバ、勲功ノ賞ヲ進セ上テ父ガ命ヲ平ニ申シ、カドモ、正ク君ヲ射奉ル罪依^テ難^ニ遁^ニ死罪ニ定リシヲ、人手ニカケジトテ、義朝ガ朱雀ノ大路ニ引出シテ頸ヲ切候シヲコソ」(巻二四六オ)、「長」は「大將軍、ほうしになりて、子そくよし朝がもとへ降人になり、手を合てむかひたりけれども、今度、朝敵の大將ぐんなりとて、断罪にさだま

りにければ、よしとも、力およばず、人手にかゝらんよりとて、朱雀大路に引出して、父がかうべをはね候し事」(1—171頁)と『保元物語』に即してやや詳しく記す。「盛」は「延・長」のような為義が出家した記述を省くので、「為義法師」が唐突に現れるが、半井本『保元物語』でも出家後は「為義法師」と八箇所^ニにわたって呼称されているので(古活字本『保元物語』は、一箇所)、こうした本文に拠ったのであろうか。為義が処刑された場所については、『兵範記』が船岡辺(七月三十日条)、『愚管抄』が四塚(二二三頁)とするのに対し、『保元物語』が七条朱雀(新大系一〇〇頁)としていることについて、服部幸造は、「検非違使による実検が行われたと言うのだから、おそらく史実としては『兵範記』の記事が正しいのであろう」としつつ、「あえて史実をまげて、為義処刑の場としているのは、無慙な死をとげた為義を京の西の入り口に祀ることにつとめた者たちがいたからであろう」(二二三頁)と指摘、山口泰子は、丹波街道に通じる七条大路と朱雀大路の交叉する地において「境界鎮護の地藏信仰を奉じ怨霊の鎮魂を担った巫祝唱導者たちによって、為義鎮魂の伝承基盤が形成されていたものと想定する」(二五三頁)。また、野中哲照^②は、「元来、処刑地―船岡辺(『兵範記』、墓地―七条朱雀という区別があったのに、伝承世界で七条朱雀が処刑地へと移行した可能性がある」(二四九頁)とする。○同勅定ノ忝ナサト云ナガラ、惡逆無道ノ至、口惜事哉ト存候シカ「延」「同勅命ノ難背」サト申ナガラ、惡逆無道之至、口惜事哉トコソ、昨日マデモ見聞候シニ」(巻二四六オ)、「長」「おなじ勅定と申ながら、悪ぎやく無道のいたり、口おしき事かなとこそ存候しか」(1—171頁)など、勅命と不孝を対比しながら、

父為義の首を切った義朝を非難する。また、半井本『保元物語』では、斬罪と聞いた為義の四人の子供の内、九つの鶴若が、兄の義朝に助命を頼もうと言ったのに対して、長男の乙若が、「幼物共程ハカナカリケル物アラジ。何ニモシテ助クベキ父ヲ切程ノ不当仁ガ、弟共ヲバ、何トカ思ハン」（二〇七頁）と、兄義朝のことを「父ヲ切程ノ不当仁」と非難したとする。このように、軍記類においては義朝が父為義や兄弟を処刑したことが厳しく批判され、それとの比較によって、重盛の「不孝」の論理が展開されている。ただし、義朝による為義等の処刑を「不孝」として非難する言説は、当時の日記類からはほとんど確認できず、重盛が主張するような「不孝」批判が貴族社会においてどの程度共有されていたか疑問が残る。義朝による為義らの処刑の背景には、処刑によって闕所地となる為義らの所領継承の問題があった可能性がある。笠松宏至は、「一族の所領は同族およびその子孫が受け継ぎ、知行を確保していくことが当の一族構成員にとっては勿論、幕府にとってもいわゆる道理に適うもの」、「たとえその地が闕所となつたときでさえ、被没収者の一族がその給与を優先的に主張し得た」（二〇九頁）と指摘する。したがって、義朝は処刑によって闕所地となった為義らの所領の相続を主張できた。しかし、その一方で「検断得分」（検断により押収された罪人の財物が検断行使者の得分として渡ることになっていた）という制度があったため、義朝はこれを回避するために、自らが検断を行うことによって、被没収者の一族としての権利を主張する必要があったと思われる。このような事情があったからこそ、義朝の行為を強く非難する言説が日記類にはほとんど見られなかった可能性がある。ただし『愚管抄』には、「ハヤク、ビヲ

キルベキヨシ勅定サダマリニケレバ、義トモヤガテコシ車ニノセテヨツバカヘヤリテ、ヤガテクビキリテケレバ、『義トモハヨヤノクビ切ツ』ト世ニハ又ノ、シリケリ」（旧大系二三三頁）とあり、勅命とは言いながら父を処刑した義朝への批判意識は、当時からある程度あったことをうかがわれる。○其二人ノ上ノ様ニ浅増ト悲カリシ事ノ、今日ハ又重盛ガ身ノ上ニ罷成ヌル事ヨト存コソ心憂覚候エ 後白河院へ兵を向けようとする朝敵にならんとする父清盛を前に、朝敵となつた父為義を、勅命によって自ら処刑しなければならなかった義朝に、重盛がわが身を重ねる言葉は、〈闕・延・長・中〉にも見られる。〈延〉は、「今日ハ重盛ガ身ノ上ニナリヌトコソ覚候へ。君打勝セ給候ハ、彼保元ノ例ニ任テ、重盛五逆罪ノ一分犯シ候ヌト覚候コソ、兼テ心憂ク覚候へ」（巻一四六〇〜四六ウ、〈長〉も、傍線部を欠く以外は、ほぼ同文）と、保元の乱と同様に、君（後白河院）が勝利し、自分が義朝と同様の立場に置かれる可能性を強調する。日下力は、「五逆罪ノ其ノ一ヲ犯スベシ」という表現や、次項に見られる重盛の心境吐露の表現が、「父処刑の勅命を受けた時の義朝のそれに、発想の母胎を求められるのではないか」と指摘する（四七二頁）。〈闕〉「口今成重盛ガ身ノ上候事口惜覚候（口今重盛が身の上に成り候ふ事こそ、口惜しく覚え候へ。一下一九ウ）、〈中〉「けふはしげもりが身の上になりぬとおぼえ候ぞや」（上二〇四頁）。○悲哉、君ノ御為ニ奉公ノ忠ヲ致サントスレバ、迷盧八万ノ頂ヨリ猶高キ父ノ御恩忽ニ忘ナントス。痛哉、不孝ノ罪ヲ遁トスレバ、又朝恩量重ノ底極ガタシ。君ノ御為ニ既ニ不忠ノ逆臣トナリヌベシ 〈延〉「悲哉、君ノ御為ニ忠ヲ致トスレバ、迷盧八万ノ頂猶下レル父ノ御恩ヲ、忽ニ忘レナントス。痛哉、不

孝ノ罪ヲ通レントスレバ、蒼海万里之底猶浅キ君ノ御為ニ、不忠ノ逆臣トナリヌベシ」(巻二一四六ウ)とあるのが、「迷盧八万ノ頂」と「蒼海万里之底」の対句として最も整っている。「迷盧」は須弥山のことで、「迷盧」とも書く。〈延全注釈〉は、この譬喩が『言泉集』や『澄憲作文集』など、唱導・表白文によく見られる常套句であることを指摘する(巻二二〇七頁)。他にも、『湛睿說草』『悲母表白』に、「其恩山尤高迷盧八万之頂不可及^マ、其^{海至深}蒼海三千之底^{非可^ニ比^{ラフ}}」(納富當天『金沢文庫藏国宝称名寺聖教湛睿說草 研究と翻刻』三三八二頁)など、類似の句が恩愛の深さを説く文脈で用いられる。『とはずがたり』巻一「その恩、迷盧八万の頂きよりも高く、養育扶持の心ざし、母に代はりて切なりしかば、その恩又、四大海の水よりも深し」(新大系二八頁)もそういった常套句に基づく。〈長・屋・覚・中〉は後半の「君ノ御為ニ」に掛る「蒼海万里之底猶浅キ」を欠く。〈闕〉は対句と「迷盧八万ノ頂」「蒼海万里之底」の両方を欠く(「痛哉進為^レ君欲^レ致^レ忠^ニ不孝^ノ罪業可^レ在^ニ身^ニ悲哉退為^レ父欲行孝^ニ不忠^ノ逆臣^ニ在^ニ我^ニ痛ましきかな、進みて君の為に忠を致さんと欲すれば、不孝の罪業身に在るべし。悲しきかな、退いて父の為に孝を行はんと欲すれば、不忠の逆臣我に在りぬべし。一下一九ウ)」。〈盛〉は一旦欠落したこの部分に新たに「又朝恩疊重ノ底極ガタシ」を補ったものか。ただし対句としてとのっていないのは、唱導・表白文の常套句が理解されていないためか。「疊重ノ底」という表現は他の用例未詳。なお〈闕〉の記事配列は他と異なり、この一節を、〈盛〉は次節に置く漢蕭何の故事に続けた『論語』引用の後に置く(次節「彼漢蕭何ハ勲功ヲ極ニ依テ官大相国ニ至リ……高祖重ク

禁テ廷尉ニ下シテ深罪セラレキ」項参照)。○雖君不為君不可臣以不為臣、雖父不為父不可子以不為子 読みについては、校異19・20参照。遠藤光正は、『古文孝経』孔安国序「君雖^レ不君、臣不^レ可以^レ不^レ臣、父雖^レ不父、子不^レ可以^レ不^レ子(君、君たらずと雖も、臣以て臣たらざる可からず。父、父たらずと雖も、子以て子たらざる可からず)」(新釈漢文大系『孝経』六〇頁。「君が君としての道を尽くさなくても、臣は臣としての道を尽くさなければならぬ。父が父としての道を尽くさなくても、子は子としての道を尽くさなければならぬ」(三八二頁の意)を典拠としつつ、出典として『明文抄』『管蠡抄』『玉函秘抄』などを挙げる。さらに典拠との字句の相違については、「類書金言集の略抄本である金句集に採録の字句とは甚だ近似している」と、村岡典嗣蔵金句集、父子事の条や、東北大学蔵金句集、文事部の条との近似性を指摘する(二三二四頁、二九頁)。「明文抄」「君雖不君、臣不可以不臣、父雖不父、子不可以不子。〈孝経〉」(山内洋一郎編『玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』二四九頁)。したがって、〈盛〉の当該句は、『古文孝経』に直接拠るのではなく、類書等に拠るものと考えられよう。〈長〉にも「君々たらずといふとも、臣以臣たらずはあるべからず。父々たらずといふとも、子以子たらずはあるべからず」(二七一頁)とあるが、〈長・盛〉のみの独自本文で、〈闕・延・屋・覚・中〉は当該箇所はこの一文を欠く。ただし、〈闕・覚・中〉は、後の褒姒故事引用の後に同様の文言を引用し(字句はこの部分とは若干異なる)、〈延・長・屋〉も、やや簡略化した形で類似の文言を持つ(後述)。「盛」も同箇所再度〈覚・中〉と同様の文言を引用しており、〈長・盛〉には重複が見られる(後出箇所は地の文)。○云彼云此、

進退コ、ニキハマレリ。思フニ無益ノ次第也。〈延〉「是ト申彼ト云、

思ニ無益ノ事ニテ候」（巻二一四六ウ、〈長〉「1—171頁」）もほぼ同文。忠と孝という二つの成立要件が矛盾するどうにも解決できない状況におかれて、その矛盾に思い悩んでも無益なことであるの意か。

〈闘〉「進退惟^{コ、ニキハマレリ}谷 是非難^レ弁（進退惟に谷まれり、是非弁へ難し。

一下—一九ウ）、〈屋・覚・中〉もほぼ同。〈校注盛〉頭注は『詩経』

【引用研究文献】

* 遠藤光正『『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠（1）』（東洋研究七七号、一九八六・1）

* 笠松宏至「中世闕所地給与に関する一考察」（石母田正・佐藤進一編『中世の法と国家』一九六〇・3、『日本中世法史論』東京大学出版会一九七九・3再録。引用は後者による）

* 日下力『『平家物語』と『保元物語』『平治物語』—成親事件話群の考察—」（国文学研究七八号、一九八二・10。『平治物語の成立と展開』汲古書院一九九七・6再録。引用は後者による）

* 米谷豊之祐『院政期軍事・警察史拾遺』（近代文藝社一九九三・7）

* 佐々木紀一「源義忠の暗殺と源義光」（山形県立米沢女子短期大学紀要四五号、二〇〇九・12）

* 西岡虎之助「佐々木荘と宇多源氏との関係」（『莊園史の研究 下巻一』岩波書店一九五六・5）

* 野中哲照①『『保元物語』合戦部の重層性』（『保元物語の成立』汲古書院二〇一六・2）

* 野中哲照②『『保元物語』源氏末路譚の重層性とその形成過程』（『保元物語の成立』汲古書院二〇一六・2）

* 服部幸造「語り物と鎮魂——『保元物語』から——」（『講座日本の伝承文学 三 散文文学〈物語〉の世界』三弥井書店一九九五・10。『語り物文学叢説——聞く語り・読む語り——』三弥井書店二〇〇一・5再録。引用は後者による）

* 元木泰雄「源義朝論」（『古代文化五四巻六号、二〇〇二・6）

* 山口泰子「語り物とヒジリ——保元物語為義最期譚の生成基盤——」（『講座日本の伝承文学 三 散文文学〈物語〉の世界』三弥井書店一九九五・10）

只末代ニ¹生ヲ受テ、係ル憂目ヲ見ル重盛ガ果報ノ程コソ口惜ケレ。サレバ申請ル²処御承引ナクシテ、猶御院参有ベクハ、只今重盛ガ頸ヲ召^{めさ}

ルベク候。所詮院中ヲモ守護仕ベカラズ、惡逆ノ咎³難⁴遁⁵。又⁶御共ヲモ仕ベカラズ、忠臣ノ儀忽⁷ニ背候。申請ル詮、タゞ頸ヲ⁸召ルベキニアリ。只今⁹思食合セ御座スベシ。御運ハ既ニ末ニ¹⁰望¹¹ヌト覺候。人ノ運命ノ尽シ¹²トスル時、加様¹³ノ事ハ思立事ニ¹⁴侍リ。老子ノ詞コソ思シラレ候へ。『功名称遂不¹⁵退¹⁶身避¹⁷位、則遇¹⁸於害¹⁹』ト申セリ。彼²⁰漢²¹蕭何ハ勲功ヲ極²²ニ依テ官²³大相国ニ至リ、劍ヲ帶シ沓ヲ²⁴著ナガラ殿上ニ昇ル事ヲ被²⁵免シカ共、叡慮ニ背ク事有シカバ、高祖重ク²⁶禁²⁷テ廷尉ニ下シテ深罪セラレキ。加様²⁸ノ先蹤ヲ思侍ルニモ、御身富貴ト云²⁹花ト云、朝恩ト云重職ト云、極サセ御座シヌレバ、御運ノ³⁰尽事モ難カルベキニ非ズ。『富貴之家、禄位重賈、猶³¹再実之木、其根必傷³²』トモ申ス。心細クコソ覺候へ。噫呼³³『邦無道富貴恥³⁴』ト云本文アリ。去バ重盛イツマデカ命生テ乱³⁵シ世ヲモ見ベキ。唯³⁶速³⁷ニ頸ヲ食レ候ベシ。人一人ニ³⁸被³⁹仰付⁴⁰テ御ツボニ引出サレテ重盛ガ⁴¹首ヲ刎⁴²ラレン事、安事ニコソ候へ。人々是ヲバイカ⁴³聞給ヤ⁴⁴トテ、又直衣ノ袖ヲ絞ツ、泣々被⁴⁵諫申⁴⁶ケリ。是ヲ見給ケル一門ノ人々モ、涙ヲ流シ袖ヲ絞ラヌハナカリケリ。

【校異】 1〈近〉「しやうを」、〈蓬・静〉「生を」。 2〈蓬〉「所」、〈静〉「所」。 3〈近〉「のかれかたき」。 4〈蓬〉「御供をも」。 5〈近〉「ニ」なし。

6〈蓬〉「めさるへく候」。 7〈近〉「おほしめしあはせおはしますへし」、〈蓬〉「覚召合御座へし」、〈静〉「思食あはせ御座へし」。 8〈近〉「のそぬと」。 9〈蓬〉「時は」。 10〈静〉「侍り」。 11〈近〉「こうめいなとけ身しりそきくらゐをさらさるときはかいにあふと」、〈蓬〉「功名称遂不¹²退¹³身避¹⁴位、則遇¹⁵於害¹⁶』ト云本文アリ。 12〈蓬・静〉「勲蕭何は」。 13〈蓬〉「太相国に」。 14〈近・蓬〉「はきながら」、〈静〉「着ながら」。 15〈近〉「まぬかれしかとも」、〈蓬・静〉「ゆるされしかとも」。 16〈蓬・静〉「誠て」。 17〈近〉「テ」なし。 18〈蓬〉「先蹤を」。 19〈近〉「御身のふつきと」、〈蓬〉「御身富貴と」、〈静〉「御身富貴と」。 20〈近〉「ゑいではと」。 21〈蓬〉「朝恩ト云」なし。 22〈近〉「てうしよくと」、〈蓬・静〉「重職と」。 23〈近・蓬〉「きはめさせおはしぬれば」、〈静〉「きはめさせ御坐ぬれば」。 24〈近〉「つくる」、〈蓬・静〉「尽ん」、〈静〉「尽ん」。 25〈近〉「ふつきのいへろくゐてうくせりなをふたゝひみのる木そのねかならずやふるとも」、〈蓬〉「富貴之家禄位²⁶重²⁷。猶²⁸再実之木其根必²⁹傷³⁰」とも。 26〈近〉「くにゝみちなくしてふつきをはつと」、〈蓬〉「郡無道富貴恥なりと」、〈静〉「郡無道富貴恥なりと」。 27〈近〉「みたれん」、〈蓬・静〉「みたれぬる」。 28〈蓬〉「只」、〈静〉「只」。 29〈蓬・静〉「とくく」。 30〈近〉「かうへを」、〈蓬・静〉「首を」。 31〈近〉「きゝ給へやとて」。 【注解】 ○只末代ニ生ラ受テ…… 以下、本節の叙述は〈延・長〉とほぼ同じ。ただし記事配列には若干の異同が見られる(後述)。なお『平治物語』の参内場面の光頼像と小教訓・大教訓場面の重盛像との類似性を指摘する目下力は、共にこのように末代に生を受けたことを嘆いている点を共通項の一つとしてあげる(四七一頁)。 ○サレバ申請

ル処御承引ナクシテ、猶御院参有ベクハ、只今重盛ガ頸ヲ召ルベク候「申請ル」は「お願いを申しあげる。お願いをしてその許可を得る。申し請う」(『日国大』)。「院参」は、ここでは清盛が院を拘束するために向かうこと。だから私(重盛)が申し上げた事をお聞き入れ下されず、後白河院拘束のために院御所に向かうのであれば、たっ

た今、重盛の頸をお斬りいただくべきでございます、の意。〈延・長〉もほぼ同文。〈闕・屋・覚・中〉はこの一節を欠く。前節では、保元の乱の義朝にわが身を重ね、子が父の頸を斬る不孝の立場に自らが立ちがたいことを訴えたが、ここでは逆に父清盛に自らの頸を刎ねるよう訴えていることになる。先に成親助命に際しても、清盛への諫言中で、聞き入れられないならば自分の頸を刎ねよと主張する場面があった（申請_旨御承引ナクハ、侍一人ニ仰付テ、先重盛方可被_レ刎首。カ、ル乱タル世ニナガラヘテ、命生テモ何ノ詮カハ有ベキ」1—三三五頁、〈本全釈〉一六—五三頁参照）。○所詮院中ヲモ守護仕ベカラズ、惡逆ノ咎難遁。又御共ヲモ仕ベカラズ、忠臣ノ儀忽ニ背候前節から続く忠孝が二律背反する状況を具体的に提示した一節。自分は後白河院守護に向かうことが出来ない、向かえば不孝の罪を逃れることが出来ないからである。かといって父清盛に随うこともできない、随えば忠義の道に背くことになるからである、という主張。〈延〉「所詮院中ヲモ守護スベカラズ。又御共ヲモ仕ベカラズ」卷二—四六ウ、〈長〉も同。〈盛〉は「惡逆ノ咎」「忠臣ノ義」という道德的理由の説明を付け加えていることになる。〈闕〉のみ、「差固門々奉_レ」防候者以外非_ニ御大事_ニ乎此条被_レ思_ニ食奇性_ニ候者於誰_ニ候仰付侍一人_ニ引_ニ下御坪_{ノ内}に只今可_ニ召重盛_ノ頸_ヲ（門々を差し固め防ぎ奉り候はば、以ての外の御大事に非ずや。此の条を奇性_ニに思し食され候はば、誰にても候へ、侍一人に仰せ付けて、御坪の内に引き下ろし、只今重盛が頸を召さるべし。一下—一九ウ）と、自分が行うべき事は御所の守護のみと忠の論理を優先させる姿勢を示し、「それを阻止しようというならば坪の内に引き下ろして私を処刑させよ」という主

張へと展開している。○申請ル詮、タゞ頸ヲ召ルベキニアリ。只今思食セ御座スベシ〈延〉「所_レ申請、只首ヲ可_ニ被召_レアリ。今思召シ合セサセ御ハシマシ候へ」卷二—四六ウ、〈長〉「申うくるごとく、たゞ首をめさるべき也。いまおぼしめしあはせまし_ニ候へ」（1—一七三頁）。私が御願ひ申したいことは、つまりは我が首をお斬りいただきたいということです。今すぐに（父上のご判断と私の決意とどちらが正しいかを）お思いくらべてくださいの意。〈早（黒）〉「召」を「ササ」と記す。「メサ」の誤りか。○御運ハ既ニ末ニ望ヌト覚候 重盛は、清盛に対して先に、多田行綱の密告によって、平家打倒計画が露顕したことを、「然而御運ノ尽ザルニヨリテ此事既ニ顯ヌ」（1—三九〇頁、〈本全釈〉一八—八五頁）と述べていた。それが清盛の院幽閉の意思を受けるに至って、ここでは逆の主張をしていることになる。〈闕〉「御運已_ニ尽覚候（御運は已に尽きぬと覚え候ふ。一下—一九ウ）、〈延〉「御運ハ一定末ニナリテ候ト覚候。人ノ運ノ末ニ臨ム時、加様ノ謀ハ思立事ニテ候ナルゾ」卷二—四六ウ、四七オ。〈長〉もほぼ同文。〈屋・覚・中〉は、重盛の発言冒頭に「此仰承候に、御運ははや末になりぬと覚候」（〈覚〉上—九六頁）とある。この点〈闕・長〉も同様。こうした叙述の先後については、〈本全釈〉一八—六五—六七頁「此御貌見進スルコソ現トモ存ジ候ハネ」項注解参照。○功名称遂不退身避位、則遇於害 校異11にあるように、読みについては各本で異なるが〈静〉の「功名称遂不_ニ退_レ身避_レ位則遇_ニ於害_ニ」が良いか。〈早（黒）〉「称」に「カナヒ」とルビを振る。「功と名声がともに実現しても、身をひき位を辞さなければ、ただちに危害にあう」の意。〈延〉は「功名称遂不_ニ退_レ身、避_レ位即遇_ニ於害_ニ」

（巻二一四七オ）と読みを振る。〈長〉にも同文があり、〈屋〉は「功成名叶遂^{ヒト}テ、身不^シ退^ヒ位不^レ去^{レバ}即^チ会^ハ害^ム」（二五九頁）と訓ずる。〈中〉（上一一〇四頁）も同様に読み、〈闕・覺〉はこの一節を欠く。『老子』運夷第九には「富貴而驕自遺其咎、功成名遂身退天之道」とあるが、遠藤光正は『老子』運夷第九章の河上公注を引用したものであり、これの略抄したものと思われる」とし、出典として『管蠡抄』第六、『玉函秘抄』巻中を指摘する（二四四頁）。河上公注は、王弼注とともに、現存する古い時期の『老子』の注であり、前漢の河上公に仮託したもの。後漢の成立とする説もあるが、一般に六朝時代のものとされる。『日本国見在書目録』にも河上公注本『老子』が記載されている。『老子』運夷第九の河上公注「富貴而驕、自遺其咎（夫富当賑貧、貴当憐賤、而反驕恣、必被禍患也）功成名遂身退、天之道（言、人所為、功成事立、名迹称、遂不退身避位、則遇於害。此乃天之常道也。譬如日中則移、月滿則虧、物盛則衰、樂極則哀也）（富貴にして

驕るは、自ら其の咎を遺す（夫れ富は当に貧を賑ふべく、貴は当に賤を憐れむべきも、反りて驕恣なれば、必ず禍患を被るなり）。功成り名遂げ身の退くは、天の道なり（言うところは、人の為す所、功成り事立ち、名迹称ひ遂げて、身を退け位を避けざれば、則ち害に遇う。此れ乃し天の常道なり。譬えば日中すれば則ち移り、月滿つれば則ち虧け、物盛んなれば則ち衰え、樂しみ極まれば則ち哀しむが如きなり）」（〈内〉河注。訓みは一部改めた）とあり、『管蠡抄』第六「功成名遂、身退、天之道也（老子）」（山内洋一郎編『本邦類書玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』四四八頁）、『玉函秘抄』巻中には「功成事立、名迹称遂、不退、身避位則遇於害（老子）」（同一三四頁）とある。院御所に兵を向けようとする清盛に対して、引退を婉曲に促すかのような発言と言えよう。以下、漢籍類を典拠とした叙述が続くが、その配列は諸本によって若干の異同が見られる。〈延〉を基準に記事配列を確認してみる。

	〈延〉	〈闕〉	〈長〉	〈盛〉	〈屋〉	〈覺〉	〈中〉
a	「功名称遂不 ^レ 退 ^レ 身避 ^レ 位、則遇 ^レ 於害」（『老子』河注）	×	①	①	①	×	①
b	漢の蕭何の故事（『漢書』）	(1)	②	②	②	①	②
c	「邦無 ^レ 道富貴恥」（『論語』）	(2)	③	⑤	×	×	×
d	「加様ノ先蹤ヲ……御運ノ尽事モ難カルベキニ非ズ」	×	④	③	③	②	③
e	「富貴之家、禄位重覺、猶 ^レ 再寒 ^レ 木、其根必傷」（『後漢書』）	△	⑤	④	×	③	④

※〈闕〉は、b c の順序は(1)(2)となるが、その置かれる位置が他本と大きく異なる。また、e は『後漢書』の一節とは異なる別の文

言に置き換えられている。

〈延・長・盛〉はa～eのすべてを有するが、〈盛〉の場合bにd・e

を続け最後にcを置く。〈屋・覚・中〉は、いずれもcを欠くほか、〈屋〉はe『後漢書』を、〈覚〉はa『老子』を欠く。これらと大きく異なるのが〈闕〉で、〈本全釈〉一八で扱った国王の恩の議論の最後に、「厥^レ對^二君与臣^一忠可^レ有^二君^一思^三道理与^二非^一抛^三何不付道理^二乎^一（厥君と臣とを對るに、忠は君に有るべし。道理と非抛とを思ふに、何でか道理に付かざらんや）」と独自本文を置き（本全釈一八—八七頁「又君ト臣トヲ並親疎ヲ分事ナク、君ニ付奉ルハ忠臣ノ法也」項参照）、それに続けてbcを述べて、前節にある「痛哉進^レ為^二君^一欲^二致^二忠^一不孝^一の罪業可^レ在^二身^一悲哉退^レ為^二父^一欲^二行^二孝^一不忠^一の逆臣心^二在^二我^一に進退^二惟^二谷^一是非難^レ弁（痛ましきかな、進みて君の為に忠を致さんと欲すれば、不孝の罪業身に在るべし。悲しきかな、退きて父の為に孝を行はんと欲すれば、不忠の逆臣我に在りぬべし。進退^二惟^二谷^一れり。是非弁^レ難し。一下一九〇—一九ウ）」の一節で結んで、その後に、「是以思^二昔保元逆乱六条判官為^二義^一……」（一九ウ）と、前節の保元の乱の逸話に繋がる。そして本節と同様にみずからの首を刎ねるよう申し出た後に「御運已^レ尽^二覚候^一（御運は已に尽きぬと覚え候ふ）」と語った後に、eに該当する異なる本文が置かれている。〈早^二黒^一〉「称」を「カナヒ」と読む。校異11参照。○彼漢蕭何ハ勲功ヲ極ニ依テ官大相国ニ至リ、劍ヲ帶シ沓ヲ著ナガラ殿上ニ昇ル事ヲ被免シカ共、叡慮ニ背ク事有シカバ、高祖重ク禁テ廷尉ニ下シテ深罪セラレキ

蕭何は漢の高祖劉邦に仕えた賢臣。建国の創業に大きく貢献、劉邦が漢王に封建されると丞相に任命され内政全般を担当、項羽との楚漢戦争が激化する中で内政を安定させ劉邦の活動を支え続けた。劉邦が皇帝となり前漢が成立すると、戦場に立った曹參らを差し置いて功績

第一と認められて、「劍履上殿」（劍を帯び靴を履いたまま宮中に登ることが許されること）「入朝不趨」（入朝に際して恭敬の意を表すものであり、臣下の義務とされた小走りを免除されること）の特権を与えられ相国に任ぜられた『漢書』卷三十九「蕭何曹參伝」、「於是乃令^二何第一^一、賜^二帶劍履上殿^一、入^レ朝不^レ趨」（是に於いて乃ち何を第一たらしめ、劍を帯びて履にて殿に上り、朝に入りて趨らざるを賜ふ）。しかし、長安の民の土地が不足していたため、使われていない公有地に入植することを願ひ出たところ（何為^二民請^二曰^一、『長安地陝、上林中多^二空地棄^一。願^二令^二民得^二入田^一、毋^レ收^二棄^一、為^二禽獸食^一』（何、民の為に請ひて曰く、「長安の地陝く、上林の中、空地の棄つる多し。願はくは、民をして入りて田するを得しめ、棄を収むること毋く、禽獸の食と為さんと」）、高祖は私腹を肥やそうとしたと誤解して激怒し、数日間廷尉にその身を拘束させた（上大怒曰、『相国多受^二賈人財物^一、為^二請^二吾苑^一』乃下^二何廷尉^一、械^二繫^二之^一。数日、王衛尉侍、前問曰、『相国胡大罪、陛下繫^二之^一暴也』（上天いに怒りて曰く、「相国多く賈人の財物を受け、為に吾が苑を請ふ」と。乃ち何を廷尉に下し、之を械繫す。数日にして、王衛尉侍り、前みて問ひて曰く、「相国胡の大罪にして、陛下之を繋ぐこと暴なるか」と）。蕭何の故事を載せるのは〈闕・延・長・屋・覚・中〉。ただし〈闕〉は、後の論語の一節とともに、これより以前に重盛が院の許に駆けつけることを宣言した一節の後ろに置かれる。蕭何も清盛もともに「相国」の地位にありながら、主君の誤解から罪を問われた（清盛の場合は問われようとした）という共通性から、この故事が引かれたか。ただし、完全に高祖の誤解であった蕭何の場合と清盛を対比すること、数日間の拘束を

「重ク禁テ廷尉ニ下シ……」と評していることの妥当性には疑問が残る。○加様ノ先蹤ヲ思侍ルニモ、御身富貴ト云栄花ト云、朝恩ト云重職ト云、極サセ御座シヌレバ、御運ノ尽事モ難カルベキニ非ズ。栄華が頂点を極めれば、あとは下降に向かうばかりという考え方は、『徒然草』第八十三段などにも見られる中世的な無常観か。〈屋・覚・中〉もほぼ同文。〈延・長〉はこの一節をc『論語』の引用の後に置くため、功成り名を遂げた後は速やかに身を引くべきという「加様ノ先蹤」であるabからの論理展開がややわかりにくくなっている。なお、〈闕〉はこの一節を欠く。重盛は清盛に対して先に「御運ハ既ニ末ニ望ヌト覚候」と述べていたが、頂点を極めたものは没落に向かうという無常観に基づいて、再度それを強調していることになる。〈早（黒）〉「尽」を「ツクル」と読む。校異24参照。○富貴之家、禄位重疊、猶再実之木其根必傷〈蓬〉のように「富貴の家、禄位重疊するときは、なほ再実の木の、其の根必ず傷るるがごとし」と訓むか。〈早（黒）〉「重疊スルトキハ」。遠藤光正は、『後漢書』明德馬皇后紀を典拠としたもので、『玉函秘抄』『明文抄』にも引かれていることを指摘する（二四頁）。『後漢書』には「今馬氏無功於国、豈得与陰・郭中興之后等邪。常観富貴之家、禄位重疊、猶再実之木、其根必傷」（今馬氏は国に功無し、豈に陰・郭の中興の后と等しきを得んや。常に富貴の家を観るに、禄位重疊なるも、猶ほ再実の木、其の根必ず傷はるるがごとし。『全訳後漢書』第二冊、汲古書院二〇〇四・1。返り点を補った）とあり、馬皇太后が、自らの出身の馬氏に十分な功績がないにもかかわらず、外戚であることによって厚遇して封爵するべきではないと説いた際に述べた言葉で、富貴の家は爵禄を重ねるとために

なるものだと意。『玉函秘抄』巻中「富貴之家、禄位重疊スルコト、猶再実之木其根必傷」（山内洋一郎編『本邦類書玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』一四四頁）。〈延・長・覚・中〉も同じだが小異がある。〈延・長〉は、〈長〉は「禄位重疊せるは」（一七二頁）とし、またいずれも〈延〉「猶再実之木」（巻一四七頁）。〈長〉「猶再実の木」とし「再実の木のごとし」と返って訓んでいる。〈覚〉は後半を「ふたゝび実なる木は、其根必いたむ」（上九九頁）として「猶」にあたる訓がない。〈中〉は後半「なをし二たびみなる木は、そのねかならずいたむがごとし」（上二〇五頁）と、〈蓬〉と同様に読む。〈闕〉には「根枯則枝葉不_レ全源_レ尽則流派竭云有_三」本文「根枯_カれば則ち枝葉全_レからず。源_レ尽_レき_レば則ち流_レれは竭く」と云ふ本文有り。一下一九ウ」とあるが、『源平闘諍録』（講談社学術文庫）は、これを『後漢書』の引用に代えたもので、出典未詳とする（上三九〇頁）。〈早（黒）〉「重疊」の送り仮名を「スルトキハ」とする。校異25参照。○邦無道富貴恥ト云本文アリ。遠藤光正は『論語』泰伯篇にある「邦有_レ道、貧且賤焉、恥也。邦無_レ道、富且貴焉、恥也」（邦道有るに、貧しくして且つ賤しきは恥なり。邦道無きに、富み且つ貴きは恥なり。新釈漢文大系一八八頁）が典拠であり、『明文抄』『玉函秘抄』にも引かれることを指摘する。『明文抄』帝道部上「邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。〈論語〉」（山内洋一郎編『本邦類書玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』一九三頁）。国に道義が行われているにもかかわらず、貧しく賤しいのは、自らの働きがないことを意味するので恥すべきであり、逆に国に道義が行われていないにもかかわらず、富み高位にあるのは、自らが道義を捨て

たことを意味するので恥すべきである」というのが『論語』の意。〈延〉「論語ト申ス文ニハ、郊ニ無道時富且貴恥ト云文アリ」（巻二一四七オ）。この一節の典拠を『論語』と明示するのは〈闕・延・長〉、〈屋・覚・中〉は出典を記さない。本節冒頭の「只末代ニ生ヲ受テ」と呼応し、道義の失われた世であることの認識を示している。したがって、今末世という無道の時にあって、富貴を極めている平氏の現状は恥すべきものであるという認識か。○去バ重盛イツマデカ命生テ乱ン世ヲモ見ベキ 本節冒頭の「只末代ニ生ヲ受テ、係ル憂目ヲ見ル重盛ガ果報ノ程コソ口惜ケレ」に呼応して、末世ニ乱世に生きる自らの悲運・悲哀を語った一節。〈延・長・中〉も同。〈屋・覚〉は、〈盛〉では本節冒頭に置かれた一節「只末代ニ生ヲ請テ、カ、ル憂目ヲ見候重盛ガ果報ノ程コソツタナフ候へ」（〈屋〉一六〇頁）を、この後に続ける。〈中〉は逆にこの一節の前にこれを置く（上―一〇五頁）。どちらも、重盛の主張を整理して集約する意図によるものか。○唯速ニ頭ヲ食レ候ベシ 〈早（黒）〉「速ニ」を「トクく」と記す。校異29参照。○一人ニ被仰付テ御ツボニ引出サレテ重盛ガ首ヲ刎ラレン事、安事ニコソ候へ 道理の失われた末世において、このような苦悩をするぐらいならば、いっそ武士に命じて頸を刎ねさせてほしい、という展開は、〈闕・延・長・屋・覚・中〉にも共通。「御ツボニ引出サレテ」と具体的に述べるのは、成親への拷問場面を想起させる表現か。「入道角シテモ猶腹居カネテ、難波・妹尾ヲ召テ、「大納言ヲメカセヨ」ト宣フ。二人ノ武仰奉テ、一間ヨリ引出シ奉テ壺ノ内ニ召居、数ノ楮ヲ支度シタリ」（一―三七六頁。〈本全釈〉一八一―二二三頁参照）。自分があれほど諫めたにもかかわらず、一旦退出した後に武士に命じて成親に

拷問を加えたことを意識し、同様に武士に命じて自分の頸を刎ねることを「安事ニコソ候へ」と述べているか。○人々はヲバイカ、聞給ヤ これまで重盛は清盛に向って主張を展開していたが、ここで周囲の一門や侍たちに対して、自らの主張の妥当性を問うている。〈闕〉「聞^レ此給麼殿原」（此れをば聞き給ふや、殿原とて。二下―一九ウ）、〈延〉「是ハ殿原イカゞ思給」（巻二一四七ウ）、〈長〉「是は、との原、いかゞ聞給や」（一―一七二頁）、〈屋〉「是人々聞給へ」（二六一頁）、〈覚〉「是をおのゝ聞給へ」（上―九九頁）、〈中〉「これきゝ給へ人々」（上―一〇五頁）など、いずれでも重盛はここで周囲の人々に呼びかける形となっている。以降、重盛の説得相手は清盛から一門・侍たちへと移行していく。○是ヲ見給ケル一門ノ人々モ、涙ヲ流シ袖ヲ絞ラヌハナカリケリ 〈延〉「一門ノ人々ヨリ始テ、侍共ニ致ルマデ、皆鎧ノ袖ヲゾヌラサレケル」（巻二一四七ウ、〈長〉も同）と、〈延長〉は一門に加えて侍も涙したと語るのは、「烽火之沙汰」で侍に召集をかける布石か。〈屋〉「其座ニ烈^{ツナナリ}給ヘル一門ノ公卿殿上人、心有モ心無モ皆袖ヲゾヌラサレケル」（二六一頁）、〈覚〉「一門の人々、心あるも心なきも、皆鎧の袖をぞぬらされける」（上―一〇〇頁）。いずれも重盛の主張と涙に共感しもらい泣きをしない者はいなかったという状況を語ったもの。鎧の袖とするのは、この時西八条に集まっている人々がみな甲冑を纏っていることを受けてであろう。なお、〈闕〉は「人々皆各被濡鎧の袖^を矣^に実^に道理至極聞矣（人々皆各々鎧の袖を濡られけり。実に道理至極と聞こえけり。二下―一九ウ）」と、重盛の主張に納得したことを記す。

【引用研究文献】

* 遠藤光正『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠(1) (『東洋研究七七号、一九八六・1』)

* 日下力『平家物語』と『保元物語』『平治物語』―成親事件話群の考察― (『国文学研究七八号、一九八二・10』、『平治物語の成立と展開』汲古書院一九九七・6再録。引用は後者による)

入道ハ口説立ラレテ、¹ヲロ泣色ニハ、²御座ケレドモ、猶ヘラヌ体ニテ、「サラバ、今ハ世ニモイロヒ侍マジ。院参モ思止候ヌ。其上ハ召誠ル者共ヲモ、死罪ニモ流罪ニモセデコソアラメ。但入道カク計申事モ全ク身ノ為ナラズ。³淨海年闌テ余命幾ナシ。⁴唯⁵子々孫々⁶。末ノ代マデモ安穩ニヤト存ル計也。其事⁷人望ニ背⁸。愚案ノ企⁹ニアラバ、何様ニモ御計ヒナルベシ」ト宣テ、内ヘ被入ケリ。小松殿ハ¹⁰弟ノ殿原ニ¹¹向テ、「イカ¹²ニ加様ノ¹³ヒケウハ結構セラレ候ゾヤ。縦入道殿コソ¹⁴老耄シ給テ、アラヌ振舞アリ共、今ハ各コソ家門ヲモ治メ、惡事ヲモ¹⁵可被¹⁶宥申¹⁷ニ、相副タル御事共候哉」ト被仰ケレバ、宗盛¹⁸已下ノ人々、苦々敷ソゞロキテゾ見エ給ケル。

【校異】 1 〈近〉「をろなみたいろには」〈蓬〉「をろ泣色には」。2 〈近・蓬・静〉「おはしけれとも」。3 〈静〉「静海」。4 〈近〉「たゝし」。5 〈近〉「しそんく」。〈蓬・静〉「子々孫々の」。6 〈近〉「すゑのよまでも」。〈蓬〉「末代までも」。7 〈近〉「にんまうに」。〈蓬〉「人望に」。〈静〉「人望」。8 〈蓬〉「ニ」なし。9 〈近〉「なにやうにも」。〈蓬〉「何様にも」。10 〈近〉「おとうとの」。〈蓬・静〉「弟の」。11 〈近〉「むかて」。〈蓬・静〉「むかひて」。12 〈蓬・静〉「大事をは」。13 〈静〉「老耄給て」。14 〈静〉「有申されへきに」。15 〈蓬〉「以下の」。

【注解】 ○入道ハ口説立ラレテ、ヲロ泣色ニハ御座ケレドモ、猶ヘラヌ体ニテ 重盛の説得に対する清盛の反応は、諸本によって異なる。

〈盛〉は半ば泣きそつになりながらも、なおも虚勢を張ってひるまぬ様子での意か。「ヲロ泣」の「おろ」は接頭語、「十分でないさまをあらわす。わずか。すこし。大体。不完全に」(『日国大』)の意。「をろ泣色」は、「半ば泣き出しそうな表情」の意。「ヘラヌ」は「減る」「臆する、心がひるむ」(『角川古語大辞典』)の否定形十様子を表す「体」で、ひるまぬ様子の意。重盛が教訓に訪れた際にも、清盛は「入道ヘラヌ体ニテ」弁明をしている(1―3八五頁。本全釈一八一―五七頁「入道ヘラヌ体ニテ」項参照)。「闘」「入道興覚左右不物言(入道、

かり興醒めして反駁することすらしい様子を表す。〈延〉は〈盛〉とは清盛の言葉と重盛の言葉の順序が入れ替わり、重盛の宗盛以下に対する言葉を聞いた上で、「入道モサスガ石木ナラネバ、道理ニツマリテ返事モシ給ハズ。牀ノハツカシサニ、障子ノ奥ヘスベリ入テヲハシケルガ、内府ノ既ニ立給ケルヲ見テ、シラケヌ牀ニ」(卷一―四八〇)と、重盛の説く道理に反論も出来ず、きまりの悪さに障子の奥へこっそりと身を隠していたが、重盛が出立しようとするのを見て、なおも平気な様子で、と語る。〈延全注釈〉は、「シラケ」(白け)は、間が悪い、興ざめなどの意に用いられるが、ここでは、ひるまず、平気な

顔で、といった意か」として、「虚勢を張っていると読むべきだろう」と指摘する（巻二―二二頁）。〈長〉は清盛描写の位置は異なるが、基本的には〈延〉と同じ内容を伝える。〈屋〉は「入道、馮切タル内府ハ角宣フ、早力モ無ニテ」と、重盛に諷められてすっかり氣落ちした様子であったとする（〈覺・中〉も同様）。○今ハ世ニモイロヒ侍マシ…… 清盛の発言内容も諸本で異なる。〈盛〉では、清盛は「これから世の中のことに口出しはすまい」と院参や捕縛者らの処刑の中止を述べた上で、今回の騒動の真意は、余命少ない自分が子々孫々の安穩を願うところにあったこと、それが人々の意に沿わないのであればどのようなにでも計らって欲しいと語り、屋内へと入っていったとされる。前項の注解に見るように、〈闘〉は「入道興覚左右^{トモカク}不物言（入道興覚めて左右も物も言はず）」と無言を貫いている。〈延〉は「哀、キ、タル殿ノ口カナ。ワ殿モ説法シ給フ。暫クオハセヨカシ。入道モ説法シテ聞セ申サム」トゾ宣ケル」（巻二―四八オ）と、清盛の言葉に踊らされて武装・集結した一門の人々を戒める重盛の発言に反発し、帰ろうとする重盛に反論するそぶりを見せるが、その発言内容は記されない。〈長〉「是ほどまでは、あるべくも候はず。たゞ、ものもおぼえぬあく党等が、申さん事につき給て、御ひが事や、いでこんざらんと、思計」と（1―一七三頁）は、西光や成親のような悪党の主張に院が動かされて、道理に合わない不祥事が起こるのではないかと案じているだけだ、と言いつくしている。〈屋・覺・中〉もほぼ同様の内容となる。○但入道カク計申事モ全ク身ノ為ナラズ……唯子々孫々末ノ代マデモ安穩ニヤト存ル計也 自分がこのように「行動するの、子々孫々の安穩を願うが故である、との主張。重盛が『後漢書』

や『論語』に依拠して、清盛の行動が一門衰亡の因となる懸念を述べたことに対する言い訳か。ただし、重盛の教訓に人々が涙を流す様子に「其事入望ニ背、愚案ノ企ニアラバ、何様ニモ御計ヒナルベシ」と、自らの行動の非を認めるかのような弱気な態度に変じている。前項の通り〈長・屋・覺・中〉は弁解する清盛を描き、〈闘〉は無言であるのに対して、〈延〉は反論を試みようとしており、この段階ではまだ対立が続いていると読める。〈早（愚）〉「静海」。校異3参照。○小松殿ハ弟ノ殿原ニ向テ これまでの重盛の発言が、主として清盛を説得するためであったのに対し、清盛が屋内に姿を消したことを受けて、改めて宗盛以下の弟達に語りかける。〈延〉では清盛が屋内に消える前、清盛の面前で重盛が人々を叱責し、赤面し萎縮する宗盛等の反応を見て、清盛が反論を試みようとしながらも言葉を失う様子が描かれる。〈闘・長・屋・覺・中〉は弟達への語りかけを欠く。さらに〈闘〉はその後の武士たちへの語りかけも欠く。○イカニ加様ノヒケウハ結構セラレ候ゾヤ。縦入道殿コソ老耄シ給テ、アラヌ振舞アリ共、今ハ各コソ家門ヲモ治メ、悪事ヲモ可被有申ニ、相副タル御事共候哉 清盛の「浄海年闌テ余命幾ナシ」「其事入望ニ背、愚案ノ企ニアラバ」という発言を受けての重盛の発言か。どうしてこのようなあさましいことを企てなさるのか。たとえ入道殿は耄碌なさって常識外れの振舞をなさったとしても、皆さんは今ではそれぞれ家門を治め、悪事をも鎮められるべきなのに、かえってそれを助長するような振舞をなさるとは、の意。「ヒケウ」について、〈新定盛〉脚注は「非興＝興ざめた事、あさましい事」（1―一九七頁）とし、〈校注盛〉頭注は「比興」の字を宛てるべきか」（1―二二三頁）とする。「比興」の用例は、『古

今著聞集』をはじめとして多いが、「非興」の用例はほとんどみられない。『孟求抄』・二「羊祐識環」「以清能―正直テ非興ヲセヌ子孫ゾ」(抄物資料集成・書陵部古活字本1ウ)。底本の「ヒケウ」に該当する語を、〈蓬・静〉が「大事をは」とするのは、「比興・非興」の意に解するためであろう。〈早(愚)〉も「大事ヲハ」とする。〈延〉「イカニ御用イナクトモ、叶ザランマデモ、各ノ加様ノ事ヲバ可被申ニテコソ候ニ、諫メ申サル、マデコソ候ハズトモ、先与シガマシク御物具カタメラレ候事、且ハ軽々異躰ノ物狂シキ有様、御振舞共哉。カクテハ世ヲ持チ、子々孫々繁昌シテ、家門之栄花、末憑ミ無コソ覚候へ」(巻二―四七ウ)は、〈盛〉で「相副タル御事共」とされている内容を、「与シガマシク御物具カタメラレ候事、且ハ軽々異躰ノ物狂シキ有様」と具体的に記し、そのような有様だから「家門之栄花、末憑ミ無コソ覚候へ」と厳しく批判している。日下力は、「イカニ御用イナクトモ……」と、「たとえ受け入れられないにしても、主張すべきことは主張すべき」という物言い、およびそれに対して弟宗盛が「赤面シテスクミ返テ、汗水ニ」なっている点に、『平治物語』で弟惟方を叱責する光頼像との共通性を指摘する(四七〇―四七一頁)。他の諸本は、前項で述べたように一門の弟達への語りかけはなく、弁解する清盛に對して、重盛がさらに厳しく咎めることになる。〈長〉『たとひ、いかなる御ひが事いで来とも、いかゞせさせたまふべき。掛畏もかしこく、少もおぼしめしよるほどの事をこそ、御こと葉にも出され候はめ。

【引用研究文献】

* 日下力 『平家物語』と『保元物語』『平治物語』―成親事件話群の考察―(国文学研究七八号、一九八二・10。『平治物語の成立と展開』汲古書院一九九七・6再録。引用は後者による)

あなまがくし』とて」(1―1七三頁)、〈屋〉「縦^レ僻事出来候共、君ヲバ何トカシ進セサセ給ベキ」(二六一頁、〈覺・中〉も同)。○宗盛已下ノ人々、苦々敷ソゞロキテゾ見エ給ケル「宗盛已下ノ人々」は宗盛をはじめとした一門の人々を指す。これまで清盛の命に盲従してきたことに對し、重盛が自覺・自重を促して叱咤したことに対して、宗盛をはじめとした一門の重鎮たちが、不快感とともに居心地の悪さを感じている様子。「ソゾロク」は「思慮、分別、自信などを失ったさまになる。そわそわする。または、もじもじする」(日国大)。これは、父清盛を教訓するために重盛が西八条に現れた場面での反応「宗盛卿苦々敷思給ヒ」(1―三八四頁)「実ニ理也ケレバ、聞人々皆苦リアヘリ」(前同)に呼応していることになる。清盛が重盛に言い負かされて、自らの非をなかなば認めるような態度であったのに対し、父の意に従ったことを叱責されて不満を募らせながらも、重盛の道理に自信を失いうろたえている様子と見ることが出来る。巻五「成親以下被召捕」で、重盛が教訓のため西八条邸を訪れた際にも、「兵杖ヲ帶給ヘル人々モ、ソゞロキテゾ見エケル」(1―三三一頁)とあったのを踏まえているのだろう。これに對して〈延〉では、「弟ノ右大將、赤面シテスクミ返テ、汗水ニナラレケリ」(巻二―四七ウ)と、一方的に言い負かされて赤面・萎縮する姿が描かれている。〈闕・長・屋・覺・中〉は一門の人々の反応を記さない。

1 内大臣ハ中門廊ニ²立出給ヒ、サモ然ベキ侍共ノ并居タリケル所ニテ仰ケルハ、「重盛ガ⁴申ツル事共、慥ニ承リツルニヤ。去バ院参ノ⁵御供ニ⁶出ハ、重盛ガ頸ノ⁷切レンヲ見テ後ニ仕ベシト覚ルハイカニ。今朝ヨリ⁸是ニ候テ、加様ノ事共、叶ハザランマデモ申バヤト存ツレドモ、此等ガ体ノ、アマリニ直騒ギニ見エツル。時ニ帰ツルナリ。今ハ憚¹⁰処有ベカラズ。猶モ御院参有ベキナラバ、一定重盛ガ¹¹頸ヲ召レンズラン。各其旨ヲコソ存ゼメ。但サモ未仰ラヌハ、¹²何様成ベキヤラン。去バ¹³人々参レ¹⁴ヤ」トテ、又小松殿ヘゾ被レ帰ケル。

【校異】 1 〈近〉「うちのおとゝは、〈蓬〉「内大臣は、〈静〉「内大臣は」。 2 〈静〉「立出て給ひ」。 3 〈近〉「なみゐたりける」、〈蓬〉「並居たりける」、〈静〉「並居たりける」。 4 〈蓬〉「申つくる」。 5 〈静〉「御共に」。 6 〈近〉「をひては、〈蓬・静〉「をいては」。 7 〈静〉「きれんを」。 8 〈近〉「これに」、〈蓬〉「是に」。 9 〈近〉「まゝに」。 10 〈近・蓬・静〉「所」。 11 〈蓬・静〉「ゾ」なし。 12 〈近〉「なにやう」、〈蓬〉「何様」。 13 〈蓬・静〉「人」。 14 〈近〉「ヤ」なし。 なお、「まいれとて」。

【注解】 ○内大臣ハ中門廊ニ立出給ヒ、サモ然ベキ侍共ノ并居タリケル所ニテ仰ケルハ 先の発言が、専ら中門の廊に着座していた宗盛以下、主立った一門に対するものであったのに対し、今度は屋外にいる侍たちに対する語りかける構成は〈延・長・屋・覚・中〉に共通。〈闘〉は武士たちに語りかける場面を持たない。また〈長〉は以下のような独自の結構を設ける。「がばとたち給つゝ、車のうちによいせられたりけるものゝ具めしよせて、むらさきぢのよろひ直垂に、はじめにはひのよろひをきて、白星のかぶと、春近といふ雑色のくびにかけさせて、おとどの右大將宗盛のくろくりげの馬に、黄ぶくりんの鞍をきて、とねりがひかへたるを、引かなぐりて乗給、うまをひかへて打立給。さもしかるべき侍どもにあひてのたまひけるは（1—17三頁）。すなわち、宗盛等を諫めた後、牛車に用意してきた甲冑を着用し、宗盛の馬に跨がって、外の武士たちに対峙したとするのである。西八条参上に際し、重代の鎧唐皮と太刀小鳥を車内に用意したと〈延〉は記すが、〈延〉ではこれが活用されることはなく重盛は直衣姿で一貫している。その点に触れることのなかった〈長〉で、突如重盛が甲冑姿

を見せるのは、続く小松殿への召兵への布石と見られる。なお、〈早（黒）〉は、ここから章段替えの印を付す。 ○去バ院参ノ御供ニ出ハ、重盛ガ頸ノ切レンヲ見テ後ニ仕ベシト覚ルハイカニ 重盛は、清盛が院参する時には自分の首を斬ってから、と説得したわけで、それを見ていた武士たちに向かって、あらためてそのことを確認している。以下重盛の言葉は〈延・長〉もほぼ同じ。〈屋〉は「重盛ガ申ツル事ヲバ、汝等不^レ承ヤ。自^レ今朝¹モ是ニ候テ加様ノ事共申閑²ト思ツレドモ、是³体ニヒタサハギニテ見ヘル間、帰タリツルナリ。院参ノ御共ニヲヒテハ、重盛ガ頸ノ召レムヲ見テ可^レ仕。サラバ人参レ」（一六一—一六二頁、傍線部の文言は〈延・長・覚・中〉にほぼ一致）と、重盛の発言中で傍線部の言葉の位置が〈延・長・盛〉とは異なる（〈覚・中〉も同）。なお、「出ハ」の読みについては校異6のように〈近・蓬・静〉は「をひ（い）ては」とするが、『国文叢書源平盛衰記』・〈新定盛〉のように「出でば」（〈早（黒）〉は、「出バ」に訂正がなく、「出バ」と読んでいたか）、ないしは「出づるは」等の可能性もあり、どれが本来的な読みであったのかは確定しがたい。 ○今朝ヨリ是ニ候テ、

加様ノ事共、叶ハザランマデモ申バヤト存ツレドモ、此等ガ体ノ、アマリニ直騒ギニ見エツル時ニ帰ツルナリ。〈延・長・屋・覚〉ほぼ同じ。〈中〉は該当する本文なし。「此等ガ体ノ、アマリニ直騒ギニ見エツル時ニ帰ツルナリ」は、「おまえたちの様子が、あまりにも大騒ぎをしているように見えたので、とりあえず帰郎したのである」の意。「時二」は原因・理由を示す語法。「直騒ギ」は「むやみに騒ぐこと」(日国大)。
 〈延・長〉は「ひたあはて」とする。○今ハ憚処有ベカラズ もはや遠慮する必要は無いだろうとは、今朝方成親助命のために参上したときには言えなかった事情を受けて、再度参上して父清盛に言うべき事を言った上は、ということ。〈延・長〉は同、〈屋・覚・中〉はこの一文を欠く。○猶モ御院参有ベキナラバ、一定重盛方願ヲゾ召レンズラン。各其旨ヲコソ存ゼメ 〈延・長〉は「首ヲ可被召申ツレバ、其旨ヲコソ存ゼメ」(〈延〉巻二一四八〇四八ウ)。(〈屋・覚・中〉は「院参の御供にをいては、重盛が願の召されむを見て仕れ」(〈覚〉上一一〇〇頁)。
 ○但サモ未仰ラヌハ、何様成ベキヤラン さきほど清盛には院参するならば自分の願を斬ってからと納得させた以上、未だに願を斬れと仰らないのは、どういふことなのか(院参する

どうにんめすつはものを
 同人召レ兵

1 内大臣ハ、「入道猶モ²腹悪キ人ナレバ、院参ノ事モヤアランズラン」ト思食ケレバ、其悪行ヲ³塞ガン為ト覚シクテ、⁴主馬判官盛国ヲ使ニテ、「重盛コソ別シテ天下ノ大事ヲ聞出シタレ。我ヲ吾ト思ハン⁵者其ハ急ギ参レ」ト被⁶催タリ。是ヲ承ル者共、オボロケニテハ騒給ハヌ人ノ、係ル仰ノ下ルハ、⁶実ニ⁷別ノ子細ノ有ニコソトテ、⁸難波次郎経遠、⁹妹尾太郎兼康、筑後守家貞、肥後守貞能等ヲ始トシテ、如法夜中ノ事ナレドモ、我先ニト¹¹馳参ケル。係ケレバ、¹²老モ若モ留ル者ハナシ。小松殿ヘト¹³三九九¹⁴テ周章テ参ケリ。入道ハ、「何事ゾ、世間¹⁴ノ物騒キハ。¹⁵是ニ¹⁶候ヤ」ト宣ケレ共、ソラ聞ズシテ馳出ケレバ、西八条ニハ青女房¹⁷老尼、若ハ¹⁸筆執バカリ残タル。少モ¹⁹弓馬ニ携²⁰程ノ者ハ一人モ

意思はないとのことだろう)、の意か。〈延・長〉同じ。〈延〉「但シ未ダサモ仰ラヌハイカナルベキヤラン」(巻二一四八ウ)。(〈屋・覚・中〉なし。○去バ人々参レヤ それでは者共こちらに來なさい。小松殿へ引き上げるに際しての、連れて來た供の者共への発言。〈延・屋・覚〉同じ。ただし、「さらば人参れ」(〈覚〉上一一〇〇頁)とする。〈長〉は大きく異なり、「今日より後は、中違奉る。重盛を重もりとおもはん人どもは、よろうて小松へまいれ。是をもて、こゝろざしのありなしを見むずるぞ」(一七一七三―一七四頁)と、父清盛との訣別を明言する。〈中〉はこの一文なし。なお、〈中〉はこの後に、「されどもからかわといふよろい、こがらすといふたちを、しのびつゝ、御車に入られけるとぞうけたまわる、よいの程こそをそろしけれ」(上―一〇五頁)との独自異文を持つが、これは〈延・長〉が、重盛が西八条邸を訪れた際に密かに相伝の唐皮と小鳥を用意していたとするのを(本全釈一八一四五頁「其時モ猶今朝ノ姿ニテ、烏帽子直衣ニテ、物具シタル者ヲバ一人モ具シ給ハズ」項参照)、ここで示しつつ、重盛の周到さを強調したもの。

ナカリケリ。是ノミナラズ、夜モ明ケレバ²¹次第々々ニ聞伝テ、洛中、²²白川ノ外、北山、西山、嵯峨、²³広隆、²⁴梅津、桂、淀、²⁵羽束、醍醐、小栗栖、日野、勧修寺、宇治、²⁶岡屋、²⁷大原、閑原、賀茂、鞍馬、大津、粟津、²⁸勢多、石山マデモ聞伝テ、²⁹馬ニ乗モノラザルモ、弓ヲ取モ取ラザルモ、³⁰出家遁世ノ古人道ニ至迄馳参ケレバ、洛中辺土ノ騷斜ナラズ。保元平治ノ乱逆ニ物懲シテ、貴賤上下肝ヲケス。入道ノタマヒケルハ、「内府ハ何ト思テ、此等ヲバ呼³¹取ヌルヤラン」³²ト、ヨク心得ズゲニテ、腹巻脱テ素絹ノ衣ニ、長念珠後手ニクリテ、縁行道シテ、³⁴ア、内府ニ³⁵中違タランモヨキ大事ヤ」ト宣テ、イト心モ発ヌ哀念仏ヲ被³⁶申ケル。

【校異】 1 〈近〉 合点あり。行の冒頭に「同人つわ物をめす」を傍書。なお、〈近〉「うちのおとゝは。〈蓬〉「内大臣は。2 〈蓬〉「腹。3 〈近〉「ふせかんためと、〈蓬〉「ふさかむ為にと、〈静〉「塞為と。4 〈近〉「しめのはうぐはん、〈蓬〉「主馬判官、〈静〉「主馬判官。5 〈蓬〉「者」なし。6 〈近〉「まことに、〈蓬・静〉「実に。7 〈近〉「へちの、〈蓬・静〉「別の。8 〈蓬〉「難波二郎経遠、〈静〉「難波二郎経遠。9 〈蓬〉「世能太郎兼康、〈静〉「世能太郎兼康。10 〈近〉「ひこのかみさたよしらを、〈蓬〉「肥後守貞能等を、〈静〉「肥後守貞能等を。11 〈静〉「ゾ」なし。12 〈近〉「おひたるも、〈蓬〉「老たるも、〈静〉「老も。13 〈近〉「周章テ」なし。なお、〈蓬〉「周章参りけり、〈静〉「周章参りけり。14 〈蓬〉「ノ」なし。15 〈近〉「これに、〈蓬〉「是に。16 〈蓬〉「候やくと。17 〈近〉「おひたるあま、〈蓬・静〉「老尼。18 〈近〉「ふてとりばかりそ、〈蓬・静〉「筆執はかりそ。19 〈蓬〉「弓馬に。20 〈近〉「一にんも。21 〈蓬〉「次第に。22 〈静〉「白河の。23 〈近〉「うづまさ、〈蓬〉「うづまさ、〈静〉「広隆。24 〈近〉「むめづ、〈蓬〉「梅津、〈静〉「梅津。25 〈近〉「はつかし、〈蓬・静〉「羽束。26 〈近〉「をかのや、〈蓬〉「岡屋、〈静〉「岡屋。27 〈近〉「おははら、〈蓬〉「大原。28 〈蓬・静〉「勢田。29 〈近〉「むまに、〈蓬・静〉「馬に。30 〈近〉「しゆつとんせいの。31 〈近〉「なのめならず、〈蓬・静〉「斜ならず。32 〈近〉「物ごもりして。33 〈蓬〉「トヨク」なし。34 〈近〉「あく」とし、くくの右に「あ」を傍書。35 〈近〉「なかつたがひたらんも、〈蓬・静〉「中たかひたらんも。36 〈蓬〉「心にも」。

【注解】 ○内大臣ハ、「入道猶毛腹悪主人ナレバ、院参ノ事モヤアランズラン」ト思食ケレバ、其悪行ヲ塞ガン為ト覚シクテ 〈盛〉の独自異文。〈闘・延・長・屋・覚・中〉いずれも、重盛が自邸に戻った後、兵の召集に移るが、〈盛〉では、重盛は父を諫めたものの、父清盛がその性格故に院参し幽閉に及ぶ可能性を憂慮し、悪行を防ぐために兵を召集したと理由を述べる。〈盛〉はわざわざ重盛の行動に説明を付けたと考えられる。前段で重盛は清盛に対して、清盛が院に対して後白河法皇幽閉の挙に出るのであれば、自分は法皇の護衛に付く、ただ

しそれでは不孝となるので、自分の首を召すように迫っている。それに対して清盛は、「院参モ思止候ヌ」「召誠ル者共ヲモ、死罪ニモ流罪ニモセデコソアラメ」と自身の決断を撤回している。それにもかかわらず重盛は「重盛コソ別シテ天下ノ大事ヲ聞出シタレ」と兵を集めることとなるため、〈盛〉では重盛が清盛の言動を信用できず、院参する恐れありとして行動に移ったと、重盛の内心を説明するのである。次節でも、〈盛〉は、重盛が家貞・貞能の二人に言伝をして清盛のもとに遣わし、兵を召集した事情を述べさせるといふ、独自異文を持つ。

諸本では、本段は、重盛が軍勢を召集することで清盛にその実力を見せるものとして描かれるが、〈盛〉ではそれにとどまらず、清盛側の様子や、重盛の清盛への対応などにかんがりの筆を費やしている。清盛を「腹悪キ人」とする描写は、〈盛〉では何度も繰り返される。本全釈の注解「サル腹悪人」(二〇—九〇頁)参照。なお、〈早(黒)〉は、ここで段落替えをせず、「ッ、ク」として前段に続ける。前段の「内大臣ハ中門廊ニ立出玉ヒ……」(三九七頁)に段落替えの指示があるように、〈早(黒)〉はそこからを「同人召兵」の章段とするのであろう。○主馬判官盛国ヲ使ニテ〈盛〉では盛国はこれまで、「行綱中言」において行綱を清盛に取り次ぐ役割で(一—三二七頁)、「入道企院参」において院の幽閉を企てる清盛の様子を重盛に伝える役割で(一—三八一頁)登場している。ここでも重盛の命を受けて兵を召集しているように、清盛・重盛双方の側近的な役割を担っている。盛国は「清盛の腹心中の腹心であり、同時に重盛のもとで家人を統制する侍所別当のごとき役割を果たしていた」「平氏家人の中心的存在であった」(元木泰雄①・二五頁)と言えるだろう。〈延・屋・覚・中〉も同じく盛国を召したとするが、〈闘〉は「以使者(被)触者(使者を以て触れられるは。一下—一九ウ)」とするのみで名を出さない。〈長〉はかななり本文を異にしており、重盛が西八条邸を去るときに、『今日より後は中違奉る。重盛を重もりとおもはん人どもは、よろうて小松へまいれ、是をもて、こゝろざしのありなしをば見むずるぞ』と、のたまひすて、御馬をとばせつゝ、いそぎ小松殿へ帰給ぬ(一—一七三—一七四頁)と、自ら兵を召集した後に小松殿に戻ったとする。「中違奉る」と清盛との対決姿勢を武士たちに明言した上で

召集をかけたとするのは〈長〉のみ。○「重盛こそ別シテ天下ノ大事ヲ聞出シタレ。我ヲ吾ト思ハン者共ハ急ギ参レ」ト被催タリ 重盛は、具体的な理由は述べずに「天下の大事を耳にした」とだけ述べる。この点は、〈闘・延・屋・覚〉同じ。〈長〉は前項の通り。〈中〉はこれに該当する文言はなし。「我ヲ吾ト思ハン者共ハ急ギ参レ」は、〈延〉「我ヲ我ト思ハン者共ハ、急ギ物具シテ参ルベシ」(巻二—四八ウ)、〈覚〉「我を我と思はん者共は、皆物ぐして馳参れ」(上—一〇〇頁。〈屋〉も同じ)とあり、〈盛〉と同じ。他方で、〈闘〉「重盛ヲ欲(重盛を)我が方に参るべし。一下—一九ウ)、〈長〉「重盛を重もりとおもはん人どもは、よろうて小松へまいれ」(一—一七三頁)、〈中〉「しげもりをしげもりとおもはんずるともがらは、いそぎ物のぐして、はせまいるべし」(上—一〇六頁)としており、ここでは「重盛を重盛と思う者は」すなわち「重盛の命を重んじる者は」といった意味になる。〈延・盛・屋・覚〉の表現については、〈覚〉「我を我と思はん者共は」を、〈全注釈〉は「われと思わん者は急ぎ物具して集まれ」(上—三一〇頁)、杉本圭三郎『新版平家物語全訳注』は「我こそと思う武勇の士は、皆武装をととのえ馳せ参れ」(一—三五八頁)の意と理解するが、右の〈闘・長・中〉のような表現を踏まえれば、「この私を主君として忠義を尽してくれようとする者たちの意」(〈評講〉上—二三〇頁)、「この重盛を重盛と思って忠義をつくしてくれるものは」(〈大系〉上—一七六頁)、「この私を重盛と思って敬意を払ってくれる者」(〈新大系〉上—一〇〇頁)と解釈するのが妥当であろう。さらに〈長〉は右の後に「是をもて、こゝろざしのありなしをば見むずるぞ」

（1—173—174頁）とし、〈延〉も右の後に「此ニテ重盛ニ志ノ有無ハ可見ト被催ケレバ」（巻二一四八ウ）として、「この命に従うかどうかによって、重盛に対する気持ちの有無を判断する」と言っているように、ここでは清盛ではなく重盛の命に従うかどうかが重要となっている。したがって、ここでの〈盛〉の「我ヲ吾ト思ハン者共」の我（吾）も、重盛自身を指している代名詞と理解するべきであろう。

○是ヲ承ル者共、オボロケニテハ騒給ハヌ人ノ、係ル仰ノ下ルハ、実ニ別ノ子細ノ有ニコソトテ、難波次郎経遠、妹尾太郎兼康、筑後守家貞、肥後守貞能等ヲ始トシテ、如法夜中ノ事ナレドモ、我先ニトゾ馳参ケル「オボロケニテハ騒給ハヌ人」、つまり並大抵のことでは慌てられることのない人であった重盛が、このような命を下したので、余程の子細があるのだらうと家人達は我先にと集まる。「別ノ子細ノ有ニコソ」とあるように、ここでは召集の理由が武士たちには示されていない。〈盛〉には、「入道院参企」にも、独自異文だが、清盛が重盛に、急いで来てほしい、申し上げたいことがあると使者を立てたけれど、重盛は「強ニサハガヌ人ニオハシケレバ」（1—138—1頁）、急いで出られることはなかったとする。この「騒がぬ人」という把握は、〈延・屋・覚〉にも二箇所ずつ見られ、重盛に与える一貫した性格と言える（池田敬子・二九頁、四三頁）。池田は、重盛のこうした描写に対して、重盛の冷静沈着を印象づけつつ、その人が「さはがれ」たる時は王法破滅の危機と思わせるのであると解する（二九頁）。なお、〈闘・延・長・屋・覚・中〉いずれも同様だが、家人の名前を列挙するのは〈盛〉のみ。他は、〈延〉「是ヲ聞テ、『少ノ事ニハサハギ給ハヌ人ノ、カ、ル仰ノ有ルハ』トテ、侍共、入道ニハカクトダニモ申サ

デ、我先ニトゾ馳参ケル」（巻二一四八ウ）、〈覚〉「おぼろけにてはさはがせ給はぬ人の、かゝる披露のあるは、別の子細のあるにこそ」とて、皆物具して、我もくんと馳参る」（上—100頁）のように記すのみ。〈闘〉は「無程」成二万余騎矣（程無く一万余騎に成りにけり。一下—120オ）と具体的な人数を示すが、簡略。また、〈闘・長・屋・覚・中〉では、後述の通り、西八条邸で、清盛が貞能を召して問う場面があるため、少なくとも貞能は重盛邸に参じていなかったことになる。〈盛〉がここで挙げる難波経遠、妹尾兼康、平家貞、貞能は、いずれもこれ以前に清盛の腹心として登場した人物。経遠・兼康については並記されることが多く、平氏とは「正盛・忠盛らが西国国守に補任されたことを通して主従関係を結んだ」「先祖相伝の家人」である（高橋昌明・一五一頁）。〈盛〉においては、これまで、巻三で「主ヨリ外ニハ恐シキ事ナシト思テ前後ヲ不知ケル」（1—135頁）人物として、清盛の命を受けて摂政基房に報復し（本全釈八—162頁「難波・妹尾ニ下知シ給ケルハ」項参照）、巻五・六で清盛の命で成親を捕縛し折檻を加えている（本全釈一六—165頁「経遠・兼康が大納言ニ情ナク当たりケル事、返々モ奇怪也」項、同一八一—181頁「入道角シテモ猶腹居カネテ、難波・妹尾ヲ召テ、「大納言ヲメカセヨ」ト宣フ」項参照）。経遠は、この後、成親の謀殺にも関与したように描かれている（巻七「成親卿流罪」、巻八「大納言入道薨去」）。なお、妹尾を〈早（黒）〉は「世能」と記す。校異9に見るように、〈蓬・静〉も同様。それ以前の記事においても、〈早（黒）〉や〈蓬・静〉は同様に「妹尾」を「世能」と記している。次に、家貞・貞能父子は、「かつて一門の構成員であったものの子孫で、早く家人化した存在」

である（高橋昌明・一五一頁）。家貞については、〈盛〉においては、巻一で闇討ちされようとする忠盛を護衛する郎等として（本全釈一・一七頁「愛ニ忠盛朝臣ノ郎等ニ……」項参照）、巻二で清盛の命を受けて肥前国日向通良を討ち手柄を挙げ（同六・三頁「筑後守家貞」項参照）、巻三で清盛に摂政基房に報復するように命じられる（同八・一五五頁「家貞」項参照）。その子貞能については、巻二で山門の大衆が下落するとの報を受けて御所の守護に当たり（同七・一九頁「大夫尉貞能」項参照）、巻五では清盛に成親以下謀反人の捕縛を命じられ（同・一五・六〇頁「肥後守・飛驒守ヲ召テ、貞能・景家・健二承レ」項参照）、巻六では成親問詰の場面で、清盛に命じられて西光の白状を持参し（同・一八・一九頁「入道立直テ大ノ音ヲ以テ……」項参照）、同じく巻六で院の幽閉を決定し武装する清盛の傍に控える（同・一八・一一四頁「貞能々々」ト召ケレバ……」項参照）。この後も、特に貞能は、重盛の熊野詣でに供をし（巻十一「熊野詣」）、西国に追討に赴き（巻二十七「周武王誅紂王」）、將軍資盛に従って宇治方面に向かうなど（巻三十「平家兵被向宇治勢多」）、最後まで平家とともに行動するその活躍が描かれている（岡田三津子・七〇・七三頁に「家貞・貞能関連記事一覧」としてまとめられる。また次節「内大臣ハ著到披見ノ後、家貞・貞能ヲ召テ子細ヲ下知シ給テ、西八条へ遣レケリ」項も参照）。これらはいずれも、各項の注解で述べたように、諸本間で人名に異同や混乱があり、また史実とは認めがたい逸話が多い（本全釈一五・一六〇頁）。そもそも、家貞は『顕広王記』仁安二年（一一六七）五月二十八日条に「入道筑後前司平家貞死了（八十^{七カ}云々）」とあるように、すでに死去している。しかし、彼ら四名が『平家物語』、あ

るいは他の軍記において、繰り返し重要な家人として描かれていることは確かである。経遠・兼康は、『保元物語』（金刀比羅本）上に清盛に従う兵に、「郎等には、季貞・貞能・盛国・盛俊・難波二郎（引用者注、経遠）・瀬尾太郎（同注、兼康）・古市伊藤武者（同注、景綱）・子息伊藤五・伊藤六（後略）」（旧大系九五頁。貞能の名もある）、『平治物語』（金刀比羅本）中で重盛に付く兵に「今度は難波二郎・同三郎・妹尾太郎・伊藤武者を始めて百騎計中にへだゝる」（旧大系二六頁）とあるように、保元・平治の乱以来、清盛や重盛に従っていた。また、家貞・貞能父子については、家貞は右の『顕広王記』の逝去記事に続けて「平家第一郎等、武士之長也」と、貞能は『吾妻鏡』文治元年七月七日に「故入道大相国専一腹心者」とあり、「清盛家の政所の家司・家令をつとめて家政支配面で活躍する一方、筑前守・肥後守などを歴任し、その間に鎮西に多くの所領を獲得して勢力基盤をきず」（田中文英・二七頁）いていたように、いずれも平家、そして清盛の第一の家人としての地位にあった。例えば、西園寺家文書『御厩司次第』によると、院御厩司を忠盛・清盛・重盛・宗盛・知盛と平家が務める間、院御厩案主（別当や預の下にあって、御厩の実務を行う重要な職）を平家貞・貞能父子が世襲していたことが知られている（木村真美子・三四頁）。さて、右に見たように、ここまでは清盛の傍に侍し、忠実に仕える経遠や兼康、家貞、貞能の姿が描かれていたのであり、〈盛〉が、ここで具体的に彼らの名を挙げて重盛の召集に応じたとするのは、それだけ皆が重盛に一目置き、その言動に畏服していたことを強調するのだろう。なお、〈長〉はここでも本文を異にしている。すなわち、西八条邸での重盛の呼びかけを受けて、「是を聞て、西八条にありけ

る侍ども、入道殿にかくとも申さで、我さきにとぞ馳参る」（1—174頁）として、さらに、「おぼろけにてはさはぎ給はぬ人の、かゝる仰のくだるは、別の子細あるとおぼゆとて、夜、明にければ、洛中の外、白川、西京、木はた、伏見、宇治、岡の屋、淀、羽束瀬、醍醐、小栗栖、日野、勧修寺、大原、志津原に至まで、我おとらじと馳あつまりければ」（1—174頁）と、諸本がこの後に挙げる京都周辺の地名を先に列挙する。ところで、このような重盛による軍勢召集については、史料上で確認できないことから史実ではなく、『平家物語』による虚構と考えられるだろう。ただし、この時点で重盛は、「清盛が平治の乱以後実質的に有してきた国家的な軍事警察権を継承」しており（元木泰雄②・二四〇頁）、「大和に近接する伊賀・伊勢に多くの家人を有し、京畿内の治安維持を担当し」（同二四五頁）ていたため、軍勢を召集する権限を有していたとみられる。また清盛引退後は「重盛はこの任務遂行（引用者注、国家の軍事指揮権）のため、当然、清盛の家人の相当部分を引き継いだはず」（高橋昌明・一五三頁）であり、重盛の命に家人達が従うのは当然であったと言える。一方で、後白河院の命をうけた平経盛の出陣を清盛が制止したことがあり（『玉葉』安元三年（一一七七）四月十九日条）、仮に重盛が軍勢を動かしたとしても、清盛は意に反するものであれば止めるだけの力はあったと推測される。そういった史実に対して、『平家物語』では重盛の軍事指揮権のもと、家人達が清盛よりも重盛の命を重んじたことが強調され、清盛がそれに対して為す術も無かった様子が描き出されていることになる。なお、「如法夜中ノ事ナレドモ」とするのは〈盛〉のみ。当日の時間経過は〈盛〉を含め、特に諸本にも記されていない。〈盛〉

（四）

では、夜中にも関わらず、各所から兵が集まったことを強調したいのだろう。「如法」は院政初期には「ニョホウ」と音読することが一般化し（原卓志・一三頁）、院政期後半以降、時刻を表す名詞を修飾する例が多くなり、「文字通り」「ちょうど」といった意味で用いられるようになる（七頁）。『平家物語』にも用例は多く、〈盛〉巻十九「佐々木取馬下向」如法暁ノ事ナレバ、旅人モ未見ケルニ（3—二〇九頁）などがある。○係ケレバ、老モ若モ留ル者ハナシ。小松殿ヘトテ周章テ参ケリ 〈盛〉の独自異文。〈盛〉は誰も彼もが小松殿へ参集したことを強調し、次の西八条邸の描写に続ける。○入道ハ、「何事ゾ、世間ノ物騒キハ。是ニ候ヤ／＼」ト宣ケレ共、ソラ聞ズシテ馳出ケレバ 〈闕・延・長・屋・覚・中〉は、洛中洛外の武士が重盛邸に集まった描写の後に、西八条邸および清盛の様子を描写する。それに対して〈盛〉では、本項と次項で一度西八条邸の様子を描いた後に、武士達が重盛邸に集まったことを述べ、その後改めて清盛の様子を描く。つまり、清盛の描写を分断した形になっている。これは、〈盛〉のみ経遠・兼康・家貞・貞能の平家家人の名前を具体的に列挙したことと関わる（前々項参照）。すなわち〈盛〉では、清盛に忠実に仕えていた家人までが重盛のもとに参じたことから、その後に西八条邸に武士が一人も残っていないかったことを、まずここで描くのである。さらにこの後、洛外からも兵が集まったことを記した上で、動転する清盛を描くことになる。ここでは清盛が、「何事だ、世間が騒がしいのは。皆ここに控えておれ、控えておれ」と留めようとするも、皆わざと聞こえないふりをして、西八条邸を出て重盛のもとに馳せ向かったとする。清盛よりも重盛の命に従う様子を強調した描写と言えよう。〈闕・

延・長・屋・覚・中」にはこのような表現はないが、〈屋・覚・中〉は、「小松殿にさはぐ事ありと聞えしかば、西八条に数千騎ありける兵共、入道にかうとも申も入らず、ざぐめきつれて、皆小松殿へぞ馳たりける」(《覚》上―一〇一頁)とし、数千騎の兵が清盛に何も言わずに小松殿に参ったとする。聞こえないふりをする〈盛〉の方が、より清盛に冷淡と言えようか。西八条邸で清盛との対決を宣言した〈長〉もまた、別の形で武士たちの重盛重視の姿勢を明確にするものである。『ソラギかず』は「Soragicu. ソラキカズ(空聞かず)」例、Soragicu. suru. (空聞かずをする) ある事を聞かないふりをする、あるいは、そのように見せかける」(『邦訳日葡辞書』五七五頁)。○西八条ニハ青女房、老尼、若ハ筆執バカリ残タル。少モ弓馬ニ携程ノ者ハ一人モナカリケリ(《闘》なし。《延》「西八条ニハ、青女房、古尼公、自ラ筆取ナンドゾ少々残タリケル。弓馬ニ携ル程ノ者ハ一人モナカリケリ」(卷二一四九オ。《長》も同じ。1―一七四頁)、《屋》「西八条ニハ、青女房筆取ナンドゾ候ケル。弓矢ヲ取テ事ニ可遭者ハ一人モ見ヘズ」(二六三頁)、《覚》は前半がなく「すこしも弓箭に携る程の者一人も残らず」(上―一〇一頁)、《中》は「西八条には、ちくごのかみさだよしが外には、弓やにたづさわりぬべき人一人もなし、女房共、おいたるあま、ふでとりなどぞ候ける」(上―一〇六頁)と前後逆にする。ただし、兵が「一人モナカリケリ」とするのは誇張した表現で、〈長・屋・覚・中〉はこの後に、清盛が西八条邸に残っていた貞能を召し問う場面がある。〈中〉がわざわざ「ちくごのかみさだよしが外には」(傍線部)と加えるのは、このことによる。「青女房」は年若い女性で「老尼」と対になる。「筆執」は「文筆にかかわることを主な業務とす

る役。書き役。右筆」(日国大)で、つまり「弓馬に携」る者がいなかったということである。○是ノミナラズ、夜モ明ケレバ次第々ニ聞伝テ、洛中、白川ノ外、北山、西山、嵯峨、広隆、梅津、桂、淀、羽束、醍醐、小栗栖、日野、勧修寺、宇治、岡屋、大原、閑原、賀茂、鞍馬、大津、粟津、勢多、石山マデモ聞伝テ 地名の列挙については〈闘〉なし。他は小異があり、〈延〉「夜アケニケレバ洛中ノ外、白川、西京、鳥羽、羽束志、醍醐、小栗巢、勧修寺、小原、志津原、瀬料ノ卿ニアフレ居タリケル」(卷二一四八ウ)、〈長〉「夜、明にければ、洛中の外、白川、西京、木はた、伏見、宇治、岡の屋、淀、羽束瀬、醍醐、小栗栖、日野、観修寺、大原、志津原に至まで、我おとらじと、馳あつまりければ」(1―一七四頁)、《屋》「淀、ハツカセ、宇治、岳ノヤ、醍醐、小栗栖、日野、勧修寺、大原、シツ原、セレウノ里、梅津、桂ニ」(二六三頁)、《覚》「淀・はづかし・宇治・岡の屋・日野・勧修寺・醍醐・小栗栖・梅津・桂・大原・しづ原・せれうの里」(上―一〇〇頁)、《中》「あるいは、よど、はづかし、うち、をかの屋、だいが、をぐるす、日の、くわんじゆ寺、をほら、しづはら、せれうのさと、むめづ、かつらに」(上―一〇六頁)とする。「是ノミナラズ」と書き出すのは〈盛〉のみ。ここでは〈盛〉のみ先に経遠・兼康・家貞・貞能を挙げていたことを受けて、「これら近辺に仕えている平家の家人だけではなく」として、洛外の武士までも集まったとするのである。ついで〈延・長・盛〉が「夜モ明ケレバ」とし、ここで日が変わっていることを示す。以下、諸本が挙げる地名について見てみる。なお、その本が独自に挙げる地名には傍線を施した。まず、〈全注釈〉は、《覚》の本文において、南(淀・羽束瀬・宇治・岡屋)、

東（日野・勧修寺・醍醐・小栗栖）、西（梅津・桂）、北（大原・静原・芹生の里）の順に挙げているのに対して、〈屋〉では南・東・北・西と、反時計回りに挙げているとする（上―三二―三二頁）。これをもとに見ると、〈中〉も〈屋〉に同じであることが分かる。これらに対して、〈延・長〉は始めに「白川・西京」の都の中心部に近い東西の地名を挙げるのが特徴的で、その後周辺地域に移って、〈延〉は南（鳥羽・羽束志）、東（醍醐・小栗巢・勧修寺）、北（小原・志津原・瀬料ノ郷）と記して西（梅津や桂）は省かれる。〈長〉は南（木はた・伏見・宇治・岡の屋・淀・羽束瀬）、東（醍醐・小栗栖・日野・勧修寺）、北（大原・志津原）と記してやはり西は省かれる。これらに比して、〈盛〉は一目して地名の多さに気づく。まず「白川、北山、西山」から始まるのが特徴で、東・北・西と都を取り囲む地名を順に挙げている。そのまま洛西の地名（嵯峨、広隆、梅津、桂）を挙げ、次いで、洛南（淀、羽束）、洛東（醍醐、小栗栖、日野、勧修寺）を挙げるが、再び南に戻って（宇治、岡屋）を挙げてから、洛北（大原、閑原、賀茂、鞍馬）に移る。そして最後に近江に移り、（大津、粟津、勢多、石山）を挙げるのが特徴である。南、東、南と移動することについては特に理由は認められない。「広隆」は広隆寺ではなく、太秦を指すと考えられ、「うづまさ」と読んだか（校異23参照）。『書言字考節用集』に「太秦〔ウヅマサ〕城州葛野郡」広隆〔全上〕」（ウ乾坤・第一冊・七五・七）、陽明文庫蔵『恋塚物語』に「くわりんじ（引用者注、広隆寺か）とかきては、うづまさでらとかや」（恋田知子・四八頁）とある。また、『保元物語』（旧大系三七四頁）によれば、「左京大夫教長卿と、近江中将成雅と二人は、広隆なる所に出家して有ければ」の「広隆」に「うづまさ」と

振り仮名を付す版本もある。○馬二乗モノラザルモ、弓ヲ取モ取ラザルモ、出家遁世ノ古入道ニ至迄馳参ケレバ、洛中辺土ノ騷斜ナラズ
 〈闘・長〉なし。〈延〉「侍、郎等、古入道マデモ次第二聞伝々タシテ、或ハ馬ニ乗モアリ乗ヌモアリ、或ハ鎧キテ未ダ甲ヲキヌ者モアリ、或ハ弓持テ矢負ヌ者モアリ、或ハ矢ヲ負テ弓ヲトラヌ者モアリ。加様ニ我芳ラジト馳集ニケレバ」（卷二―四八ウ―四九オ）、〈寛〉「あぶれるたる兵共、或鎧着ていまだ甲を着ぬもあり、或は矢おうていまだ弓を持たぬもあり。片鎧踏むや踏まずにてあはてさはいで馳参る」（上―一〇〇頁。〈屋・中〉もこれに近い）。先の「老モ若モ留ル者ハナシ」と同様、出家遁世した年老いた入道まで、あらゆる者が集まったことが強調される。『承久記』（続群書所収『承久兵乱記』）に、「よしとき大しやうとして、はせ参べく候。そのため、ふるにうだうどもは、せうくかまくらにのこしとづめ候て」（二十上―一六四頁）とあるように、留め置かれるような古入道まで駆けつけたとするのである。「洛中辺土ノ騷斜ナラズ」とするのは〈盛〉のみ。ここでの「辺土」は先に列挙されたように都の外側、洛外を指す。卷二「徳長寿院導師」「一人三公・卿相雲客、洛中辺土・貴賤上下、参集聴聞結縁シケリ」（一―一〇頁）。○保元平治ノ乱逆ニ物懲シテ、貴賤上下肝ヲケス
 〈盛〉の独自異文。都が戦乱に見舞われた保元・平治の乱に懲りている人々は、皆驚き慌てた。「物懲」は、「物事にこりること。こりごりすること」（『日国大』）。〈近〉「物ごもりして」は誤り。○入道ノタマヒケルハ、「内府ハ何ト思テ、此等ヲバ呼取ヌルヤラン」ト、ヨク心得ズゲニテ、腹巻脱テ素絹ノ衣ニ、長念珠後手ニクリテ、縁行道シテ、「ア、内府ニ中違タランモヨキ大事ヤ」ト宣テ、イト心モ発ヌ

哀念仏ヲ被申ケル　ここで再び西八条邸の清盛に視点が移る。清盛は、「重盛は何を思つて洛中洛外の武士達を呼び集めたのだろうか」とよく理解できない様子で、武装を解き、「重盛と仲違いしては一大事である」と心からでもない念仏を唱えたという。「ヨキ大事」は、〈延〉「南都延暦寺三井寺」二成ナバ、ヨキ大事ニテコソ有ンズラメ（巻四一四七ウ）と同様に、「一大事」「大変な事態」の意で用いられている。重盛の強攻策に為す術なく動揺した清盛を描く。これに近いのは〈延〉で、「入道宣ケルハ、『内府ハナニト思テ、是等ヲバ呼取ヤラン』トテ、ヨニ心得ズゲニテ、腹巻ヌギ置テ、素絹ノ衣ニ袈裟打懸テ梃行道シテ、心モ発ヌ念誦シテウソ打吹テ、『内府ニ中違テモヨキ大事ヤ』トゾ被思ケル」（巻一一四九オ）とする。清盛は、院の幽閉を企てた際、「赤地錦鍔直垂ニ、白金物打タル黒糸威ノ腹巻ニ」（一―三七八頁）と武装し、重盛が諫言に來た際に「入道既ニ腹巻ヲ著給ケル上ハ」（三八二頁）という状態で、重盛に對面する際にも「腹巻ノ上ニ薄墨染ノ素絹ノ衣ヲ引懸テ出給タリケルガ」（三八五頁）とあり、腹巻を付けた戦闘態勢を取っていた。ここで「腹巻脱テ素絹ノ衣ニ」着替えたのは、重盛の軍勢召集に氣圧されて、ついに清盛も折れて院に對する武力行使を完全に断念したことになる。さらに、清盛は「長念珠後手ニクリテ、縁行道」し、「イト心モ発ヌ哀念仏」をするという、動揺を隠せず心のこもらない念仏を唱える。類似的表現として、巻五「成親以下被召捕」に「相国ハ素絹ノ衣ヲ着、尻切ハキ、長念珠後手ニ取テ」（一―三三四頁）とあった。念珠を後ろ手に持ち、繰るところには、清盛の落ち着かない様子が表れている。「縁行道」は「経文や念仏を唱え、あるいは冥想などしながら仏堂や屋敷の縁側、長廊下などを

歩くこと」（『例文仏教語大辞典』。『愛宕地蔵物語』「ちやうじや、おりふし、ゑんぎやうだうしておわせしが」（『室町時代物語大成』第一―四六四頁）など中世の物語に頻出。〈盛〉では、巻九「堂衆軍」にも「翌日上人（引用者注、源空）大谷庵室ニ縁行道シ給ケルガ」（二―一四頁）とある。ここでは、次節「猶縁行道シテ御座ケルガ」と同じく、清盛が信心からというよりも、不安を隠せず歩き回っている様子が窺える。「縁行道」は、前掲の〈延〉の他、後掲の〈闘・長〉にも見られる（ただし〈延・長〉は「梃行道」とする）。宮腰直人は、これら〈闘・延・長・盛〉の「縁行道」を分析する中で、法会における行道の持つ見る・見られるという関係性に注目、〈盛〉では縁行道して哀念仏する清盛の姿が家貞・貞能の眼に晒されて、「二人を前に平静を装わねばならないという意味において、清盛の「縁行道」は演技の様相を帯びてくる」（三一九頁）と指摘する。そして「縁側に出て「行道」すること」に注目し、本来室内に居るべき清盛が「身分違いの縁側へと足を運ばざるをえな」くなり、「庭上」の二人にその身を晒して、「ひたすら「縁行道」をし続け、曖昧な「哀念仏」を唱えた清盛は、しかし自らの思惑を越えたところで、救われたのではないだろうか」（三二一―三二三頁）と指摘する。「心モ発ヌ」は信仰心も無く、の意。「哀念仏」は「もの悲しい念仏」「しみじみとした様子の念仏」といった意であろう。信心からではないが、為す術も無くうろうろと歩きながら念仏を唱えるしかない清盛の様子である。ただし、「哀念仏」の用例は見いだせず、〈延〉に「高念仏シテ梃行道ス」（巻五―一六オ）とあるように、「梃行道」と合わせて用いられる「高念仏」の誤写から生じた表現の可能性もあろうか。さて、〈延・盛〉

に対して、他の諸本は異同が大きい。〈闘・長・屋・覚・中〉は、い
 ずれも清盛が西八条邸に残っていた貞能を召し、対話を通して清盛が
 反省に向かう様子を描き、そのなかで以上の動揺する清盛の様子も描
 写される。〈屋・覚・中〉は、〈覚〉「其時入道大に驚き、貞能を召して、
 『内府は何と思ひてこれらをば呼びとるやらん。是で言ひつる様に入
 道が許へ討手なシどやむかへんずらん』との給へば、貞能涙をはら
 く」と流いて、『人も人にこそよらせ給ひ候へ。争かざる御事候べき。
 今朝是にて申させ給ひつる事共も、みな御後悔ぞ候らん』と申ければ、
 入道、内府に中たがふてはあしかりなやと思はれけん、法皇迎へま
 いらせんずる事も、はや思とゞまり、腹巻脱ぎをき、素絹の衣に袈裟
 うちかけて、いと心にもおこらぬ念珠してこそおはしけれ」（上—
 一〇二頁）のように、貞能に「重盛は何を考えて軍勢を召集したのか、
 こちらに討手を差し向けるつもりか」と動揺する清盛に対して、貞能
 は「そのようなことはありません。（重盛は）ここで申されたことも
 後悔されているでしょう」と答え、重盛との仲違いを恐れた清盛は法
 皇幽閉のことも思いとどまり、武装を解いたとなっている。一方で
 〈闘・長〉では、さらに清盛から重盛に使いが出され、和解まで描く
 のが特徴である。まず〈闘〉では、「西八条 只候 貞能一人」（西八
 条には只貞能一人候ひけり。一下—二〇オ）と貞能しか残っていな
 いことを強調する。次いで「入道召貞能 只今有誰 歟被問 者誰
 不候 申此不思議事哉於然無兵 歟大將如何三位中将若何言君
 達侍共皆申 小松殿 入道猶不審氣立 大床 乍 嘯打吹 縁行
 道 此 有 人 歟 彼 有 人 歟 此 面 道 彼 面 道 指 臨 々 々 雖 見 回 無
 兵一人」（入道、貞能を召して、「只今誰か有る」と問はれければ、「誰

も候はず」と申す。「此は不思議の事かな。然にても兵は無きか。右
 大將は如何に。三位中将は若何に」と言へば、「君達も侍共も皆小松
 殿へ」と申す。入道猶不審氣にて、大床に立ち、嘯打吹きながら縁
 行道して、「此れに人有るか、彼こに人有るか」とて、此の面道彼こ
 の面道を指し臨き指し臨き見回しけると雖も、兵一人も無かりけり。
 一下—二〇オ）と、貞能を召した清盛は、兵達がいなことに動揺し、
 宗盛や知盛の所在を尋ねるも、彼らもみな小松殿に向かったことを知
 らされ、縁行道しながら面道をのぞき込んでまで兵を探す姿が戯画化
 されて描かれる。それにより重盛と仲違いをすることの重大さを知っ
 た清盛は、「入道与内府 中違不 叶事哉大に被騒 矣又曰此体
 隙に耶大納言。余党応寄来可為 如何 言貞能 応 然事候 可
 有能様 御計 候御子依御子 候小松殿違御中 御坐覚 悪候申（入
 道、「内府と中違ひては叶はぬ事かな」と、大きに騒がれけり。又曰
 ひけるは、「此の体の隙にや、大納言の余党寄せ来たるべし。如何が
 為べき」と言ひければ、貞能申しけるは「然る事候ふべし。能き様に
 御計ひ有るべく候ふ。御子も御子に依り候ふ。小松殿に御中違ひ御坐
 しては悪しく覚え候ふ」と申しければ。一下—二〇オ）などと、貞
 能とやり取りした後、貞能を重盛のもとに派遣し、「脱捨腹巻 索
 絹の衣打 掛袈裟 指入持仏堂に不発心に念誦 居矣（腹巻を脱ぎ
 捨て、素絹（素絹カ）の衣に袈裟を打ち掛け、持仏堂に指し入り、心
 にも発らぬ念誦してぞ居たりける。一下—二〇オウ）」と武装を解き、
 念誦をする。その後、貞能が使いとして重盛のもとに出かけて清盛の
 言葉を伝え、それを聞いた重盛が不孝を詫び、さらにそれを聞いた清
 盛が法皇幽閉を思いとどまることが描かれる。「貞能參小松殿 申此

由[○]者重盛又流涙波羅々々言我適乍受人界に生[○]成[○]彼[○]惡人の子[○]併作罪業[○]悲子逢親[○]可[○]申[○]對望[○]我乍[○]子被[○]對[○]望親[○]事過[○]此逆罪有[○]何乎涙不搔敢[○]泣[○]一門人人并侍共莫[○]不[○]皆流[○]涙[○]重盛承此仰[○]御返事畏承候畢左様思[○]食[○]留院參[○]候之上爭可[○]奉[○]乖[○]仰候[○]乎又何事[○]明日謚令[○]參上[○]可[○]申承[○]候[○]申給[○]入道驚[○]此事共[○]可[○]剪[○]大納言預[○]事[○]被打置[○]可[○]奉[○]流[○]法皇[○]事[○]被[○]思留[○]矣[○]貞能、小松殿に參り此の由を申しければ、重盛又涙を波羅々々と流して言ひけるは、「我適人界に生を受けながら、彼る惡人の子と成りて、併しながら罪業を作る悲しさよ。子は親に逢ひてこそ對望すと申すべきに、我は子ながら親に對望せられん事、此れに過ぎたる逆罪何か有らんや」とて、涙も搔き敢へず泣きたまへば、一門の人人並びに侍共、皆涙を流さざるは莫し。「重盛、此の仰せを承り、御返事畏つて承り候ひ畢ぬ。左様に院參を思し食し留まり候ふ上は、争か仰せを乖き奉り候ふべき。又何事も明日、謚かに參上せしめ申し承るべく候ふ」と申し給ひけり。入道此の事共に驚き、大納言の頸を剪るべき事も打ち置かれて、法皇を流し奉るべき事も思ひ留まられたまひぬ。一下一二〇ウ。山下宏明は、〈闕〉のこの箇所を、他の諸本よりも増補を思わせる箇所として指摘する（一〇二頁）。次に〈長〉は、やはり「侍に、誰々かある。『貞能ならでは一人も候はず。』『さるにても誰かある。』『小松殿へみなまいりて、貞能が外は、一人も候はぬものを。』（一―一七四頁）と、やはり貞能しか残っていないことを強調する。そして〈闕〉同様、「入道殿、『さるにても』とて、走出て見給へば、実も、侍には人老人もなし。こゝにやある、かしこにやあると、爰のかくれ、かしこのゑんどう、のぞきありき給けれども、

人一人も見えざりけり。『こはいかに、内府に中違ては、片時も世にたちまひてあらん事は、かなふまじかりけるものを』とてこそ、うそぶきて、よに心得ず、けふ覺げにて、はら巻ぬぎをきて、挺行道して、そけん[○]の衣に、袈裟うちかけて、いと心もおこらぬ念珠くりてぞおはしける」（一―一七四頁）と、周章狼狽して兵士を探し回り、重盛との仲違いを恐れ、縁行道して、念珠を繰る姿が描かれる。次いで、貞能に重盛と和解を勧められた清盛が、忠度に重盛との仲介を頼み、忠度が重盛の元に出かけて清盛の言葉を伝え、それを聞いた重盛も不孝を詫び、和解する様子が描かれる。「貞能申けるは、『御子も御子にこそよらせ給候へ。なにかくるしく候べき。御退望候て、御中をなをらせまし』候へかしとこそ存候へ」と申ければ、（中略）（清盛は忠度に）『なだめ給はんずる様は、「此ほど世申しづかならねば、法皇を暫鳥羽殿にをきまいらせて、世をしづめんとすれば、嫡子に捨らるゝこそかなしけれ。老て子にすてらるゝは、朽木の枝なきにこそ。院參にをいては思とゞまり候いぬ。自今以後は、内府のはからひ申さん事をば、一切背まじきぞ。きと立寄給へ。なに事も申承べし」と、のたまふべし』とぞ申されける。薩摩守、小松殿へ馳向て、此よしを申されければ、小松殿、袖を顔ををしあてゝ、はらはらと泣給。いと久あての給けるは、『をろかなる親にもしたがふは、能子なり。（中略）父の命にしたがひて、君を捨奉候はん事は、恩を知らぬ畜生ににたり。父を捨て、君の御方へまいり候はゞ、又不孝の重盛、罪深し。』（中略）扱、小松殿は、西八条殿へ入せ給てこそ、御中は和平し給けれ」（一七四―一七六頁）。このように〈長〉では、この場面にはかなりの分量が割かれ、父子の心が通じ合う様子が描かれている。島津忠夫は、

この場面で〈長〉が「平曲や謡曲で著名となった忠度を持ち出すことは、やはりそれらが盛んに語られた南北朝から室町期にかけてのことではないか」とする（一八六頁）。おそらくは〈延〉のように、ただ西八条邸で動揺する清盛を描くのが原型に近いのではないだろうか。そこに〈闘・長・屋・覚・中〉のように、貞能との対話を通して武装を解き院参を諦める清盛を描くようになったのだろう。さらに〈闘・長〉では重盛とのやり取りを通して二人の和解まで記されるよ

うになったのではないか。つまり、本来は、重盛の命で直ちに近隣の武士が集まったとする、重盛の実力を示すところにあった逸話が、対する清盛の心境の変化も描こうとすることで、貞能との対話が登場し、さらに清盛と重盛とのやり取りと和解にも重点が置かれるようになったのである。〈盛〉の改編も同様の方向性によるものと考えられるが、〈闘・長〉とは異なり、次節に見るように、重盛から清盛に対する働きかけが描出されている。

【引用研究文献】

- * 池田敬子「ゆゆしく大様なる人―覚一本『平家』重盛検証―」（『国語国文』六五巻四号、一九九六・4。『軍記と室町物語』清文堂出版二〇〇一・10再録。引用は後者による）
- * 岡田三津子「延慶本『平家物語』の人物造型―平家貞・貞能の場合を中心として―」（『中世文学』三三号、一九八七・5）
- * 木村真美子「中世の院御厩司について―西園寺家所蔵「御厩司次第」を手がかりに―」（『学習院大学史料館紀要』一〇号、一九九九・3）
- * 恋田知子「陽明文庫蔵『道書類』の紹介（一）『恋塚物語』の翻刻・略解題」（『三田國文』四六号、二〇〇七・12）
- * 島津忠夫「教訓状・烽火の沙汰―『平家物語』についてのひとつの覚書―」（『国語国文』一九八〇・7。『平家物語試論』汲古書院一九九七・7、後に『島津忠夫著作集第十巻物語』和泉書院二〇〇六・10再録。引用は後者による）
- * 高橋昌明「平家家人制と源平合戦」（『軍記と語り物』三八号、二〇〇二・3。『平家と六波羅幕府』東京大学出版会二〇一三・2再録。引用は後者による）
- * 田中文英『平氏政権の研究』（思文閣出版一九九四・6）
- * 原卓志「『如法』の意味・用法について」（『訓読語と訓点資料』一〇八号、二〇〇二・3）
- * 宮腰直人「『縁行道』小考」（『平家物語』の転生と再生）（『笠間書院』二〇〇三・3）
- * 元木泰雄①「藤原成親と平氏」（『立命館文学』八〇五号、二〇〇八・3）
- * 元木泰雄②「平重盛論」（『龍谷壽・山中章編『平安京とその時代』思文閣出版、二〇〇九・12）
- * 山下宏明「源平闘諍録の研究」（『平家物語研究序説』明治書院一九七二・3）

又小松殿ニハ、盛国¹承テ侍²ノ著到シケリ。宗人³ノ侍³三千余人、郎等乗替打具テ、二万余騎トゾ注シタル。⁴内大臣ハ、著到披見ノ後、家貞・貞能ヲ召テ子細ヲ下知シ給テ、西八条ヘ遣⁵レケリ。二人ノ者共入道⁷殿ニ参⁸テ、弓脇ニ扶⁹甲ヲ脱、高紐ニ懸テ、庭上ニ候ケリ。入道殿ハ人々ニ捨ラレテ、徒然ノ余ニ、猶縁行¹⁰道シテ御座ケルガ、此等ヲ見給テヘラヌ体ニ宣ケルハ、「如何ニ家貞、貞能ヨ。小松殿ニハ軍兵ヲ誘引シテ、¹²是ニハ一人モナシ。」「¹³所存何事ゾ。其意ヲ得ズ」ト宣ヘバ、家貞畏テ、「可有御院参之由、仙洞依被¹⁴聞召、法皇大ニ驚御座テ、勅定ニ、為¹⁵治天下、被¹⁶下軍將之宣旨之後、經多年之間、云官位ニ云福祿、秀¹⁷于先例。」「¹⁸深可存朝恩之處、還而欲¹⁹乱²⁰国家」之条、²¹既為朝敵之上者、速ニ可追討之旨、²²所被²³下院宣也。昨日申入シガ如、奉²⁴向父弓矢ヲ引事ハ有ベカラズトイヘ共、重盛²⁵今²⁶官居シ禄ヲ貪ル上ハ、勅定又²⁷難²⁸奉²⁹背。此事³⁰聞食レナバ、御自害モヤランズラン。先守護³¹進セヨ。重盛³²角テ侍レバ、御命ヲバ奉公ニ申替侍ラン」ト被³³仰下」ト申タレバ、入道殿マツ興醒テ、俄ニ道心モ失果ツ、³⁴「実カ虚言カ」ト宣ヘバ、「一³⁵定ニ候」ト申ス。「ヨモサラジ。入道ヲ³⁶矯見トテコソ」トイハレケレバ、家貞ハ、「今始テ³⁷小松殿、左様ノ輕々敷御事有ベシト不³⁸存。院宣トテ軍兵ノ中ニ御披露有シハ、一定ノ事ニコソ」ト申時、入道大ニ歎給³⁹テイハレケルハ、「家貞、貞能、慥ニ承レ。昨日申シ様ニ出家人道ノ身也。余年日数少シ。内府ニ奉⁴⁰讓⁴¹世ヌル上ハ、向後ハ物ニ⁴²イロヒ申事アルベカラズ。院宣ノ御返事モヨキ様ニ⁴³可⁴⁴被⁴⁵奏聞。」「⁴⁶トモ角モ相計ハレンニコソ奉⁴⁷隨ラメ」ト、「曳⁴⁸去バトク還リ行テ、此由ヲ申ベシ」ト宣ヘバ、二人ノ者共ハ、「守護ニ候ベシトノ仰也。別ノ御使ヲ以テ可⁴⁹被⁵⁰仰⁵¹候ラン」ト申⁵²去⁵³。

【校異】 1 〈近〉「うけたまはて、〈蓬〉」承て、〈静〉「承りて」。2 〈蓬〉「ケリ」なし。なお、「着到し」。〈静〉「着到しけり」。3 〈近〉「三十余人」。4 〈近〉「うちのおとゝは、〈蓬〉」ハなし。なお、「内大臣」。5 〈蓬・静〉「着到」。6 〈蓬・静〉「遣しけり」。7 〈蓬〉「殿」なし。8 〈近〉「まいて、〈蓬〉」参りて、〈静〉「まいりて」。9 〈近〉「つれくの、〈蓬・静〉」徒然の。10 〈近〉「おはしけるか、〈蓬〉」御座けるか、〈静〉「御坐けるか」。11 〈蓬〉「不¹²倍」、〈静〉「不¹³倍」。12 〈近〉「これには、〈蓬・静〉」是ニハなし。13 〈近〉「いを、〈蓬・静〉」心を。14 〈近・蓬・静〉「と。〈底〉虫損により補う。15 〈近〉「かしこまで、〈蓬〉」畏て、〈静〉「畏て」。16 〈近〉「おとろきおはしまして、〈蓬〉」驚御座て、〈静〉「驚御座て」。17 〈近〉「てんかをおさめんために、〈蓬〉」為¹⁸治天下、〈静〉「為¹⁹治天下」。18 〈近〉「ふかくてうをんをぞんずべきところに、〈蓬〉」深朝恩を存すべき所に、〈静〉「深朝恩を存すべき処」。19 〈近〉「かへつて、〈蓬〉」還て、〈静〉「還て」。20 〈近〉「すてにてうてきのうへたれは」。21 〈近〉「めんせんをくたさるゝ也」。22 〈近〉「ちくにむかひたてまつり、〈蓬〉」父に向ひたてまつりて、〈静〉「父にむかひ奉て」。23 〈蓬〉「今に、〈静〉」いまに。24 〈近〉「くはんにきよし、〈蓬〉」官に居し、〈静〉「官に居し」。25 〈蓬・静〉「奉」なし。なお、ともに「そむきかたし」。26 〈蓬〉「聞召れは」。27 〈近〉「おほせくたされ候と、〈蓬〉」仰下さるゝと、〈静〉「仰下さるゝと」。28 〈近〉「殿」なし。29 〈近〉「まことかそらことかと」とし、「かそら」の上から一重線あり。〈蓬〉「実カ虚言かと」、〈静〉「実歟虚言歟と」。30 〈近〉「あさむき見よとてこそと」、〈蓬〉「矯みんとてこそと」、〈静〉「矯見とてこそと」。31 〈蓬・静〉「小松殿の」。32 〈蓬〉「一定事にこそと」。33 〈蓬・静〉

「綺申」。^{イロイ}34〈蓬〉「奏せらるへし」。^{ソウ}35〈蓬・静〉「左も右も」。^ト36〈蓬〉「相はかられんにこそ」。^{アイ}37〈静〉以下「無道ノ逆」まで一字下げ。頁替わりによる。38〈近〉「へちの」。^チ〈蓬〉「別の」。

【注解】○又小松殿ニハ、盛国承テ侍ノ著到シケリ。宗人ノ侍三千余人、郎等乗替打具テ、二万余騎トゾ注シタル。〈闘・長〉なし。〈屋・覚・中〉「小松殿には、盛国承ッて、着到ッつけり。馳参たる勢ども、二万（〈屋は「二万」余騎とぞしるいたる」〈覚〉上一〇一頁）。〈延〉は「小松殿ニハ、盛国ガ奉ニテ侍ノ着到付ケリ。侍三千余人、郎等・乗替トモナク、凡ノ勢二万七千八百余騎トゾ注シケル」（巻二一四九オ）と、〈盛〉に近い。盛国は、前節で重盛の命を受けて兵の召集の使いとなっているように、ここでは重盛に忠実に仕える人物として描かれている。「著（着）到シケリ」は〈延・屋・覚・中〉いずれも「着到ッつけり」とある。「着到」は着到状のことで、「軍勢催促状に応じた武士が、馳せ参じたことを記して提出した文書」（『鎌倉遺文』にみる中世のこゝとば辞典』四一頁）であり、転じて「出陣のとき、諸方から馳せ集まつた軍勢の来着を記録すること」（『角川古語大辞典』）の意。盛国が命を受けて馳せ参じた侍の記録を付けたことになる。「宗人むねとの」は「むねとの」の形で、連体成分として用いる。おもだった。おもだった者という意味のときは、「宗徒」と書かれる」（『角川古語大辞典』「むねと」）。〈近〉「むねとの」〈蓬〉「宗との」〈静〉「宗人」の。〈早（黒）〉は〈底・静〉に同じ。巻四「涌泉寺喧嘩」「八院三社ノ衆徒ノ張本ニ、智積、覚明、法台、金台、学円、仏光寺ノ宗人ノ大衆三十余人、三寺四社ノ衆徒等相具シテ」（一一二〇九頁）。『邦訳日葡辞書』「Munetono tsuanono. ムネトノツワモノ（宗との兵）名高くて強い兵士」（四三三三頁）。「乗替」はここでは「乗りかえるために用意した馬をあずかって

乗る侍」（日国大）。召集に応じた侍たちは、戦闘となることを想定しているということだろう。『保元物語（金刀比羅本）』中巻「身の分限なかりければ、乗替・郎等迄は思ひもよらず」（旧大系一〇二頁）。「主立った侍三千余人が、郎等や乗替を引き連れて参上した」の意となる。○内大臣ハ著到披見ノ後、家貞・貞能ヲ召テ子細ヲ下知シ給テ、西八条ヘ遣レケリ。重盛が着到状を確認した後、家貞・貞能を西八条邸へ遣わしたとするのは〈盛〉のみ。〈延・屋・覚・中〉は、〈延〉「内大臣ハ着到披見ノ後、侍共ニ対面シテ宣ケルハ」（巻二一四九オ・四九ウ）や、〈覚〉「着到披見の後、大臣中門に出て、侍共への給ひけるは」（上一〇一頁）のように、重盛が侍たちに訓辞し、幽土・褒姒の故事を語る場面へと続く。これは、前節で述べたように、簡略な形を取る〈延〉では、西八条邸で動揺する清盛を描くのみであり、また〈屋・覚・中〉では、すでに清盛が西八条邸に残っていた貞能との対話を通して武装を解き院参を諦めていることによる。〈闘・長〉も同様で、〈闘〉では貞能が、〈長〉では忠度が、清盛から重盛のもとに派遣されて両者は和解しているため、いずれもそのまま重盛の訓辞に移る。これらに対して、〈盛〉は前節で、名前を列举して家貞・貞能までも重盛のもとへ参じていたことから、ここで両名を西八条邸へ派遣して、清盛に再度の説得を試みるのである。前節「入道ノタマヒケルハ、（中略）イト心モ発ヌ哀念仏ヲ被申ケル」項で述べたように、おそらく〈盛〉の本文は後出で、〈長・屋・覚・中〉が描くような、家人が皆重盛の命に従った中で、貞能が一人西八条邸に

残っていることに不自然さを感じて改編したのであろう。〈盛〉は、合理的に家人の動きを解釈しようとする中で、前節から本節にかけての本文の改編を施したものと思われる。諸本の貞能が、西八条邸に残り、清盛に理解を示す立場で発言するのに対して、〈盛〉の家貞・貞能は、完全に重盛に従った形で清盛の説得に当たっているのが大きな違いである。家貞・貞能については前節「是ヲ承ル者共、オボロケニテハ騒給ハヌ人ノ（中略）筑後守家貞、肥後守貞能等ヲ始トシテ、如法夜中ノ事ナレドモ、我先ニトゾ馳参ケル」項参照。〈盛〉が諸本の貞能に加えて父家貞を加えた理由は不明だが、貞能が清盛だけでなく、重盛にも忠心をもって仕えている点は注目される。岡田三津子は、特に〈延〉において、家貞・貞能像が「小松一門との関連で描き出そうとする意図のもとに造型された」（六二頁）ことを指摘するが、〈盛〉もその影響下にあると言えるだろう。卷三十一「貞能参小松殿墓」では、重盛の後生を弔う貞能が描かれる（他の諸本も類似記事あり）。また、卷三十「平家目宇治勢多上落」に「同廿一日、新三位中将資盛大將軍トシテ、肥後守貞能等ヲ相具シテ二千余騎、宇治路ヨリ田原路ヲ廻テ」（四一三六八頁）と見えるが、古記録からも重盛の子資盛と密接な関係を持ったことも知られている。治承四年十二月に東国の源氏追討のため平氏軍が出陣した際に、伊賀道には資盛が大將軍となつて貞能がこれを補佐した他、平家都落ちの際には、資盛・維盛・貞能が都に引き返すなど（上横手雅敬・一二五〜一二八頁）、貞能は「重盛亡き後は、維盛の弟資盛の傍らにあり、資盛を大將軍とする部隊の侍大将の役を務めることが多かった」（高橋昌明・一五四頁。また佐々木紀一・四四〜四五頁も参照）。また、永井義憲は、諸国の小松寺と称

する寺と観音信仰との関係について論じる中で、「常陸の小松寺は重盛の一族平貞能が重盛の遺骨と守護仏の如意輪観音及び後室の相応院得律禪尼を伴い来りて一字を建立、寺名を相応院と名づけた」（三四一頁）ことなどを指摘する。またこれを受けて、水原一も、貞能を開基とする小松寺を複数取り上げている。小松家と貞能との関係が広く伝承されていたことがうかがえる。なお、〈早黒〉「遣シケリ」校異6参照。○二人ノ者共入道殿ニ参テ、弓脇ニ扶ヲ脱、高紐ニ懸テ、庭上ニ候ケリ 前項で述べたように、以下、〈盛〉の独自異文となる。家貞・貞能の二人が西八条邸を訪れ、庭に跪く。高紐は「鎧の後胸の先端と前胸の上部をつなぐ掛け渡ししの紐」（日国大）。ここに脱いだ甲を懸ける。弓を脇に挟み甲を脱ぐというのは、貴人の前に敬屈する際の一連の動作。『保元物語』（半井本）中巻「下野守ノ前ニ走セ参ジ、馬ヨリ飛デ下リ、甲ヲヌギ、高紐ニ懸、弓脇夾ミ、アヘタク／＼申ケルハ」（新大系五六頁）。○入道殿ハ人々ニ捨ラレテ徒然ノ余ニ、猶縁行道シテ御座ケルガ、此等ヲ見給テヘラヌ体ニ宣ケルハ、「如何ニ家貞、貞能ヨ。小松殿ニハ軍兵ヲ誘引シテ、是ニハ一人モナシ。所存何事ゾ。其意ヲ得ズ」ト宣ヘバ、清盛はなす術も無く「縁行道」を続けていたが、二人を見て「ヘラヌ体」を見せる。「ヘラヌ体」は、本箇所が三例目。一例目は前段「小松殿教訓父」で、教訓に訪れた重盛を見て、清盛は「入道ハヘラヌ体」にて弁明をする。これは〈盛〉のみの表現である（本全釈一八一五七頁「入道ハヘラヌ体ニテ」項参照）。二例目は同じくその続きに、重盛の涙を流しながらの教訓を受けて「入道ハ口説ラレテ、ヲロ泣色ニハ御座ケレドモ、猶ヘラヌ体ニテ」反論をする。同様の場面で諸本では〈延〉「シラケ

ヌ体ニ」（卷二一四八オ）、〈覚〉「力もなげにて」（上一一〇〇頁）などとしており、ここでも〈盛〉のみが「ヘラヌ体ニ」とする（前々々節「入道ハ口説立ラレテ、ヲロ泣色ニハ御座ケレドモ、猶ヘラヌ体ニテ」項参照）。このように、重盛に対峙する清盛の描き方として、〈盛〉のみが三度にわたって「ヘラヌ体」であったと繰り返しているのであり、〈盛〉が一貫して重盛に対して「負け惜しみをする、平然を装う」清盛像を描こうとしていることがわかる。なお、「ヘラヌ」を〈早（黒）〉「不_ネ倍_ヘ」とする。校異11参照。○家貞畏テ、「可有御院参之由、仙洞依被聞召、法皇大ニ驚御座テ、勅定ニ、為治天下、被下軍将之宣旨之後、経多年之間、云官位云福祿、秀于先例。深可存朝恩之处、還而欲乱国家之条、既為朝敵之上者、速ニ可追討之旨、所被下院宣也。昨日申入シガ如、奉向父弓矢ヲ引事ハ有ベカラズトイヘ共、重盛今官居シ禄ヲ食ル上ハ、勅定又難奉背。此事聞食レナバ、御自害モヤアランズラン。先守護シ進セヨ。重盛角テ侍レバ、御命ヲ奉公ニ申替侍ラン」ト被仰下」ト申タレバ、家貞が清盛に、重盛に言われたとおり「子細」を伝える。その内容は、「（父清盛が）院参されとのこととを、院がお聞きになって大いに驚かれ、勅定として、『天下を治めるために、（清盛に）軍将の宣旨を下して後、長年の間、（平家に与えた）官位といい富といい、先例に秀でるものであった。（したがって平家は）深く朝恩を感じるべきであるところ、逆に国家を乱そうとしているとのこと、もはや朝敵となってしまうからには、速やかに（平家を）追討すべきである』旨の院宣が下された。昨日（私が）申し上げたように、父上に向かって弓矢を引くことはあってはならないことだが、重盛は今官にあり祿をいただく立場であるので、勅定に背き申し上げる

ことはできない。このことをお聞きになつては（父清盛は）自害されるかもしれない。（家貞と貞能は）まず（父上を）守護し申し上げよ。重盛はこのような（朝廷にお仕えする）身であるので、（父上の）命を（院への）奉公に申し替えようと思う、そう重盛が話していたとのことであつた。当然ながらこのような院宣は出されておらず、後に重盛自身が語るように（「只入道殿違勅ノ振舞ヲシツメ奉リ、天下ノ煩ヲ止トノ方便ナリト云ヘドモ」1一四〇三頁）、すべて重盛が清盛を改心させるための虚偽の方便ということになる。重盛にこのような虚偽を語らせるのは〈盛〉のみ。重盛が忠と孝の板挟みになる中で、院宣が出されたとなれば、清盛は重盛が討伐の兵を挙げる可能性を意識することになる。だからこそ、清盛に圧力をかけるために重盛が院宣を偽ったとするのが、〈盛〉の設定であらう。次に、「軍将之宣旨」が何を指すのか不明。清盛は將軍に任じられていないが、本全釈一八一三〇頁でも述べたように、『平家物語』の歴史観では、清盛と頼朝を「朝敵を討つ將軍」の構図で征夷大將軍の継承の歴史に位置づけていると言える（佐伯真一・三五八―三五九頁）。ここでも同様の歴史認識により、清盛が「軍将之宣旨」を賜ったものと理解しているか。羽原彩は、〈盛〉には、「アレハ當時ノ將軍平家太政入道ト云者ノ頸也」（卷十二）、「日本ノ將軍太政大臣入道清盛」（卷二十六）と、清盛を將軍と呼ぶ用例を示し、それが「抑仏法王法ハ助君守レ法、文官武官ハ治國鎮乱。其中ニ源平両氏ノ將軍ハ、朝家前後ノ守護トシテ、国土ヲ治、奉_レ守_レ君王、互ニ牛角タリキ」（卷十四、2一三九三頁）のように、源平が前後して將軍の役を担っていたとする記述が、〈盛〉ではたびたび見られる（二三四―二三五頁）ことに関連すると指摘する。「昨日申

入シガ如」とあるように、重盛の清盛に対する教訓があったのは昨日のこととしており、前節に「如法夜中ノ事ナレドモ」「夜も明ケレバ」とあったように、夜中から明け方の兵の召集を経て、翌朝に清盛に使いが立てられたことになっている。「御自害モヤアランズラン」(清盛が自害されるかもしれない)というのは、清盛に対してそれだけ責任を感じるべき立場であると自覚させることを意図した言い方だろう。

○入道殿マツ興醒テ、俄二道心モ失果ツ、先ほどまで徒然のままに縁行道をしていた清盛だが、使いの二人の言葉に興ざめてそういった道心も消え果ててしまう。○「ヨモサラジ。入道ヲ矯見トテコソ」

トイハレケレバ 清盛は「実力虚言カ」と疑い、「一定ニ候(確かなことです)」と言われても、なおも疑う。「矯見」を、〈近〉「あさむき見よとてこそと」〈逢〉「矯みんとてこそと」〈静〉「矯見とてこそと」、また〈早(黒)〉は「矯見」とする。〈日国大〉は「ためみる(矯見)」に、〈延〉「入道腹ヲ立、何ニ己等ハ一度ナラズ二度ナラズ淨海ヲバタメミルゾ」(巻四―一七ウ)、〈盛〉巻十九「両目ニテハ睨、片目ニテハ睨、立上テハ睨、サシウツブキテハ睨、(中略)文覚ハ遙ニ加様ニタメ見テ」(3―一八三頁)を引いて、「いろいろの方角から注意して見る。うかがい見る。ねらい見る」意とする。ここでも清盛は、「(重盛が)入道に対してあれこれと様子を伺っているのではないかと疑っている。なお、「矯」は〈名義抄〉に「アサムク」(僧中三二)などともあり、〈近〉は「あさむき見よ」と読んだか。○「今始テ小松殿、左様ノ軽々敷御事有ベシト不存。院宣トテ軍兵ノ中ニ御披露有シハ、一定ノ事ニコソ」疑う清盛に対して、家貞が、重盛が欺いたりなどするはずは無いと反論する。家貞も当然今回のことは重盛の

方便であることは承知しており、清盛と重盛の双方に忠実に仕えてきた家貞が、完全に重盛の指示を守って忠義を尽くしている。「今になって重盛殿が、そのような(清盛を欺くような)軽々しいことをされるとは思えません。院宣として軍兵たちの間に披露があったのは間違いないことです」の意。○入道大ニ歎給テイハレケルハ、「家貞、

貞能、慥ニ承レ。昨日申シ様ニ出家人道ノ身也。余年日数少シ。内府ニ奉讓セヌル上ハ、向後ハ物ニイロヒ申事アルベカラズ。院宣ノ御返事モヨキ様ニ可被奏聞。トモ角モ相計ハレンニコソ奉随ラメ」ト重盛の言動を疑った清盛であったが、忠臣である家貞・貞能が間違いないと言うからには信じる他なかった。「昨日申したように(この清盛は)出家した身である。余命も短い。重盛に家督を譲ったからには、今後は(重盛のすることに)口出しをすることはあってはならない。院宣への返事も(重盛から)よいようになされるべきである。ともかく、(重盛が)お考えになることに従い申し上げる」旨を回答する。前節で述べたように、ここでの清盛の言動について、〈延〉は簡略で、〈屋・覚・中〉は貞能を前に動揺するのみである。清盛が重盛に対して何らかの弁明をするのは〈闕・長〉。〈闕〉では貞能を介して、「実争可奉流君」(申三二)の恨ヲ候雖然右様ニ被諫之上者争可有其義乎自今以後左右不可背内府之計善惡御坐此に能可申合事侍(実には争か君をば流し奉るべき。一旦の恨みをこそ申し候へ。然りと雖も右様に諫められし上は、争か其の義有るべけんや。自今以後は、左も右も、内府が計ひを背くべからず。善惡此れに御坐せば、能く能く申し合はすべき事侍り。一下一二〇オ)とあり、〈長〉では忠度を介して、「此ほど世中しづかならねば、法皇を暫鳥羽殿にをきまいらせて、

世をしづめんとすれば、嫡子に捨たるゝこそかなしけれ。老て子にすてらるゝは、朽木の枝なきにこそ。院参にをいては思とゞまり候いぬ。

自今以後は、内府のはからひ申されん事をば、一切背まじきぞ。きと立寄給へ。なに事も申承べし」（一——一七五頁）とある。いずれも速やかに法皇の配流（あるいは幽閉）を撤回し、今後は重盛の考えには背かないと完全な敗北を宣言している。この点は〈盛〉と同じ。○

【引用研究文献】

*上横手雅敬「小松殿の公達について」（安藤精一先生退官記念会編『和歌山地方史の研究』宇治書店一九八七・6）

*岡田三津子「延慶本『平家物語』の人物造型——平家貞・貞能の場合を中心として——」（中世文学三二号、一九八七・5）

*佐伯真一「將軍」と「朝敵」——『平家物語』を中心に——（軍記と語り物二七号、一九九一・3。『平家物語遡源』若草書房一九九六・9再録。引用は後者による）

*佐々木紀一「小松殿の公達の最後」（国語国文一九九八・1）

*高橋昌明「平家家人制と源平合戦」（軍記と語り物三八号、二〇〇二・3。『平家と六波羅幕府』東京大学出版会二〇一三・2再録。引用は後者による）

*永井義憲「平家物語と観音信仰」（『日本仏教文学研究』古典文庫一九五七・3。『日本仏教文学研究 第一集』豊島書房一九六六・10再録。引用は後者による）

*羽原彩「源平盛衰記」における將軍交替の文脈——「日本ノ將軍」清盛を中心に——（文学二〇〇七・11）

*水原一「小松寺の記——平家物語周辺伝説をさぐる——」（駒沢短大国文三号、一九七三・3）

入道ノ仰ニハ、「只¹急^{いそぎ}帰レ。我一人イヅクヘカ落行ベキ。是ニ不^{これ}働^{四〇三}シテ^二居^あベシ」ナンド、³様々怠状被^レ申ケリ。二人⁴婦^こテ細^{かく}三角⁵ト申セバ、内府⁶ハ⁷打^う領^{りやう}許^き涙^{なみだ}グミ⁸給テ、「ヤラレ家貞、貞能ヨ。マコトニハ勅定ナリトテモ、争カ父ニ⁹向ヒ奉テ¹⁰無道ノ逆罪ヲ、カスベキ。只¹¹入道殿違勅ノ振舞ヲシヅメ奉リ、天下ノ煩^{わづらひ}ヲ¹²止トノ方便ナリト云ヘドモ、重盛カ、ル悪人ノ子ト¹³生テ、五逆罪ノ¹⁴一ヲ犯^{げん}スル¹⁵事コソ悲ケレ。イカニトイヘバ、子ノ身トシテハ我コソ¹⁶何度モ父ノ命^{めい}ニハ随奉ベキニ、今父ニ向ヒ奉リテ御心ヲ¹⁷傷奉リ、御怠状ヲセサセ奉ル事ノ心憂サヨ」トテ、ハラノト泣キ給ヘバ、二人ノ者其モ¹⁸鎧^{よろい}ノ袖¹⁹ヲゾヌラシケル。

【校異】 1 〈静〉「忬」^{イフキ}。 2 〈近〉「ゐへしなと」。 3 〈近〉「やうく」に、〈蓬・静〉「さまく」。 4 〈静〉「還りて」^{かへ}。 5 〈静〉「ト」なし。 6 〈蓬・ハ〉なし。 7 〈蓬・静〉「打領許」^{ウチノリノコト}。 8 〈蓬・静〉「給」なし。 なお、〈蓬〉「涙くみて」、〈静〉「涙くみて」^{なみ}。 9 〈近〉「むかひたてまつて」、〈蓬・静〉「むかひ奉りて」。 10 〈近〉「ぶたうの」、〈蓬・静〉「無道の」^{ムダウ}。 11 〈蓬〉「入道殿の」、〈静〉「入道殿の」^{ニョウダウ}。 12 〈近〉「とくめんと」の、〈蓬・静〉「とくめんの」。 13 〈近〉「むまれて」、〈蓬〉「生て」、〈静〉「生て」^{ウマレ}。 14 〈近〉「ひとつを」。 15 〈蓬〉「事」なし。 16 〈近〉「いくたひも」、〈蓬〉「何度も」^{イクタヒ}。 17 〈近〉「やふりたてまつり」、〈蓬・静〉「傷奉り」^{イタマシメ}。 18 〈近〉「よろこひの」とし、「こ」に見せ消ち。 19 〈蓬〉「ヲ」なし。

【注解】 ○入道ノ仰ニハ、「只急帰レ」以下、前節から清盛と家貞・貞能の会話が続く。こうした場面は〈盛〉の独自箇所。〈闘〉では只一人残った貞能が、〈長〉では只一人清盛のもとに駆けつけた忠度が清盛に頼まれてすぐに重盛邸へ赴いている。〈盛〉では、前節に見たように、家貞・貞能は重盛から「(清盛を) 先守護シ進セヨ」と命じられて西八条に来ており、「去バトク還リ行テ、此由ヲ申ベシ」との清盛の言に対して、「守護ニ候ベシトノ仰也。別ノ御使ヲ以テ可^レ被^レ仰ヤ候ラン」と別の使者を立てるべきと答えていた。当該部の注解参照。それに対し、清盛はもう一度一人に対し、小松殿へ帰ることを命じている。〈闘・長・盛〉以外の他本はそもそも清盛・重盛間での使者の往来を描かず、当該場面がない。 ○我一人イツクヘカ落行ベキ。是ニ不働シテ居ベシ 「御自害モヤアランズラン」と清盛の自害を憂慮した重盛から清盛「守護」のために参上したと述べた家貞・貞能に対し、その必要が無いことを説く清盛の発言である。西八条は「少モ弓馬ニ携程ノ者ハ一人モナカリケリ」という状態であったから、清盛一人でどこへ落ちていくことができようか、という意。「働く」は「からだを動かす。動く」(《日国大》)の意であり、ここ(西八条)から動かずにいよう、ということ。 ○様々怠状被申ケリ 「怠状」^{たいじょう}は「古代・中世、罪や過失を犯した者がそれを認めて差し出す謝罪状。おこ

たりぶみ」をいい、後に「過ちをわびること。あやまること」(《日国大》)の意でも用いられた。ここでも清盛が実際に怠状を書いたということではなく、謝罪の言葉を口にしたということであろう。こうした描写は〈盛〉のみ。 ○二人帰テ細ニ角ト申セバ 貞能・家貞の二人が重盛のもとに帰り、このようでしたと清盛の伝言を申し伝えたところ、という意味。〈闘〉「貞能参小松殿」^も申此由^も者(貞能小松殿に参つて此の由を申しければ。 一下一二〇ウ)「長」薩摩守馳帰て、此よしを申されたれば(1—176頁)と、人名は異なるがほぼ同様。

○内府ハ打領許涙グミ給テ 「領許」は、観智院本《名義抄》に「領許 ウナツク」(仏下本二四)とあるように「領許」がよい(《本全釈》一一—一五〇頁「信西打領許テ」項注解参照)。現に底本には、卷四(1—二〇六頁)と卷三十一(4—四二〇頁)の表記は「打領許」であるが、誤りの「打領許」とする表記の方が多い。卷六(1—四〇三頁)、卷十五(2—四五三頁)、卷十七(3—一六頁)、卷三十九(5—四九九頁)、卷四十(5—五五八頁)、卷四十七(6—四三三頁)の六箇所ある。これ以外に、「打(ウチ) ウナツキ」等、片仮名表記のもの十二例見られる。なお、「領許」を「エツボ(笑壺)」と読む事例が二例見られる。卷十三「佐殿ハ手洗口漱テ、是(注:以仁王合旨) ヲウケトツテ、領許入テゾ御座ケル」(2—三二八頁)、卷二十二「義

澄義盛小坪軍ニ打勝テ三浦ニ帰、軍ノ次第コマトト語ケレバ、大介義明ヨクくキキ、ニコト笑ヒ領許入テ（3―三三五頁）。〈蓬・静〉は、校異7に見るように、いずれも「領許」と記す（〈近〉は平仮名表記）。底本が「領許」と記すのは、字体の相似による誤写とも考えられるが、二巻本『色葉字類抄』（尊経閣本）、十巻本『伊呂波字類抄』（大東急本）、二巻本『世俗字類抄』（天理本）は「領許」とし、三巻本『色葉字類抄』（黒川本）、七巻本『世俗字類抄』（尊経閣本）は「領許」とする（いずれもウ・暈字）。両字体が通行して用いられていたか。〈闘〉「重盛又流涙波羅々々言（重盛又涙を波羅々々と流して言ひけるは。一下―二〇ウ）、〈長〉「小松殿、袖を顔にをしあてゝ、はらくと泣給。いと久あての給けるは」（1―一七六頁）とあって、〈闘・長〉では、貞能ないし忠度から清盛の伝言を聞いた重盛は、まず涙を流し、その後に言葉が続ける。〈盛〉では、涙ぐむとはされるものの、〈ハラくト泣く〉描写は重盛の発言後にある。○マコトニハ勅定ナリトテモ 本当に勅定であつたとしても、の意。前節で家貞は、後白河の清盛追討の院宣があつたと清盛に報告していた（家貞畏テ、『可有御院参之由、仙洞依被聞召、法皇大ニ驚御座テ、勅定ニ……』項注解参照）。それはこの後に明かされるように方便だつたわけであるが、それがもし本当だつたとしても、ということ。後白河の院宣に触れない〈闘・長〉には該当する発言がない。○争力父ニ向ヒ奉テ無道ノ逆罪ヲ、カスベキ（たとえ勅定があつたとしても）どうして父に対して道理にあわない逆罪を犯すことが許されるだろうか、それは許されないことだ、という意。「逆罪」に付いては次々項注解参照。

○只入道殿違勅ノ振舞ヲシツメ奉リ、天下ノ煩ヲ止トノ方便ナリト

云ヘドモ 〈蓬・静〉の「入道殿の」が良い。ただ清盛の朝廷に背こうとする振る舞いをなだめ申し上げ、天下の災いを止めるための方便であつたとはいえ、の意。前節で家貞が清盛に説明していた後白河から重盛への院宣は重盛の方便であつたことが明かされる。○重盛カ、ル悪人ノ子ト生テ、五逆罪ノ一ヲ犯スル事コソ悲ケレ「五逆罪」は、人倫や仏道に逆らう五種の極悪罪をいい、犯せば無間地獄に堕ちるとされた。「五無間業」ともいう。殺母（母を殺す）・殺父（父を殺す）・殺阿羅漢（聖者を殺す）・出仏身血（仏身を傷つけ出血させる）・破和合僧（教団を破壊させる）の五つを挙げるものが最も著名（『岩波仏教辞典』）。重盛の場合、清盛を追討することになれば「殺父」にあたるということだろう。その理由は次項において説明される。〈闘〉にも「我適乍受人界に生（成彼カ悪人ノ子ト併作罪業）悲（我適人界に生を受けながら、彼等悪人の子と成りて、併せて罪業を作る悲しさよ。一下―二〇ウ）」とあり、〈盛〉と同趣旨の発言がある。〈長〉には、悪人の子であるが故に逆罪を犯してしまふといった歎きは描かれない。なお、〈延〉にも、同文ではないが五逆罪に思い悩む重盛の思いが記されている。『君打勝セ給候ハゞ、彼保元ノ例ニ任テ、重盛五逆罪ノ一分犯シ候ヌ』ト覚候コソ、兼テ心憂ク覚候へ」（巻二―四六オ―四六ウ）。○イカニトイヘバ、子ノ身トシテハ我コソ何度モ父ノ命ニハ随奉ベキニ、今父ニ向ヒ奉リテ御心ヲ傷奉リ、御意状ヲセサセ奉ル事ノ心憂サヨ」トテ「イカニトイヘバ」は何が「逆罪」にあたるのかというところ、という意味。重盛は、子として父の命に従わず、逆に父の心を傷つけ、父に詫びを述べさせてしまったことが「五逆罪ノ一」にあたることを述べている。つまり、悪人の子として生まれてし

まったがために、(善行のためには)父に背かざるを得なくなり、結果的に父に逆らう罪を犯してしまったというのが〈盛〉の重盛の述懐である。但し、前項で述べたとおり、「逆罪」は通常、父に逆らう罪ではなく、父を殺す罪を指すのであり、ここでは解釈をずらしていると言える。それは〈闘〉も同様で、「子逢親」に「可申」対望「我乍」子被「対」望親「事過」此逆罪有「何乎」(子は親に逢ひては対望申すべきに、我は子ながら親に對望せられん事、此に過ぎたる逆罪何か有らんや。一下「二〇ウ」とあり、〈盛〉に近い文章構成で、同趣旨の発言がある。「対望」は、〈名義抄〉に「対」に「コタフ」(法下一四四)があり、子は親に對しては、親の望みに応えるべきであるのにの意にとれるが、〈長〉の西八条邸での貞能の言に「御子も御子にこそよらせ給候へ。なにかくるしく候べき。御退望候て、御中をなをらせまし／＼候へかしとこそ存候へ」(1—175頁)とあり、「御退望候て」は「願望をひきさげて仲直りなさってください」(『長門本平家物語の総合研究』一—三三五頁)と解されている。〈闘〉の「対望」はこの「退望」の誤りか。〈長〉は、本箇所該当する部分を「をろかなる親にもしたがふは、能子なり。入道殿、いかにをろかにわたらせ給とも、其子なれば、したがひ奉べきにてこそあれども、君をなやまし奉事のかなしさに、君を守護し奉らんとすれば、いかにもしたがひ奉べき重盛に、父の御身として、還て順給事こそあはれなれ。仏神のいかにおぼしめすらん(愚かなる親にも従うのは、良い子である。入道殿(清盛)がどんなに愚かでいらっしやっても、私はその子であるから、従い申すべきであるけれども、父が君をお悩ましすることが悲しいため、君をお守り申し上げようとすれば、どのようにでも父に

従い申すべき重盛に、父の御身として、逆に子の私に従いなさることに哀れである。仏神はこのことをどのようにお思いであろうか) (1—176頁)とし、どのように愚かな父であっても子は従わなければならない、ということをも前提とした上で、父清盛がどんなに愚かであっても従うべきであったが、君をお守りするためには父に従うことはできず、かえって父を自分に従わせる事になってしまったことを嘆いている。〈長〉での清盛は「御怠状」云々の発言はしておらず、清盛は忠度を介して重盛に「自今以後は内府のはからひ申さん事をば、一切背まじきぞ」(1—175頁)と伝えていただけだった。〈長〉はその箇所と本箇所が対応している。さらに、〈長〉では、長文で、父と君との板挟みになる苦悩を語り、「たゞもとどりをきり、山野にまじはり、後生菩提の勤より外、他事候まじ」(1—176頁)と出家の思いまでを口にする。〈早(黒)〉「傷」の付訓、「イタメ」。○ハラ／＼ト泣き給へバ、二人ノ者共モ鎧ノ袖ヲソヌラシケル ここで〈盛〉は重盛の涙を描き、心中を察した家貞・貞能の涙にも触れる。〈闘〉には「涙不搔敢」泣一門人侍共莫不皆流涙(涙も掻き敢へず泣きたまへば、一門の人人並びに侍共、皆涙を流さぬは莫し。一下「二〇ウ」と一門の人々も皆泣いたとする近似の描写があるが、〈闘〉では、清盛の元に帰参した貞能が重盛の言を伝え、清盛が成親の処刑・法皇の遠流を思いとどまったとする次の描写がある。「重盛承此仰御返事畏承候畢左様思食留院参候之上争可奉乖仰候乎又何事明日謚令参上可申承候申給入道驚此事共可剪大納言頸事モ被打置可奉流法皇事被思留矣(重盛、此の仰せを承り、御返事畏つて承り候ひ畢んぬ。左

様に院参を思し食し留まらせ候ふ上は、争か仰せに垂き奉り候ふべき。又何事も明日、諡（おと）かに参上せしめ申し承るべく候ふ」と申し給ひけり。入道此の事共に驚きて、大納言の頸を剪るべき事も打ち置かれて、法皇を流し奉るべき事も思ひ留まれたまひぬ。一下「二〇ウ」。「長」には、「薩摩守馳歸て、此よしを申されたれば、入道殿是を聞て、はづかしきにつけても、よきにつけても、さしも邪見にましましけるが、すみぞめの袖をぞしぼられける。それにつけても、をくちなくぞ見られける。扱、小松殿は、西八条殿へ入せ給てこそ、御中は和平し給けれ」（1—176頁）と、重盛の言を承けて忠度が清盛の元に帰参し、

其後¹大臣ハ²軍兵等ニ仰ラレケルハ、「日比ノ契約タガヘズ、下知ニ³随テ馳参リ、聞⁴伝テ参上ノ条、返々⁴神妙。聞召ス事アリテ被^レ仰タリツレドモ、其事聞ナヲシツ、僻事ニアリケリ。トク／＼罷歸ベシ。但今度、別ノ事ナケレバトテ、後々ノ催促ニ悠々存ズベカラズ。タトヒ事無シト云トモ、⁶何度モ可^レ随⁷下知也。終ニハ御用ニ叶フベシ。⁷猿様ニ異国ノ幽王ニアリキ。⁸度々ノ御召ニ⁹事ナケレバトテ、¹⁰官兵¹¹後日ノ催ニ参ラザリケレバ、ツイニ国ヲ¹²ホロボシケリ。其コ、ロアルベシ」トゾ仰ケル。

【校異】 1〈近〉「おとゝは」。2〈近〉「くんひやうらに」、〈蓬〉「軍兵等に」。3〈近〉「したかつて」、〈蓬〉「随て」、〈静〉「随て」。4〈近〉「しんへうなり」、〈蓬〉「神妙也」。5〈近〉「べちの事」、〈蓬〉「別の事」、〈静〉「別事」。6〈近〉「いくたびも」、〈蓬〉「何度も」。7〈近〉「合点あり」。行の冒頭に「ゆうわうほうじほう火」を傍書。なお、「さるやうに」。〈蓬・静〉「ニ」なし。なお、〈蓬〉「さるためし」、〈静〉「さる例」。8〈蓬〉「度々」の。9〈近〉「こそ」。10〈近〉「くはんへい」、〈蓬〉「官兵」、〈静〉「官兵」。11〈近〉「ごにちの」、〈蓬〉「後日の」。12〈近〉「ほろぼしけりけり」とし、最初の「けり」に見せ消し。頁替わりによる。〈蓬〉「滅しけり」、〈静〉「滅しけり」。

【注解】 ○其後大臣ハ軍兵等ニ仰ラレケルハ 前述の通り、清盛・重盛間での使者（闘・貞能・〈長〉・忠度・〈盛〉・家貞・貞能）のやり取りを挟まない諸本では、人々が重盛の元に参集し、周囲から人のいなくなつた清盛が後白河への武力行使を断念する描写、盛国が小松殿に参集した兵の着到を付ける場面に續けて、前節の重盛の発言となる。

その内容を伝えた結果、清盛が涙する場面が続く。〈盛〉は〈闘・長〉とは異なり、重盛から家貞・貞能を使者として派遣しており、清盛のもとへ帰参する場面はない。また、前掲「内府ハ打領許涙グミ給テ」項でも述べたように、ここで重盛が「ハラ／＼ト泣」様子は、〈闘・盛〉では、それぞれ貞能・忠度に対する重盛の発言の前に見られる。〈闘〉「重盛又流涙波羅々々」言（重盛又涙を波羅々々と流して言ひけるは。一下「二〇ウ」）、〈長〉「小松殿、袖を顔ををしあてゝ、はら／＼と泣給。いと久あての給けるは」（1—176頁）。

それゆえ、〈延〉「内大臣ハ着到披見ノ後、侍共ニ対面シテ宣ケルハ」（巻一四九〇〜四九ウ）、〈屋・覚・中〉「着到披見の後、大臣中門に出て、侍共ニの給ひけるは」（〈覚〉上——一〇一頁。〈屋・中〉には中門に出る描写なし）などと、ここに重盛が着到状を見る姿が描かれる。〈盛〉では、すでに家貞・貞能を西八条に遣わす前に着到状を見

ていた(1—140頁)。「闘・長」は、着到をつける盛国の姿自体は描かれぬが、「長」のみ、以下に続く重盛の発言(故事引用含む)のあとに、「着到披露ありければ、『二万七千三百余騎』とぞしるしたる」(1—179頁)とある。「評講」は、重盛の触れに応じて集まった兵士に向かい、幽王・褒姒の故事を引いて語るといふ、以下の展開について、「作者が褒姒の故事を取り込んで、物語の中の人物である重盛の口を通して語らせようと意図し、その前提として、重盛がこの謀略を企てたことにしたのであって、ここに作者の作為があり、それが文学としてはかえって重盛という人物の価値を減殺したことになる」(上—136頁)と論じる。島津忠夫も「この重盛の挙動はまったく作者の創作であり、褒姒の話からの思いつきに過ぎないが、「教訓状」と「烽火之沙汰」を繋ぐところに、最初から『原「平家物語」』作者の構想があったものと思われる」(181頁)とその創作性を指摘する。○日比ノ契約タガヘズ、下知ニ随テ馳参リ、聞伝テ参上ノ条、返々神妙 ここですまず重盛は、日頃の契約通り、自分のもとへ参上した軍兵を褒める。契約は、御恩と奉公の主従の契り(「延全注釈」卷二—二八頁)。「延・長」ほぼ同文。「屋」「日来汝等重盛ニ申置シ詞ノ末タガハズシテ、加様ニ参タルコソ神妙ナレ」(一六五頁)。「覚・中」「日来の契約をたがへず参りたるこそ神妙なれ」(「覚」上—一〇二頁)とやや簡略。ただし、「長」はこの後に続く重盛による幽王・褒姒の故事引用後にも、重複して同趣旨の言葉がある。次々々項注解参照。「闘」は「各」(○)念参神妙也(各々念参りたるこそ神妙なれ。下一—二〇ウ)と簡略に兵士を褒めるのみで、その位置も「依聞」出天下大事(○)所召也(天下に大事を聞き出だしつるに依つて召す所

なり。下一—二〇ウ)と事情を説明した後であり、他本と順序が異なる。○聞召ス事アリテ被仰タリツレドモ 院が何か耳にされたことがあって、兵の召集を仰せられたけれども、の意。前節で、家貞が清盛に「可有御院参之由、仙洞依被聞召、法皇大ニ驚御座テ、勅定ニ……」(1—140頁)と説明していたように、「盛」の重盛は、清盛に對してもあくまでも院宣によって行動したのでという体裁を守っていた。一方、「延」「重盛不思議ノ事ヲ聞出タリツル程ニ、俄ニカクハ催シタリツルナリ」(卷二—149ウ)、「長」「重盛別して、不思議を聞出したりつる程に、かくは催したりつれども」(1—177頁)、「闘」「重盛依聞」出天下大事(○)所召也(重盛天下に大事を聞き出だしつるに依つて召す所なり。下一—二〇ウ)はいずれも、重盛自身が何らかの「不思議(思いがけないこと)」「天下に大事」を察し、自発的に兵を召集したと述べている。「屋・覚・中」では、これ以降の事情を説明する重盛の発言は、重盛が褒姒の故事を引いた後に置かれるが、やはりそこに「重盛不思議の事を聞出して召しつるなり」(「覚」上—一〇二頁)とある。○其事聞ナラシツ、僻事ニアリケリ。トクく罷帰ベシ 「延」「サレドモ其事聞ナラシツ。僻事ニテ有ケリ。トクく」罷帰ラレヨ」(卷二—149ウ)、「長」「その事聞なをしつ。僻事にありけるぞ。いそぎく帰れ」(1—177頁)とほぼ同様。「覚」も「されども其事聞なをしつ。僻事にてありけり。とうく帰れ」(上—一〇二頁)と同内容。「闘」は「各」(○)念参神妙也雖然聞食直可罷帰(各々念参りたるこそ神妙なれ。然りと雖も聞こし食し直しつ。罷り帰るべし。下一—二〇ウ)とここに兵士たちを褒める言を挟むがほぼ同様。「盛」の重盛も、前々段で盛国を使いに出す際には、

「重盛コソ別シテ天下ノ大事ヲ聞キ出シタレ、我ヲ吾ト思ハン者其ハ急ギ参レト被催タリ」（一―三九八頁）と兵を召集していた。ここの「其事」は、それが改めて聞いた結果、間違いであったため、すぐに退出するように、と下知したのである。前項から主語が変わっているが、〈盛〉の本文は、後白河の院宣を持ち込んだために、やや乱れた形になったか。○但今度別ノ事ナケレバト、後々ノ催促ニ悠々ヲ存ズベカラズ。タトヒ事無シト云トモ、何度モ可随下知也。終ニハ御用ニ叶フベシ。今回は参集しても意味がなかったが、今後またえ空振りに終わったとしても、何度でも命令に従うべきであり、それがいつか本場に役に立つときが来ることを念を押している。「悠々ヲ存ズベカラズ」は、「悠々」は「ゆったりと落ち着いているさま」（『日国大』）をいうから、悠長になどと愚考してはならない、の意。〈盛〉は、褒姒説話を記した後、再度「内大臣モ此意ヲ得給ケルニヤ、『今度事無トテ、後日ノ催シニ悠々ヲ不存』トハ仰セケルニコソ」（一―四一―頁）と記す。〈闘〉は「但向後重盛召加様に有レ不参矣（但し向後も重盛加様に召さんには、参らぬことやは有ると。一下―二〇ウ）」と同趣旨。〈延〉は「自今以後モ是ヨリ催シニハ参ベシ、返々本意ナリ」トテ皆被返ケルガ」と、一旦、重盛は言葉の切り、兵士達を返そうとするが、「又宣ケルハ、『是ニ事ナケレバト後ニ遅参有ベカラズ』（巻二―四九ウ）」と、再び言葉を継ぎ、あらためて、何もなかったからといって、今後遅参することがないようにと伝え、幽王褒姒の故事を引く。ここまで、〈延・盛〉は、重盛は、①兵士へのねぎらい、②事情（誤報）の説明、③退出を促す発言、④今後の戒めの四点を述べ、その後、故事の引用に移る。〈屋・覚〉は①兵士へのねぎらいの言葉のあと、

(四)

すぐ故事引用に入り、②④は故事の後に置かれている。そのため、今回の召集が誤報によるものであったことが示されないままに故事引用に入ってしまうことになり、故事末尾にいたるまでその引用意図が見えない。〈中〉は①兵士のねぎらいの言葉、④今後の戒めが故事の前にあり、②③だけが後置されている。〈中〉の形でも兵士達は事情も知らないままに、④「じこんいごも是よりめさんには、かくのごとくにまいるべし」（上―一〇七頁）と言われることになり、不自然さは拭えない。〈長〉は、①兵士をねぎらい、②事情を説明し、③退出を促すと、先に褒姒の故事を語り、故事引用の後に「異国にも、かゝるためしあるぞとよ。重盛別して、大事を聞出しつる間、あひもよほしたるに、①時をかへず、各馳参ずる条、返々神妙なり。たのもしくおぼゆるものかな。②今此事を聞なをしつ。たゞ今事なければとて、努々幽王のたぐひにしたがふ事なかれ。④自今以後も、重てあひ催事あらば、更々、遅々あるべからず。③いそぎ／＼帰て、物具ぬぎて、やすまれよ」とて、兵どもをば返されけり」（一―一七八―一七九頁）と、あらためて、①・②を繰り返して、さらに故事を踏まえて④今後の行動への戒めを伝え、さらに再び③退出を促す言葉が挟まれる（その後、着到状を見る）。他本に比して「たのもしくおぼゆるものかな」「物具ぬぎて、やすまれよ」など、兵士を思う重盛の姿が強調されている。〈闘〉は②・①・③の順で発言があり、故事引用のあと、「異国に有ニ此様（カ、ル）（此様ニ）（異様ニ）今度召（シ）各己（ヲノコ）無シ事後有レ召有レ不参雖幾度（ニ）可随召（シ）返返仰（カ）合此（ヲ）被返（ル）矣（②異国に此る様有り。其の様に今度各己を召しつるに、事無かりけり。④後に召すこと有らんに、参らぬことやはある。幾度と雖も召しに随ふべし。一

下「二一ウ」と再度②・④を繰り返す形である。なお〈早（黒）〉「別事」。校異5参照。○猿様ニ異国ノ幽王ニアリキ。度々ノ御召ニ事ナケレバトテ、官兵後日ノ催ニ参ラザリケレバ、ツイニ国ヲホロボシケリ。〈早（黒）〉は、冒頭に前文に続く符号を記した上で「猿様」(校異7参照)とし、「幽王ニアリキ」を「幽王アリキ」として、そのような例は異国の幽王にあったとする。当該句は前文に続くのが本来の形。ここで重盛は幽王・褒姒の故事に言及する。他本では重盛がその故事内容を詳しく語るが、〈盛〉は、次節に見るように本文から一字下げして、その故事を引く形をとる。他本で重盛が故事の話者となっている点については、武久堅が、延慶本等が本故事の引用の末尾に「傾城」の読みについての注記・「后」の後日譚・「化け狐」の本説」も言及することを踏まえ、「重盛の、侍を前にした大演説の一部としては、不自然極まりないことは百も承知であろう。しかし、延慶本の作者は説話のスタイルを優先させて、重盛の「説話する行為」の徹底した姿を、軍記物語における説話の活用の一の類型として、呼び集めた侍どもを前に復元してみせたのである」と評し、さらに「説話する重盛」に「時代の知識人として、その全体像が造型されている」と見る(二二四頁)。「闘」も「延」と同様の形だが、〈盛

【引用研究文献】

* 島津忠夫「教訓状・烽火の沙汰―『平家物語』についてのひとつの覚書」(国語国文一九八〇・7。『島津忠夫著作集第十巻 物語』和泉書院二〇〇六・10再録。引用は後者による)

* 武久堅「説話する末世の予見者―重盛伝承と平家物語の構想」(『説話論集 第二集』清文堂出版一九九二・4。『平家物語の全体像』和泉書院一九九六・8再録。引用は後者による)

は重盛の語りから、故事の詳細を一字下げした地の文としており、説話語りの不自然さは解消されているが、重盛の造型を解体していることになる。〈長〉も「后」の後日譚は重盛の説話語りに含めるが、「傾城」の読みについての注記、「化け狐」の本説に該当する部分は地の文化しており(一七九頁)、不自然さが解消されている。〈覺〉などに、「后」の後日譚以外が見られないのも、不自然さを解消しようとした結果ともいえる。幽王は、中国周第二代の王(在位前七八二〜前七七二)で、姓名姫涅^{きで}。皇后、太子を廃して、寵姫褒姒を皇后にし、その子を太子とした。褒姒を笑わせるため、たびたび平時に烽火をあげて諸侯を集めるなど放恣をきわめ、大戎の力を借りた外戚の申侯に殺された(『日国大』)とされる。古く『詩経』小雅に「赫赫宗周、褒姒威^い之(赫赫たる宗周、褒姒之を威ぼせり)」、(権勢盛んな宗周を、褒姒は(見事に)滅ぼしてしまった。明治書院・新釈漢文大系『詩経』中一三一〇頁)や『楚辞』天問「周幽誰誅 焉得^な夫褒姒」(周幽誰をか誅し、焉ぞ夫の褒姒を得たる)」「(周の幽王は誰を誅罰しようとし、またどうしてかの身を亡ぼす因となった妖婦褒姒を得たのであろうか。明治書院・新釈漢文大系『楚辞』一六一頁)に褒姒による亡国説が見える。次段以降、その経緯が詳述される。

幽王褒姒¹烽火

²昔異国ニ周ノ幽王ト云シハ、宣王ノ子也。位ニ付給テ二年ト云フ春、³山川大ニ震動セリ。于レ時伯陽甫ト云人申ケルハ、「周スデニ亡ナントス。昔伊洛竭テ夏⁴亡、⁵河竭テ商亡タリキ。国ハカナラズ⁶山川ニヨル。山⁷崩⁸河⁸竭ハ亡之⁹徴也。川¹⁰竭トキハ¹¹山必崩¹²。周ノ亡ン事十年ニスギジ」ト¹³被¹⁴歎ケルニ、次ノ年、幽王美人ヲ得タリ。其名ヲ褒姒ト云フ。イツシカ懷妊シテ皇子誕生アリ。伯服トゾ云ケル。幽王¹⁴ノ本ノ后ハ¹⁵申候ト云人ノ女メナリケレドモ、彼ヲステ、褒姒ヲ后トシ、伯服ヲ太子ニ立給ヒケレバ、世ハ既ニ¹⁶亡ヌトゾ群臣¹⁷歎申ケル。

【校異】 1 〈蓬・静〉「捧火」。2 〈底・近・蓬・静〉以下「可相尋也」まで一字下げ。3 〈近〉「さんせん」、〈蓬〉「山川」。4 〈近〉「ほろふ」、〈蓬・静〉「亡」。5 〈近〉「かは」、〈蓬・静〉「河」。6 〈近〉「さんせん」、〈蓬〉「山川」に。7 〈近〉「かは」、〈蓬〉「河」、〈静〉「河」。8 〈近〉「つくるは」、〈蓬〉「竭は」、〈静〉「竭は」。9 〈近〉「てうなり」、〈蓬・静〉「徴也」。10 〈近〉「つくる」、〈蓬・静〉「竭」。11 〈蓬〉「必山」、〈静〉「必山」。12 〈近〉「くつる」、〈蓬〉「崩」、〈静〉「崩」。13 〈近〉「なけかれけるに」、〈蓬・静〉「歎せられけるに」。14 〈蓬〉「ノ」なし。15 〈静〉「申候と」。16 〈蓬〉「亡ひぬとそ」。17 〈近〉「なけき申ける」、〈蓬・静〉「歎申ける」。

【注解】 ○幽王褒姒烽火 この幽王褒姒の故事は、『史記』周本紀、『国語』鄭語、『呂氏春秋』慎行論・疑似、『列女伝』卷七・嬖嬖伝などに見える。日本では、『太平記』「君不見ヤ、殷ノ紂王ハ妲妃ニ迷イテ世ヲ乱リ、周ノ幽王ハ褒姒ヲ愛シテ国ヲ傾シ事ヲ」（卷四）「呉越師之事」・勉誠社『玄玖本太平記一』二四ウ、同「誠ニ褒姒一ビ笑テ幽王國ヲ傾ケ、玉妃傍ニ媚テ玄宗世ヲ失ヒ給ヒシモ」（卷三十三）「新田左兵衛佐義興自害之事」・勉誠社『玄玖本太平記五』一七ウなど、傾城傾国の故事としてよく知られたが、その詳細な全容を掲出するものは『平家物語』のほかには、『唐鏡』（古典文庫）『唐鏡 本文篇』五六（五七頁）、『楊嶋曉筆』（中世の文学二四五頁）などがある。『楊嶋曉筆』は『平家物語』を引いて載せたもの。ほかに『新樂府』注釈書類に「古塚狐」の注釈としても見える。〈闕・長〉は、幽王が褒氏國を亡ぼした際に、その國の人々が〈長〉「千年へたるきつねの子」（一―一七七頁）を有驗の僧の加持によって美女とし、周を亡ぼすた

めに幽王の元に送り込まれたとする、褒姒出生までの前日譚を語ったあとに、幽王褒姒の故事を載せる。〈盛〉は幽王・褒姒の故事引用のあとに、〈闕・長〉とは異なり、『史記』周本紀や『国語』鄭語、『論衡』異虚篇などに見える前日譚を「或説云」として引く（ただし〈盛〉は褒姒を亀の子とする）。幽王・褒姒故事は、『平家物語』諸本では、〈屋・覚・中〉は比較的簡略ではば同内容だが、〈延・盛〉はそれぞれに独自性が強い箇所がある。〈闕・長〉は独自の点もありつつ、比較的近い関係にある。○昔異国ニ周ノ幽王ト云シハ、宣王ノ子也。位ニ付給テ二年ト云フ春、山川大ニ震動セリ 〈早（黒）〉「別行 低書」とする。校異2参照。これは『史記』周本紀に「四十六年宣王崩。子幽王宮涅立。幽王二年、西周三川皆震（四十六年、宣王崩ず。子幽王宮涅立つ。幽王二年、西周の三川、皆、震す）」（新釈漢文大系『史記』一―一九三（一九四頁）とある内容にはば合致するとともに、『唐鏡』にも「第十二ノ主ヲバ、幽王ト申キ。宣王ノ御子也。位ニ即給テ、二

年ト云、三川^{山カ}皆震動ス」(五六頁)とある。ただ、「山川」は、『史記』や『唐鏡』は「三川」とする(なお、『唐鏡』は、古典文庫底本の彰考館文庫本は、「三川^{山カ}」とするが吉田幸一氏蔵本・内閣文庫蔵本は「三川」、松平文庫蔵本は「山川」とする。古典文庫『唐鏡 校異篇』五六頁)。「西周即ち鎬京の涇水・渭水・洛水の三つの川が震動して水が溢れ出た」(新釈漢文大系一一一九五頁)の意。他に『漢書』五行志下之上にも見える。《盛》は、この後、次項に見るように、「山川」に集約する形で本文を記す。《盛》の本文は、楊曉捷が指摘するように、一見して、『唐鏡』にかなり近く、《盛》が『唐鏡』を用いたと考えられる(三八〇四二頁)。他本はすぐに幽王が褒姒を寵愛した話に入り、この天変についての記述を持たず、例えば《延》冒頭は「昔、唐国ニ、周幽王ト云帝オハシケリ」(卷二四九ウ)とあるが、小林美和は、《延》の故事説話引用において、この「昔」で始まり、次に人物の存在を示す「昔……ト云者アリ」型が頻出することを指摘し、《延》に構成意識を見いだし、唱導的色彩を指摘する(一二二一―一二三頁)。○于時伯陽甫ト云人申ケルハ、「周スデニ亡ナントス。昔伊洛竭テ夏亡、河竭テ商亡タリキ。国ハカナラズ山川ニヨル。山崩河竭ハ亡之徴也。川竭トキハ山必崩。周ノ亡ン事十年ニスギジ」ト被歎ケルニ 伯陽甫は周の高官。『国語』では伯陽父。伊洛は伊水と洛水。「禹都陽城、伊洛所近也」(『史記集解』)とあるように、夏の都城に近かった。「河竭テ商亡タリキ」も同様に「商人都衛、河水所経也」(『史記集解』)と商都近くに河(黄河)があった。「竭」は「尽」に同じ。《盛》の記述は、『史記』「伯陽甫曰、『周將亡矣。夫天地之氣、不失其序。若過其序、民乱之也。陽伏而不能出、陰迫而不能蒸、於是有一」

地震」。今三川実震、是陽失其所而填陰也。陽失而在陰、原必塞。原塞、国必亡。夫水土演、而民用也。土無所演、民乏財用、不亡何待。昔伊洛竭而夏亡、河竭而商亡。今周德若三代之季矣。其川原又塞。塞必竭。夫国必依山川、山崩川竭、亡国之徴也。川竭必山崩。若国亡、不^レ過十年」。数之紀也。天之所棄、不^レ過其紀」。是歲也、三川竭、岐山崩。」(伯陽甫曰く、「周將に亡びんとす。夫れ天地の氣は、其の序を失はず。若し其の序を過つは、民之を乱せばなり。陽伏して出づること能はず、陰迫りて蒸ること能はず、是に於て地震する有り。今、三川、実に震するは、是れ陽其の所を失ひて陰に填ざるればなり。陽失ひて陰に在れば、原必ず塞がる。原塞がれば、国必ず亡ぶ。夫れ水土演^{うるは}ひて、民用ふるなり。土、演ふ所無ければ、民、財用に乏し。亡びずして何をか待たん。昔伊洛竭きて夏亡び、河竭きて商亡びき。今周の徳、二代の季の若し。其の川原又塞がる。塞がれば必ず竭く。夫れ国は必ず山川に依る。山崩れ川竭くるは、亡国の徴なり。川竭くれば必ず山崩る。若し国亡びば、十年に過ぎじ。数の紀なり。天の棄つる所は、其の紀を過ぎじ」と。是の歳や、三川竭き、岐山崩る。一一九四―一九五頁)を部分的(傍線部)に抜き書きしたような形である。抜き書きすることにより、三川の叙述(地震は王の不徳のため↓陽氣と陰氣が地中で戦い、三川が震動↓水源が塞がれ水が涸れる↓水源が塞がれ国は滅びる)は省かれ、山川の叙述に集約する形で記されている。遠藤光正は本箇所「山崩河竭ハ亡之徴也」について、『明文抄』帝道部上の「建武卅一年、是歲陳留雨穀、形如稗実、山崩川竭、亡之徴也。史記」「山崩河竭、亡之徴也。說苑」を提示しつつ、「出典は『明文抄』に採録の『後漢書』光武帝紀か『說苑』弁

物篇がその典拠であろう。しかしながら、光武帝紀の建武卅一年には「山崩川竭、亡之徴也」の八字はない。『明文抄』に採録の『史記』は『後漢書』の誤りであり、またその典拠は何に拠ったものか不詳であるが、『説苑』の弁物篇に見える「山崩川竭、亡之徴也」の句を合して合成句にしたものであろう。なお、『左伝』成公五年の条にも「山崩川竭」の四字がある（二五頁）と述べるが、右掲の通り『史記』にも見える。ただし、〈盛〉本文は、やはり『唐鏡』「伯陽甫ト云人ノ申ケルハ、『周ハマサニ亡ナントス。昔、伊洛竭テ夏亡ビ、河竭テ商亡タリキ。国ハ必山川ニヨル。山崩レ河竭ハ、亡ノ徴也。川竭時ハ山必ズ崩、国ノ亡ビン事、十年ニ過』トゾ、歎カレケル」（五六頁）とある形に酷似している。『唐鏡』は『史記』等の正史を直接参照し、翻訳・略述した作品であるから、〈盛〉が『唐鏡』とは別に『史記』を参照し、偶然に全く同様の省略を行ったとは考えにくく、『唐鏡』両者に共通する典拠がない限り、〈盛〉が『唐鏡』を利用したことになる。なお、〈早（黒）〉、「夏亡」に「ヒ」を補い、「河竭ハ」は「竭」の下に「ル」を補う。校異4・8参照。○次ノ年、幽王美人ヲ得タリ。其名ヲ褒姒ト云フ。イツシカ懷妊シテ皇子誕生アリ。伯服トゾ云ケル 褒姒の褒は国名で、姒が姓である。『史記』は、前掲の天変記事に続けて、褒姒の出生伝説（神龍の精の沫から生まれた女が、褒の国へ行っていて、そこから幽王に献上される）が語られた後、「三年、幽王嬖『愛褒姒』。褒姒生子伯服」。幽王欲『廃』太子」（三年、幽王、褒姒を嬖愛す。褒姒、子伯服を生む。幽王、太子を廃せんと欲す）（一一九六頁）とある。『列女伝』も同様。この出生に関する前日譚は〈盛〉では「或説云」として後置される。本箇所〈盛〉の直接の典拠は、

(四)

やはり『唐鏡』で、「次ノ年、王、褒姒ヲ愛シ玉フ。褒姒、伯服ヲ生メリ」（五六頁）に拠ったものと見られる。他本は、〈延〉「昔、唐国ニ、周幽王ト云帝オハシケリ。后ヲバ褒氏トゾ申ケル」（巻二四九ウ）、〈長〉「天下無双の美女、楊貴妃、李夫人のごとし。しかれば則、ほうじ妃と名づけ、幽王の第一の後と定。幽王の後たちは、褒氏后に光をとられて、寵居し給へり。大王、褒氏后をおぼしめす事、わりなく類すくなかりけり」（一七七頁）、〈闘〉「己乍寵二妃一依三自三褒姒国出三其三名を即号三褒姒三雖有二妃数三余無遷心三偏鐘愛褒姒三（已に一妃を寵しながら、褒姒国より出でたるに依つて、其の名を即ち褒姒と号く。妃数有りと雖も、余に心を選することも無く、偏に褒姒を鍾愛す。一下一二一オ）、〈屋・覚・中〉「周幽王、褒姒と云最愛の后を持ち給へり。天下第一の美人也（〈覚〉上一〇一頁。〈屋〉「天下第一の美人也」なし）などそれぞれ形は異なる。〈闘長〉に顕著に見られるように、基本的には後宮の中での褒姒への突出した寵愛が前面に出ており、いずれも『唐鏡』や〈盛〉が言及する、太子伯服の存在には触れない。○幽王ノ本ノ后ハ申候ト云人ノ女メナリケレドモ、彼ラステ、褒姒ヲ后トシ、伯服ヲ太子ニ立給ヒケレバ、世ハ既ニ亡ヌトゾ群臣歎申ケル 褒姒以前に、幽王の本の後申候の女が居たが、廃后され、褒姒の子伯服が皇太子となり、そのことを群臣達が歎いた、ということ。「申候」は申侯の侯。娘が幽王の後申后で、その子宜臼が太子だった。『史記』「太子母、申侯女、而為レ后。後幽王得『褒姒』、愛レ之、欲下廃申后、并去太子宜臼、以褒姒為レ后、以伯服為太子」。周太史伯陽説「史記曰、『周亡矣』（太子の母は申侯の女にして、后たり。後幽王、褒姒を得て之を愛し、申后を廃し、

并せて太子宜白を去り、褒姒を以て后と為し、伯服を以て太子と為さんと欲す。周の太史伯陽、史記を讀みて曰く、「周は亡びん」と（一一九六頁）、「当幽王三年、王之後宮、見而愛之。生子伯服。竟廢申后及太子、以褒姒為后、伯服為太子。太史伯陽曰「禍成矣、無可奈何」」（幽王三年に當りて、王、後宮に之き、見て之を愛す。子伯服を生む。竟に申后及び太子を廢し、褒姒を以て后と為し、伯服を太子と為す。太史伯陽曰く、「禍成れり。奈何ともす可き無し」と）（同一九七頁）とある。このことに触れるのも〈盛〉と『唐鏡』のみである。『唐鏡』には「王、申侯ノ女ヲステ、褒姒ヲ后トシ、伯服ヲ太子トシ玉ヘリ。世ハ既ニウセヌトゾ、群臣歎申ケル」（五六五七七頁）とあり、『史記』における伯陽甫の嘆きを「群臣」に置き

換える点など、やはり〈盛〉と『唐鏡』との一致が見られる。『史記』では、この後の展開において、廢太子に怒った申侯が西夷・犬戎らとともに幽王を攻め、その結果幽王が亡び、申侯らにより太子であった宜白が平王とされ、即位することになる。『唐鏡』は、後に「先ノ后ノ父、申侯、嬪ノ余、西夷ヲトモナヒテ、王ヲ責奉ル」（五七頁）と、その申侯の挙兵にも触れる。中国通史である『唐鏡』では、一連の歴史叙述の中に幽王・褒姒故事が置かれるため、ここで申侯の名前を出しておくことに十分な意味があるといえよう。しかし、幽王・褒姒故事だけを独立させた『平家物語』のような形の場合、申侯への言及は必須とは言えない。にもかからわず、〈盛〉が『唐鏡』同様の記述を持つのは、やはり〈盛〉が『唐鏡』に拠ったことを裏付けよう。

【引用研究文献】

* 遠藤光正『「源平盛衰記」に引用の漢籍の典拠（二）』（東洋研究〔大東文化大学東洋研究所〕七七号、一九八六・一）

* 小林美和「延慶本平家物語の説話構成―故事説話の位置について―」（立命館文学三八四・三八五号、一九七七・7。『平家物語語生成論』三弥井書店一九八六・5再録。引用は後者による）

* 楊曉捷「源平盛衰記における中国故事説話についての研究」（国語国文五五卷一〇号、一九八六・10）

此后三千ノ寵愛ニスグレ、万女ノ綺羅ニ越タレドモ、¹笑事サラニ²御坐サズ。³王コ、ロモトナク思食テ、⁴宮中ニ心ヲトビメ給ハヌニヤ。イカミシテ⁵笑顔ヲ見シ⁶ト思食ケルニ、大國ノ習、朝敵⁷ヲ禦キ⁸サントテ、⁹官兵ヲ召時ハカナラズ烽火ヲ揚ル事アリ。烽火¹⁰ト¹¹四六ハ我朝ノ¹²高灯籠ノ¹³如、大ナル統松ニ火ヲ付テ、高キ峰ニサ、ゲトモセバ、¹⁴烽火ノ司人¹⁵是ヲ見繼テ、四方ノ¹⁶嶽々峰々ニトモシツケテ、国々ノ兵ヲ召例アリ。サレバ、一月ニ行ベキ道ナレドモ、一日ノ内ニ知セケルナリ。是ヲ飛火¹⁷ト名タリ。¹⁸燧帝ノ猛火トイヘルハ是也。我朝ニモ奈良帝ノ御時、¹⁹東ヨリ軍ヲコラントセシカバ、春日野ニ飛火ヲ立始テ、其火ヲ守人ヲ被置タリキ。春日野ヲ²⁰飛火野ト申ハ是也。

【校異】 1 〈近〉「わらふ」〈蓬〉「笑」〈静〉「笑」。2 〈近〉「おはします」〈蓬〉「御座せず」〈静〉「御坐さす」。3 〈近・蓬〉「みかと」。4 〈近〉「わらひかほを」〈蓬・静〉「笑顔」を。5 〈近〉「ヲ」なし。6 〈近〉「くはんへいを」〈蓬〉「官兵を」〈静〉「官兵を」。7 〈近〉「ト」なし。8 〈蓬〉

「高灯^{タカトウロ}炬^ロの、〈静〉「高灯^{タカトウロ}炬^ロの」。9 〈近・蓬〉「ことく、〈静〉「ことし」。10 〈静〉「捧^{ホウ}火^カの」。11 〈静〉「嶽^{ダケ}々^{クミ}峰^{ミネ}々に」。12 〈蓬〉「夕^{ナツケ}付^{ツケ}たり、〈静〉「名^ナ付^{ツケ}たり」。13 〈近〉「ノ」なし。なお、「すいていみやうくはと」。〈蓬〉「燧^{スイ}帝^{ダイ}の猛^{マウ}火^カと」、〈静〉「燧^{スイ}帝^{ダイ}の猛^{マウ}火^カと」。14 〈静〉「ハ」なし。15 〈近〉「あつまより」、〈蓬・静〉「東^{アツマ}より」。16 〈近〉「とふ火^ヒのと」、〈蓬〉「飛^{トビ}火^カの野^ノと」、〈静〉「飛^{トビ}火^カの野^ノと」。

【注解】○此后三千ノ寵愛ニスグレ、万女ノ綺羅ニ越タレドモ、笑事サラニ御坐サズ『史記』「褒姒^{ホウシ}不好^ハ笑^ハ（褒姒は笑ひを好まず）」（新釈漢文大系『史記』一一一九頁）とあり、その『史記』に拠る『唐鏡』も「此褒姒、咲事ヲコノマズ」（古典文庫五七頁）と簡略。〈盛〉はここからは『唐鏡』の利用は見られなくなり、原典『史記』からも遠ざかり、『長恨歌』「三千寵愛在一身」（三千の寵愛、一身に在り）（新釈漢文大系『白氏文集』二二一—八一〇頁）を用いた独自の表現となる。「万女ノ綺羅」は典拠未詳。『平家打聞』にも「漢王^{ハン}三千人^{サン}ノ后在^{アリ}。其中^{ナカニ}、王照君^{ワウ}形勝^{ケイ}三^{サン}万女^{マン}三^{サン}云々^{云々}」（黒田彰・一六五頁）とある。「綺羅」は「栄花をきわめること、威光が盛んであること、寵愛を受けること（『日国大』）」の意で、「三千ノ寵愛」の対句表現として言ったもの。諸本間に異同は多く、〈延〉「此后、生ヲ受給テヨリ以来、咲給ハズ」（巻二四九ウ）は、誕生以来とする点が特殊。〈屋・覚・中〉「幽王ノ心ニ叶^ナハヌ事トテハ褒姒^{ホウシ}咲^スヲ不^マ含^マテ、スベテ咲^ス事無^キリキ。幽王無^キ本意事ニシテ御坐ケルニ」（〈屋〉一六五頁。〈覚〉「幽王無本意事ニシテ御坐ケルニ」なし、〈中〉「幽王ノ心ニ叶^ナハヌ事トテハ」なし）は、笑わないことを記す点は同じだが、ここで幽王の不満に触れる。〈闘〉「但此妃都不^レ言^フ（無笑^{ムセウ}）（幽王歎^ス此^{コノ}程^ニ）（但し此の妃都て言はず、笑ふこと無し。幽王此れを歎く程に。一下一二一オ）、「長」^{ものい}「されども此^{ものい}后、あへて物いふ事をし給はず。いはんやまた、ゑみをふくむ事もなし」（一—一七七—一七八頁）とあるように、〈闘・長

は褒姒が笑わただけではなく、物も言わなかったとし、〈闘〉では、そうした褒姒に対する幽王の歎きが明記される。この笑わただけでなく、物を言わない美人の話は、貝塚茂樹（二五七—二五八頁）や谷口義介（三〇七—三〇八頁）が褒姒説話への流入を指摘する、『春秋左氏伝』昭公二八年所引の賈大夫の妻が、夫が醜かったために「三年不言^レ不^レ笑^ハ（三年言はず笑はず）」（新釈漢文大系『春秋左氏伝』四一—一六〇〇頁）であったとされる例がある（この妻は夫が雉を射るのを見て笑う）。この話は『蒙求』「賈氏如皐」に見えるほか、独立して『瑠玉集』にもある。日本でも『唐物語』第三話に収録されている。〈長〉はこの後の箇所でも一貫して、物を言わないことと笑わないことを併記する。〈早（黒）〉、「笑」に「フ」を補う。校異1参照。○王コ、ロモトナク思食テ、「宮中ニ心ヲトツメ給ハヌニヤ。イカバシテ笑顔ヲ見シ」ト思食ケルニ『史記』「幽王欲^ス其^ノ笑^ハ、万^ノ方^ノ故^ニ不^レ笑^ハ（幽王、其の笑はんことを欲す。万方すれども、故らに笑はず）」（一一一九九頁）、『唐鏡』「王イカニカナシテ、咲セント、オボシテ、万方スレドモ咲給ハズ」（五七頁）とあるが、ここでも〈盛〉は独自本文となる。〈盛〉の幽王は、褒姒が「宮中に関心を持っていないのではないか」ということを不安になり、なんとかしてその笑顔を見たいという気持ちになった、とする。単純に笑顔が見たい、ということではなく、幽王の不安が起点になっている点が特殊である。また、その願望のみを記し、笑顔を見るためになんらかの行動を起こしていたことは描かれ

ない。その点は〈長〉「此后に、物をいはせて聞、咲をふくませて見んずるとおぼしめされけり」(一―一七八頁)も同じ。〈闘・屋・覚・中〉は、先に簡潔に幽王の嘆きや不満を記していた(前項注解参照)。一方、〈延〉「帝、此后ヲ寵愛シ給ケル余ニ、イカニシテエマセ奉ラント種々ノ態ヲシ給ケレドモ、ツイニエミ給ハズ」(卷二―四九ウ―五〇オ)は様々な試みを行ったとしており、これは『史記』と同様である。〈早(黒)〉、「笑顔」の「笑」に「エメル」と傍訓。校異4参照。○大國ノ習、朝敵ヲ禦キ亡サントテ、官兵ヲ召時ハカナラズ烽火ヲ揚ル事アリ『史記』「幽王為燧燧大鼓、有寇至、則拏燧火」(幽王、燧燧大鼓を為り、寇の至る有れば、則ち燧火を拏ぐ)(一―一九九頁)に該当する箇所だが、字句等はあまり一致しない。『唐鏡』には、「燧トテ、敵ノ至ル事アル時、此火ヲ拏レバ、事イデキタリトテ、諸侯ドモ参集ル」(五七頁)とある。『平家物語』諸本には字句は異なるが、共通して烽火に関する記述がある。〈長〉「彼国には、官兵をめしあつめんとての籌には、飛火をあぐるならひあり」(一―一七八頁)が〈盛〉に最も近い。〈屋・覚〉「異国の習には、天下に兵革おこる時、所々に火を揚げ、大鼓をうって兵を召すはかり事あり」(覚上―一〇二頁)、〈中〉「彼国のならひとして、天下に事のいできたる時は、ほうくわとて、都よりはじめて、たかき所に火をあげ、たいこをうちて、くにかゝのつはものをめさるゝはかりことあり」(上―一〇七頁)。〈闘〉は特殊で「為其国の習と有リ烽火大鼓と云事天下に事出来則大鼓の中ニ燃火」飛此問諸方ノ武士悉群集平朝敵静天下(其の国の習ひと為て、烽火の大鼓と云ふ事有り。天下に事出で来たれば、則ち大鼓の中に火を燃やして此れを飛ばす間、諸方の武士、悉く群集し

て朝敵を平らげ、天下を静む。一下―二一オ)と「烽火」と「太鼓」を一体のものとみなす。〈延〉は、こうした烽火の説明は、烽火を上げて兵が集まるのを見て褒姒が初めて笑ったことを記した後に、「烽火トハ大國ノ習、都ニ騒事出来ヌレバ、諸國へ兵ヲ召ムトテハ、烽火灯炉ト名テ、火輪ヲ飛ス術ヲシテ、王城ノ四方ノ高嶺峯ニトボシテ、諸國ノ兵ヲ召也。又ハ統天輪トモ名タリ。此烽火出キヌレバ、都ニ事出キタムナリトテ、国々ノ兵、城へ馳参ル。是ヲ飛火トモ名タルニヤ」(卷二―一五〇オ)と続ける。これは〈延〉独自の記事で他本には見られない。その典拠は未詳。○烽火トハ我朝ノ高灯籠ノ如、大ナル続松ニ火ヲ付テ、高峯ニサ、ゲトモセバ、烽火ノ司人は見継テ、四方ノ嶽々峰々ニトモシツケテ、国々ノ兵ヲ召例アリ。サレバ、一月ニ行ベキ道ナレドモ、一日ノ内ニ知セケルナリ。是ヲ飛火ト名タリ日本との対比は、〈長〉に「烽火とは、我朝にも、飛火の野守といひて、たかき峰に、火をとぼす事ありき」(一―一七八頁)と簡単な記述があるが、他本には見られない。〈盛〉の独自記事。〈長〉にも「飛火の野守」への言及があるように、〈盛〉「烽火トハ」以下の箇所は、歌語「飛火」・「飛火野」をめぐり、主に『古今和歌集』所収歌「春日野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありてわかなつみてん」(春歌上19・読人しらず。新大系二四頁)の注として古今注や歌学書に類似の内容が見える。『和歌重蒙抄』卷二「ムカシモロコシニイクサセシトキ、ヨホキナルタイマツヲヤマノミネゴトニタテ、イクサヲコリクレバ、次第ニヒヲトモシレッ、一月ニユクホドナレバ一日シル。コレヲ烽火トイフ」(『和歌重蒙抄注解』青簡舎、一三七頁)。『和歌色葉』下「とぶひといふ事は昔唐にいくさせし時、大きなたいまつを山の嶺にた

て、軍おこりければ、次第に火をつけて一月に行くべき程なれども、一日のうちにしらせける也。是をとぶひと云ふ」（日本歌学大系三二二七頁）。『古今集素伝懐中抄』「昔大国にいくさせし時、大成統松を峯に立ていくさのをこり来れば次第に火を付て一月に可行道なれども一日のうちにしらせけるなり。是をとぶ火云」（古今集注釈書影印叢刊『古今集素伝懐中抄』七八頁）。『古今集大江広貞注』「大国には軍あるとき、高山の岑に火をともしけり。他国の軍起る時は、百日二行所へも、この火をともしけるをみて、ともしつぎければ、片時が内に都へつげしらせけり。一町に一所とす也。是を見て、武士都へ馳集と云々。とりのとぶごとくはやくともしつげば、とぶ火と云り」（京都大学国語国文資料叢書『古今集注 京都大学蔵』一八六頁）。〈盛〉の記述もこのような説がもととなっているのだらう。さらにこの説は展開し、『弘安十年古今集歌注』「大国ニ燧ト云事アリ。是ハ都ニ不思議ナル事出来レバ、諸国ニ早ク知センガ為ニ都ノ四方ニ高ク塚ヲツキテ、上ニ家ヲ作テ、ソレニ人ヲ置。彼臺ヲ燧野ト云。京ニ事出来レバ、火ヲトモシテ四方ノ岡ヨリ指上グ。是ニミツタエハトモス程ニ、諸国ニ知（ラス。又、烽火ハ上グレバ、空ヲトビアリクト云ヘリ。故ニトブ火トイヘリト云説アリ。所詮、彼火ヲ見付テ、諸国）程ナク群兵集マル」（赤尾照文堂『中世古今集注釈書解題』二二一三五〇、三五一頁）。『毘沙門堂本古今注』「トブヒノ野守トイフ事、サマハ也。文選ニモ拳燧トイヘリ。大国ニハ都ノ四方ニツカヲツキテ、ソレニ人ヲ、キテ、都ニ大事出来レバ火ヲアグ。伝々シテ、一時ニ千里ノ知コトヲ得。見之四方ノ遠士ハセアツマル。ナツケテ燧火ト云リ」（人間文化研究機構国文学研究資料館『中世古今和歌集注釈の世界』）勉強

出版、四五三頁）などある。その他の諸説としては、『口伝和歌釈抄』「古歌枕には、とぶひととはむかし、たうのわう、日本をうちとらんとしけるに、よろづのごとに人をきてありけり。その人たのいくさくるときには、たかきおかにのぼりてひをともしければ、それをみつけてしだいにひをともせば、いくさ、これをしるしにて、日本をかためたり。のもりとは、のをあづかる心か。本文をみるべし」（冷泉家時雨亭叢書『和歌初学抄 口伝和歌釈抄』六六ウ・六七オ、『奥義抄』（慶應義塾図書館蔵本）「是は飛火の野守出て見よとよむべし。此野をとぶ火野と云事は、むかしは国々にはやくきかすべき事あれば、所々に大なる火を立ければ、次第にみつぎて是を立てをき、遠き国にも一日の内にしらせせる也。其野を守るものとぶ火の野守とは云也。此とぶ火はもろこしよりおこれる事也。日本記にみえたり」（『奥義抄古鈔本集成』和泉書院、七七頁）など。〈盛〉にある「我朝ノ高灯笼ノ如」は歌学書などに類例を見ないが、「高灯笼」は、「人の死後七回忌まで、その霊を慰めるために、盂蘭盆会のある七月に立てる高い灯笼」（『日国大』。『明月記』寛喜二年（一二三〇）年七月十四日条に「近年、民家今夜立長竿、其鋒付如灯笼（張紙）、拳灯、遠近有之、逐年其数多、似流星人魂」とある。○燧帝ノ猛火トイヘルハ是也「燧帝」は古代の伝説上の帝王で、はじめて木を鑽り火を取ったという燧人。『韓非子』五蠹第四十九「民、食果蠃蟪蛄腥臊惡臭、而傷害腹胃、民多疾病。有聖人作、鑽燧取火、以化腥臊、而民說之、使王天下、号之曰燧人氏」（民、果蠃・蟪蛄・腥臊・腥臊・惡臭を食ひて、腹胃を傷害し、民、疾病多し。聖人作る有りて、燧を鑽りて火を取り、以て腥臊を化す。而して民之を説び、天下に王たら

しむ。之を号して燧人氏と曰ふ。新釈漢文大系『韓非子』下二八二七頁）などに見える。「燧帝ノ猛火」という語は、『三教指帰』下巻「夏則緩意披襟。対_二太王_一之雄風」。冬則縮頸覆_レ袂。守燧帝之猛火（夏は意を緩うして襟を披いて太王の雄風に對ひ、冬は頸を縮め袂を覆うて燧帝の猛火を守る）」（旧大系二一八―一九頁）に拠る表現であるが、『三教指帰』注釈書類では「典言云、燧人氏作_二鑽木_一取_レ火、燒_レ生_二為_レ熟_一、令_レ人_二無_レ腹_一疾、遂_二天_一之意、故云燧人氏者也、燧人者古ノ王者也。光_一通曆_二曰_一、燧人氏鑽_レ燧出_レ火、教_レ人_二熟_一食_二」（国会図書館蔵正保二年刊本『三教指帰注』（覚明注）卷五十一丁オ。国会図書館デジタルコレクションによる）と佚書『典言』『通曆』などを引くが、燧人と烽火には特に関係は見いだせない。〈名義抄〉が「烽」「燧」「美燧」「逢火」「燧」にいずれも「トブヒ」の訓を持ち（仏下末三七・三八・四三）、元和古活字版『和名類聚抄』にも「烽燧〈火燧附〉説文云烽燧〈峯遂二音度布比〉辺有警則举之、唐式云諸置烽之處置火台、台上挿擲〈音厥、俗云保久之〉」（臨川書店『諸本集成倭名類聚抄』本文篇・卷二二丁オ）とあるほか、先掲『和歌童蒙抄』の「コレヲ烽燧トイフ」の例のように、烽火のことを「烽燧」とも言ったことからの類推ないし混同だろう。『和名類聚抄』「燧」には、「ひうち」の例として「古史考云、燧人氏造鑽燧〈音遂和名比字知〉、始出火」（卷二二丁オ）と、燧人の例を挙げている。『和歌色葉』も、前掲箇所につづいて、「燧帝の猛火といへるは是なり」（三二二七頁）とし、〈盛〉と同文を持つ。『和歌色葉』の中下巻の和歌注釈箇所も多くは「中下巻は、『和歌童蒙抄』『奥義抄』に依拠する部分が極めて多く、独自の説はほとんど見られない」（『和歌文学大辞典』

一三一八頁）と言われるが、この一句に関しては『和歌童蒙抄』『奥義抄』ともに見られない。なお、『古今集素伝懐中抄』にも、前掲箇所につづいて「燧帝猛火と云ルハ此也」（七八頁）とある。その他、『色葉和難集』は「春日のゝ」歌について「祐盛云」という形で佚書『祐盛抄』を引く形で、「祐盛云、とぶひといふ事は、昔唐にいくさおこりし時は、おほきなるまつをたかき山にたてゝみすれば、それをみつけて次第くにつづいて、一月などに行べき所にも一日のうちにしらせけるなり。燧帝の烽火といへりしは是なり」（日本歌学大系別巻二一三九八―三九九頁）とするが、「少なくとも全体の七割以上を奥義抄・和歌色葉などの転載によってまかない、しかもそれに自ら資料を増補することも多くはなかった歌学書であると推定」（浅田徹・三五頁）されており、それに従えば『和歌色葉』『燧帝の猛火』のような説を承け、それを誤伝したものであろう。〈盛〉はこうした歌学書・古今注の所伝を承けたものであろう。○我朝ニモ奈良帝ノ御時、東ヨリ軍ヲコラントセシカバ、春日野ニ飛火ヲ立始テ、其火ヲ守人ヲ被置タリキ。春日野ヲ飛火野ト申ハ是也。春日野は春日山および春日神社を中心とする春日山麓の西面丘陵地帯で、平城京の発展に伴い、春日山西麓（平城京の東方の春日山麓の台地）が春日野といわれるようになったという（角川地名・奈良県 三〇八頁）。春日野の烽火に関する歴史的事実としては、『続日本紀』和銅五年（七一二年）正月二十三日「壬辰、廢河内国高安烽、始置高見烽及大倭国春日烽、以通平城也（壬辰、河内国高安烽を廢め、始めて高見烽と大倭国春日烽とを置きて、平城に通ぜしむ）」（新大系一一七八―一七九頁）が該当しようが、本所説は、『和歌童蒙抄』に前掲箇所につづけて「ム

カシ奈良ノ京時、アヅマヨリイクサキタラムトセシニ、カノトブヒヲ
アゲタリシニ、コノカスガノニタテハジメテ、マモリ人ヲ、キタリキ。
ソレヨリトブヒノトイフナリ」（一三七頁）とあり歌学書と共通する
もの。『和歌色葉』にもやはり「日本にも昔奈良の京の時、あづまよ
り軍おこらむとせしに、彼のとぶ火をあげて、このかすが野にたては
じめてその火をまぼる人を置きたりき。それより春日野をとぶとい
ふ也」（二二七頁）とある。その他、前掲の『古今集素伝懷中抄』『古

【引用研究文献】

* 浅田徹「祐盛抄について―奥義抄・和歌色葉との関係から―」（国文学研究九集、一九八九・10）

* 貝塚茂樹「東周王朝の成立と諸侯国の独立」（貝塚茂樹著作集 第一巻 中国の古代国家 中央公論社一九七六・5）

* 黒田彰「島原松平本『平家打聞』」（矢野貫一・長友千代治編『日本文学説林』和泉書院一九八六・9）

* 谷口義介「褒姒説話の形成―中国古代における大地母神の残影―」（熊本短大論集三七巻三号、一九八七・2。『中国古代社会史研究』朋友書店
一九八八年・3再録。引用は後者による）

異賊幽王ヲ¹可奉^レ傾之由聞ヘケレバ、飛火ヲアゲテ兵ヲメス。²官兵馳集テ旗ヲナビカシ、戈ヲサ、ゲテ、鑢ヲ並ベ時ヲ³作りケルニ、后始
テ⁴笑給ヘリ。サラヌダニ見目形タグヒナクウ⁵ツクシカリケル上、⁶咲給ヒタリケレバ、イトゞ⁷百ノ媚ヲゾ増給フ。帝ウレシキ事ニ思召、
常ニ飛火ヲ揚ラレテ兵ヲ⁸集給フ。或ハ千里ノ山川ヲ分来、⁹或ハ八重ノ波路ヲ凌上ル。ソモ軍ナラネバ、¹⁰兵本国ニ帰下ル。国ノ費、人ノ
歎、云フハカリナシ。カ、リシ程ニ、幽王ヲ亡サントテ凶賊襲来ケレバ、又¹¹烽火ヲ被^レ上タリ。諸国ノ軍兵是ヲ見テ、例ノ后ノ¹²烽火ト思ケレバ、
官軍進ミ参事ナクシテ、幽王忽ニ滅ニケリ。¹³サテコソ后ヲ¹⁴褒姒僻愛トハ申ケレ。又ハ傾城トモ¹⁵名タリ。都ヲ¹⁶傾ト云フ読アレバ、当初ハ
誠ケレドモ、¹⁷近來ハ人ゴトニ傾城トゾ呼ケル。

【校異】 1〈近〉「かたふけたてまつるへきの」、〈蓬・静〉「かたふけ奉るへきの」。2〈近〉「くはんへい」、〈蓬〉「官兵」、〈静〉「官兵」。3〈蓬・
静〉「つくりたりけるに」。4〈近〉「わらひ給へり」、〈蓬〉「笑給へり」、〈静〉「笑給へり」。5〈近〉「わらひ給ひたりければ」、〈蓬〉「笑給ひたり
ければ」、〈静〉「笑給ひたりければ」。6〈近〉「もゝの」、〈蓬・静〉「万の」。7〈近〉「あつめ給ふ」、〈蓬・静〉「めし給」。8〈近〉「さんせんを」。
9〈蓬〉「本国に兵」、〈静〉「本国に兵」。10〈静〉「捧火を」。11〈静〉「捧火と」。12〈蓬〉「后をは」、〈静〉「后をは」。13〈近〉「ほうしへきあいて」

今集大江広貞注』『古今集弘安十年歌注』『毘沙門堂本古今注』他、多
くの古今集注釈書が、「春日野の」歌の注に同様の説を引いている。「守
人」すなわち歌語でいう「野守」への言及も含め、こども〈盛〉は前
項と同様の歌学書の説に拠ったのだろう。ただし、〈盛〉は「奈良京」
（平城京）とすべきところを「奈良帝」とする誤りを犯している（和
銅五年は元明帝）。

とし、「て」に縦線あり。右に「とは」と傍書 14 〈蓬〉「ハ」なし。15 〈蓬・静〉「名付たり」。16 〈近〉「ヲ」なし。17 〈近〉「かたふくと」、〈蓬・静〉「傾くと」。18 〈近〉「此ころは」、〈蓬〉「近來は」、〈静〉「近來は」。

【注解】○異賊幽王ヲ可奉・傾之由聞ヘケレバ、飛火ヲアゲテ兵ヲメス。官兵馳集テ旗ヲナビカシ、戈ヲサヘゲテ、鑼ヲ並べ時ヲ作りケルニ、后始テ笑給ヘリ。たまたま生じた異賊襲來の誤報により、褒姒が初めて笑顔を見せる。「鑼」は字義としては、かま、なべなどの意（大漢和）。〈蓬・静・近〉などの読み「クツバミ」に従えば「鑼」がよい。ただし、二卷本『色葉子類抄』に「鑼俗ク、ミ」（ク雑物・卷下上21オ）、十卷本『伊呂波字類抄』（大東急本）も「鑼 クツハミ ク、ミ 馬銜也」（ク雑物・6—66オ）とあり、また節用集類でも、天正十八年本・易林本では「鑼」を、文明本や天正十七年本では「鑼」を「クツハミ」と読んでいる。古辞書の世界では、「鑼」の異体として「鑼」が使われていたか。『史記』は前掲の烽火の説明に続けて、「諸侯悉至。至而無寇、褒姒乃大笑（諸侯悉く至る。至れども寇無し。褒姒乃ち大いに笑ふ）」（新釈漢文大系『史記』一一一九九頁）とある。この『史記』や『列女伝』など、褒姒が初めて笑うきっかけとなった烽火は、意図的なものではなかったとすることが多い。ただし、『唐鏡』は「王、万ノ事ヲシ玉フ余、此燧ヲアゲ玉フニ、ソコロノ人々、国々ヨリ参集ルニ、何事モナカリケルヲ、褒姒大ニ咲玉ヘバ」（古典文庫五七頁）とし、幽王は褒姒を笑わせるため色々なことをなされたのだがついに、烽火をあげたとする。他に『新樂府注』（真福寺本）「此妃ノ咲エ嘲無。御門無類」思召ケル様ニ、嘲ハセム事タばかりて、とぶひと申ス火ヲ揚カ、ゲ給ニケリ」（太田次男①・四三二頁）、『新樂府略意』（真福寺本）「而為令后」咲「忽举烽」后始咲」（太田次男②・

三三五—三三六頁）として最初から褒姒を笑わせるために烽火をあげている。また、『史記』『列女伝』いずれも、兵が慌てて集まったものの、実は誤報で何事もなかったという、そこまでの一連の様子を見て褒姒は笑ったということになる。この点に関しては『唐鏡』も同じ。一方、〈盛〉では、兵士が集まった様子を見て、その段階で褒姒は笑っており、笑う直接の理由が異なる。〈延〉も「或時天下ニ事出テ烽火ヲ上、時ヲ作テ甲冑ヲヨロヘル武者宮城ニ充滿セリ。是ヲ見給テ后初テユミ給ヘリ」（卷一五〇オ）と集まった兵を見て笑ったとする。その点に関しては〈盛〉は〈延〉に比較的近い。なお、『呂氏春秋』慎行論・疑似は〈延・盛〉と同じく「周宅 酆鎬 近 戎人、与 諸侯 約、為 高葆禱於王路、置 鼓其上、遠 近 相聞。即 戎寇至、伝 鼓相告、諸侯之兵皆至、救 天子」。戎寇至、幽王擊鼓、諸侯之兵皆至、褒姒大笑而笑（周は酆・鎬に宅して戎人に近し。諸侯と約し、高葆禱を王路に為り、鼓を其の上に置き、遠近相聞く。即ち戎の寇至れば、鼓を伝へて相告げ、諸侯の兵皆至りて、天子を救ふ。戎の寇至るに、幽王鼓を撃ち、諸侯の兵皆至る。褒姒大いに説びて笑ふ）」（明治書院・新編漢文選『呂氏春秋』下—八—三三頁）と兵が集まった様子で笑っているが、『呂氏春秋』の場合、烽火には触れず、太鼓のみによって兵が集められており、接点は認めにくい。一方、〈屋・覺〉は「或時天下に兵乱おこつて、烽火をあげたりければ、后これを見給ひて、『あなふしぎ、火もあれ程おほかりけるな』とて、其時初めてわらひ給へり」（『覺』上—一〇—一〇二頁）と、多くの烽火が上がった様子を見て

笑っている。〈中〉も烽火を見て笑ったとする点は〈屋・覚〉に同じだが、「ある時、火をあげ、たいこをうつ……」（上―一〇七頁）とあって、「兵乱」（〈覚〉）や「兵革」（〈屋〉）などへの直接の言及はなく、初度の烽火がなぜあがったのか具体的な説明はない。〈中〉の文脈に従う限り、初めての兵乱で幽王が亡びたとも読みうる。〈闘・長〉はそれぞれ、〈闘〉「或^ル時都^ニ有^レ事^ニ」飛^ニ烽火太鼓^ヲ件^ニ妃含^ニ笑^ニ穴面白^ニ哉^ニ大鼓飛^ニ空^ニ矣^ニ言^ニ（或る時、都に事有るに依りて、烽火の大鼓を飛ばしたるに、件の妃、笑みを含みて、『穴面白や、大鼓の空に飛ぶことよ』と言ひけり。一下―一二一オ）、〈長〉「ある時、幽王、朝敵を亡さんとて、烽火太鼓といふものあり。烽火太鼓とは、太この中に火を入れて、天を翔飛する術あり。是すなほち遠国のつはものをあつむるはかりことなり。今、此飛火を揚たるとき、ほうじ後のいはく、『ふしぎや、太鼓、翅はなけれども、天を翔術ありけり』とて、初面物をの給て、おほきにわらひ給き」（1―一七八頁）、と「烽火太鼓」を空飛ぶ太鼓と理解し、その様子を見て笑ったとしており、『史記』から大きく逸脱している。〈闘〉は前段でも「大鼓の中^ニ燃火^ヲ」飛^ニ此^ニ（大鼓の中に火を燃やして此れを飛ばす）」と同様の説明があったが、〈長〉は前段では「飛火をあぐるならひ」とあって、本箇所と一致しないうえに、重複がある。ここを見る限り、〈長〉は〈闘〉のような本文を承けつつ改変したのだろう。〈早（黒）〉、「笑給へり」の「笑」の右下に「ミ」と記す。校異4参照。○サラヌダニ見目形タグヒナクウツクシカリケル上、咲給ヒタリケレバ、イトゞ百ノ媚ヲゾ増給フ（ここに褒姒の笑顔の描写を挿むのは、〈闘〉「此妃一笑有百媚」（此の妃、一たび笑めば百の媚有り。一下―一二一オ）、〈覚〉「この后一たびゑめば百の媚

(五四)

ありけり」（上―一〇二頁）など、〈延・長〉を除く諸本に共通。『史記』等にはこうした描写はない。諸注が指摘するように、白居易「長恨歌」「廻^ニ眸一笑百媚生^ニ」六宮粉黛無^ニ顔色^ニ」（眸を廻らして一笑すれば百媚生じ 六宮の粉黛顔色無し）（新釈漢文大系「白氏文集」二下―八〇九〜八一〇頁）による表現。『新猿楽記』十二の公「廻^ニ芙蓉之臉^ニ二咲、成^ニ百媚^ニ、開^ニ青黛之眉^ニ半向、集^ニ万愛^ニ」（芙蓉の臉を廻らして一たび咲めば、百の媚を成し、青黛の眉を開きて半ば向かへば、万の愛を集む）（東洋文庫『新猿楽記』一五八〜一五九頁）など美人の形容としてよく用いられた。〈早（黒）〉、「百」の左に「（万）」と記す。校異6参照。○帝ウレシキ事ニ思召、常ニ飛火ヲ揚ラレテ兵ヲ集給フ『史記』「幽王説^ニ之^ニ、為^ニ数^ニ拳^ニ燧火^ニ」（幽王之を説び、為に数々燧火を拳ぐ）（1―一九九頁）に該当する。『唐鏡』「王喜テ、常ニ燧ヲ拳玉ケリ」（五七頁）とあり、『史記』に準じる。『平家物語』諸本では、〈延〉「其後、常ニ后ヲエマセ奉ラムトテ、烽火ヲ上、時ノ声ヲ作シカバ」（巻二一五〇オ）、〈闘〉「故幽王悦^ニ此^ニ、為^ニ奉^ニ令^ニ見物^ニ（無何事^ニ常飛^ニ此^ニ故に幽王此れを悦びて、見物せしめ奉らんが為に、何事も無きに常に此れを飛ばす。一下―一二一オ〜一二一ウ）、〈長〉「その時、幽王悦^ニて、すは、此后は、物のたまひたるは。ゑみを含給けるは」とて、后をわらはせ奉らんずるはかりことには、飛火をあぐ（1―一七八頁）、〈屋・覚・中〉「幽王嬉^ニシキ事ニシテ、此后烽火ヲ愛シ給ヘリトテ、無^ニ其事^ニ常ニ烽火ヲ揚^ニ給^ニフ」（〈屋〉一六六頁。〈覚〉「此后烽火ヲ愛シ給ヘリトテ」なし）など、それぞれ表現や字句は違うが同内容。○或ハ千里ノ山川ヲ分来、或ハ八重ノ波路ヲ凌上ル。ソモ軍ナラネバ、兵本国ニ帰下ル（こうした諸国から陸路・海路で馳せ

上ってくる兵士達の描写は諸本になく、〈盛〉の独自異文。『史記』『列女伝』『呂氏春秋』等いずれもなし。『唐鏡』にもなし。『平家物語』諸本のうち、〈闘〉「武士其雖_レ来無_レ怨無_レ怨_三即帰矣_二（武士其来たと雖も怨無し。怨無ければ即ち帰る。一下―二二ウ）」「屋・覚・中」諸侯来るにあたなし。あたなければ、則さんぬ」（〈覚〉上―一〇二頁）などは簡略だが、〈延〉「諸国ノ官軍馳参タリケレドモ、カ、ル謀ナリケレバ各本国へ帰ニケリ。東山へ行官軍ハ千里ノ道ニ小馬ヲハヤメ、西国へ趣クセムダ羅ハ八重塩路ヲ陵_ヅケリ。南北ノ国々モ又如此」（卷二―五〇オ）および〈長〉「是を見て、諸国の官兵驚て、王宮に事出来とて馳参。かゝる謀なりければ、事なき故に、をのく本国へ帰りけり。東海へ帰るものは、山里の山川を分、西海へをもむく者は、八重のしほちを凌けり」（一―一七八頁）には、むなく諸国へ帰る際の兵士の描写として、〈盛〉に類する表現が見える。なお、〈盛〉「八重の波路」は余り多く用いられないが、〈延・長〉の「八重の潮路」は歌語として、例えば『後拾遺和歌集』春上・四一・藤原節信「はるく_レとやへのしほちにおく網をたなびく物は霞なりけり」（新大系二四頁）など作例が多い。「千里ノ山川」に関しては、『歌枕名寄』「千里山」の作例として、九二九七・法性寺入道「みやこにて月の雲井やながむらんちさとの山のいはのかけ道」、九二九八・直幹「都おもふ我がこころしれば夜はの月ほども千里の山路こゆとも」（新編国家大観第十卷）など「千里山」に「千里の山」を掛けた例があるが、「千里ノ山川」は熟した表現とはいえず、文意としては〈延〉「千里ノ道」がよいが、「八重の波路（潮路）」の対句とする意図から改変したのでろう。〈長〉の「山里の山川」は「千里の山川」が乱れたものか。

○国ノ費、人ノ歎、云フハカリナシ 『史記』『唐鏡』『平家物語』諸本等、いずれも該当する記述なし。〈盛〉の独自異文。○カ、リシ程二、幽王ヲ亡サントテ凶賊襲来ケレバ、又烽火ヲ被上タリ 『史記』によれば、「其後不_レ信、諸侯益亦不_レ至」（一―一九九頁）とあり、諸侯達が烽火を信用せず召集に応じなくなっていた。『唐鏡』同様。『平家物語』諸本で、このことを記すのは、〈闘・長〉（後掲）および〈屋・覚・中〉「かやうにする事度々に及べば、参る者もなかりけり」（〈覚〉上―一〇二頁）。〈延・盛〉はそうした描写を持たず、すぐに「凶賊」の襲来につなげる。前述の通り、『史記』によれば、この「凶賊」は「又廃申后、去_二太子_一也。申侯怒、与_二繒西夷犬戎_一、攻_二幽王_一」（又、申后を廃し、太子を去るや、申侯怒り、繒・西夷・犬戎と与に幽王を攻む）（一―一九九頁）とあるように、娘を廃后され、子を廃太子された申侯の怒りによるものであった。『唐鏡』にも「先ノ后ノ父、申侯、噴ノ余、西夷ヲトモナヒテ、王ヲ責奉ル」（古典文庫五七頁）とある。故事冒頭部においては、『唐鏡』に依拠し、「申侯」の話題にも触れていた〈盛〉であったが、見てきたように、後半部においては『唐鏡』に依拠しておらず、ここでも「申侯」に触れることなく、単に「凶賊」とするのみ。比較的簡略に幽王褒姒の故事のみを語り、「申侯」に言及しない『呂氏春秋』も「至於後_一戎寇真至、幽王擊_二鼓_一（後に至つて戎寇真に至り、幽王鼓を撃つも）」（下―八二三頁）と単に「戎寇」とのみある。『平家物語』諸本では、〈延〉「或時戎軍ヨセテ幽王ヲ滅サントシケルニ、先々ノ如ク烽火ヲ上、時ノ声ヲ合セシカドモ」（卷二―一五〇ウ）、〈屋・覚・中〉「或時隣国ヨリ凶賊おこつて、幽王の都を攻めけるに、烽火を揚ぐれども」（〈覚〉上―一〇二頁。傍線部〈屋〉

「幽王ヲ討ントスルニ」（一六六頁）、〈中〉「ゆうわうのみやこをかたぶけんとせし時」（上一〇七頁）などとし、〈盛〉同様。〈長・闘〉は本箇所に、次の通り、異文を持つ。〈長〉「かくする事、すでに度々なり。其後は、兵心へて、馳参する事もせず。かく国をたばかりおほせて、秦帝公といふ大しやう軍をもて、褒氏国より幽王の内裏へをしよせたり。大王、人々、おどろきて、しきりに飛火を揚といへども」（一——一七八頁）とある。〈長〉は、褒氏国の人々が「はかりことを廻して」（一——一七七頁）狐の子である褒姒を幽王のもとに送り込んだとする前日譚を持っており、何度も召集されるうちに兵士達が召集に応じなくなっていたことを記し、その「はかりこと」がここに結実したとする。それをうけて、「秦帝公」（未詳）なる褒國の大將軍が攻め込んでくることになる。〈闘〉も同様の前日譚を持ち、やはり、「依此（こゝ）其後不参集（こゝ）雖（こゝ）然（こゝ）無（こゝ）何（こゝ）被致此事（こゝ）之間妃取（こゝ）課帝（こゝ）心（こゝ）褒似國王（こゝ）申（こゝ）事由（こゝ）王大に悦仰（こゝ）数万騎官兵（こゝ）令逼幽王（こゝ）于（こゝ）時幽王雖（こゝ）上（こゝ）烽火大鼓（こゝ）（此れに依りて其の後は参り集らず。然りと雖も何も無きに常に此の事を致される間、妃、帝の心を取り課し、褒似国の王に事の由を申しければ、王大いに悦びて、数万騎の官兵に仰せて幽王を逼めしむ。時に幽王、烽火の大鼓を上ぐと雖も。一下——二二ウ）」とする。いずれも前日譚同様、典拠未詳。〈早（黒）〉「来」の左下に「シ」を補う。○諸國ノ軍兵是ヲ見テ、例ノ后ノ烽火ト思ケレバ、官軍進ミ参事ナクシテ、幽王忽ニ滅ニケリ 何度も虚報の烽火に依って召集された兵士達は、本当の烽火を見ても虚報と思ひ参集せず、ついに幽王は亡びる。〈延〉「諸國ノ官兵等、例ノ后キエマセ奉ラン料ニテゾ有ラントテ、一人モヒラザリケレバ、幽王忽ニ

滅ビ給テケリ」（卷二一五〇ウ）、〈長〉「兵是を見て、例の後の、物のたまひわらひ給ふと思ければ、馳参事もせざりけり。つわもの、王宮へみだれ入て、幽王をうちとり、国をほろぼしてけり」（一——一七八頁）、〈屋・覚・中〉「例の妃の火にならツて、兵も参らず。其時都傾いて、幽王終に亡にき」（上一〇二頁）など。〈屋・覚・中〉に「都傾いて」とあるのは、他本に見える、「傾城」に関する所説が意識されたものか（次々項注解参照）。『史記』幽王挙烽火徴兵、兵莫至。遂殺幽王驪山下、虜褒姒、尽取周賂而去（幽王、烽火を挙げて兵を徴す。兵至るもの莫し。遂に幽王を驪山の下に殺し、褒姒を虜にし、尽く周の賂を取りて去る）（一一一九九頁）とあり、褒姒が捕らえられたところまでを記す。『唐鏡』も「王烽火アゲテ、兵ヲ召トモ、先々ニ習テ、独モマイル物ナシ。防戦人モナクシテ、麗山ノ下ニ、ハカナク成給ヌ、褒姒ヲバ、生取ニシ侍リケリ」（五七頁）とする。『平家物語』諸本は、次節に見るように、褒姒が狐となったとする説を持ち、『唐鏡』も「或説」として同説を持つ。○サテコソ后ヲ褒姒僻愛トハ申ケレ 以下、「傾城」の読みについての注記、「后」の後日譚、「化け狐」の本説が続くが、〈覚〉は後の後日談に触れるのみ。〈闘・延・長〉は〈盛〉と同じ構成だが、この一文に関しては〈盛〉のみの独自異文。〈盛〉を直訳すれば、こういうわけで后を「褒姒僻愛」というのだ、となるが、意味が通りにくい。この后を愛したことを「褒姒僻愛」と評したのだ、という意か。ただし次文とのつながりを欠く。『史記』の本故事冒頭部（天変記事直後）に「三年、幽王嬖愛褒姒」（三年、幽王褒姒を嬖愛す。一一一九六頁）とあった。「嬖愛」は、「特別に愛すること、この上もなくかわいがること、また、その人やもの」

の意（日国大）。『褒姒僻愛』の出典は不明。「僻愛」は、〈延〉「へきあい」、〈蓬・静〉「僻」と読んでおり、「嬖」の誤字ではなく意図的な用字であるならば、間違った愛、という意味。〈早（黒）〉には特に記載はない。

○又ハ傾城トモ名タリ。都ヲ傾ト云フ読アレバ、当初ハ誠ケレドモ、近來ハ人ゴトニ傾城トゾ呼ケル。あるいは后を傾城とも呼んだ。「城は王城の意味で」都を傾く」と読めるので、当初は后を傾城と呼ぶことを戒められていたが、近頃は皆「傾城」と呼ぶようになったの意。〈延〉「其ヨリ美人ヲバ傾城トゾ名ケタル。『城ヲ傾』ト云読アリ。此読ヲバ当初ハ誠ラレケレドモ、当世都ニハ猶傾城トゾヨバレケル」（卷二一五〇ウ）と同様だが、〈延〉は「城ヲ傾」という読みが誠められた、とあるので意味が取りにくい。〈盛〉はこのような本文の意味を取りやすくするため、「傾城」は「都を傾く」とも読めるのでこの語の使用を誠めた、という文意に改めたか。〈長〉「抑、美女をけいせいとは、幽王の時より名付たり。『みやこをかたむくる』といふ読あり。此よみをば、其かみは、いましめられけれども、当世には、傾城とぞよばるなる」（一——一七九頁）とし、重盛の言としてではなく、地の文として後掲される。〈闘〉は「自爾美女名傾城ト只非」傾城を為殺人乱世之媒不可不慎云（爾より

【引用研究文献】

- * 太田次男①「真福寺新樂府注と鎌倉時代の文集受容について——付・新樂府注翻印——」（斯道文庫論集七号、一九六八・三）
- * 太田次男②「釋信救とその著作について——附・新樂府略意二種の翻印——」（斯道文庫論集五号、一九六六・三）

彼后幽王亡給テ後、¹尾三ツアル狐ト成テ、「²四ハコウ／＼鳴シテ³古キ塚ニ入ニケリ。狐人ヲ⁴蕩トテハ、⁵化シテ婦人ト成テ⁶顔色好。頭ハ雲ノ⁷鬢ト変ジ、面ハ⁸嚴キ粧ト成テ、⁹翠眉不挙、¹⁰華ノ顔低タリ。忽然ニ¹¹タビ¹²笑バ千万ノ熊有。見人十人ガ八九ハ迷ヌ」トゾカ、レタル。

美女を傾城と名づけた。只城を傾くるのみに非ず、人を殺し世を乱す媒と為る。慎まざるべからず、と云へり。一下「二一ウ」とあり、「傾城」即ち美女が乱世の媒となるから慎むべき、という内容で〈延・長盛〉のように「傾城」という呼称や読みを戒めるのではなく、「美女」を愛することを戒めている。また、〈闘・延・長〉いずれも美女を傾城と呼んだとされているのに対して、〈盛〉は后を傾城と呼んだとしている。なお、「傾城」の語は、『漢書』外戚伝「孝武李夫人」に引く、李夫人の兄李延年の歌に「北方有佳人、絶世而独立、一顧傾人城、再顧傾人国、寧不知傾城与傾国、佳人難再得」（中華書局『漢書』第二冊・三九五頁）として出る語で、白居易『新樂府』「李夫人」の最末句「人非木石皆有情、不如不遇傾城色」（人は木石に非ず 皆情有り 如かず 傾城の色に遇はざらんには）（『新釈漢文大系』『白氏文集』一——一七二頁）にも用いられて人口に膾炙した。〈延全注釈〉も指摘するように、早くは『詩経』大雅・瞻卬に、「哲夫成城、哲婦傾城」（哲夫城を成し、哲婦城を傾く）（『新釈漢文大系』『詩経』下——一九二頁）とあるが、この場合の「傾城」は、女が美人であることを言っているわけではない。褒姒を、美女や后を「傾城」と呼ぶ始発とする説は未詳。また読みの禁忌についても未詳。

【校異】 1 〈蓬〉「尾」^{ヲノ}「尾」^ヲ。 2 〈蓬〉「古塚」^{フルツカ}に。 3 〈近〉「とらかすとては」、〈蓬〉「とらかさんとは」、〈静〉「蕩さんとは」^{トウカ}。 4 〈近〉「くはして」、〈蓬・静〉「化して」^ケ。なお、〈静〉右に「文集」を傍記。 5 〈近〉「かんしよく」、〈蓬・静〉「顔色」^{カシヨク}。 6 〈近〉「ひんつらと」、〈蓬・静〉「鬢と」^{ヒツツ}「鬢と」^{ヒツツ}。 7 〈近〉「うつくしき」、〈蓬・静〉「敵」^{イフシキ}。 8 〈近〉「みとりのまゆあからず」、〈蓬〉「翠眉不^レ挙」^{アヲキマユ ス モケス}。 9 〈近〉「はなのかほうなたれたり」、〈蓬〉「花顔低たり」^{ハナノカホタレ}「静」^{ハナノカホタレ}「花顔低たり」。 10 〈近〉「たちまちに」、〈蓬〉「忽然に」^{コツセン}「静」^{コツセン}「忽然に」。 11 〈近〉「あめは」、〈蓬・静〉「笑は」^{エメ}。 12 〈近〉「わさみる」とし、「み」の右に「有」を傍書。なお、「態」は、〈蓬・静〉「態」^{タイ}。 13 〈近〉「まよひぬとそ」、〈蓬〉「迷ぬとそ」^{マヨヒ}「迷ぬとそ」^{マヨヒ}。

【注解】 ○彼后幽王亡給テ後、尾三ツアル狐ト成テ、コウコウ鳴シテ古キ塚ニ入ニケリ 「コウコウ」は狐の鳴き声を模した擬音語。〈本全釈〉三一―四頁「コウコウ」項注解参照。この「コウコウ」という擬音語は、他に『沙石集』『曾我物語』『名語記』などに例があり、江戸時代まで続いたという（山口仲美・二二―二五頁）。前節「諸国ノ軍兵是ヲ見テ、例ノ后ノ烽火ト思ケレバ、官軍進ミ参事ナクシテ、幽王忽ニ滅ニケリ」項注解に示した通り、『史記』では幽王は亡くなり、褒姒は捕らえられたとし、『唐鏡』も同様だが、『平家物語』諸本は異なる結末を持つ。この褒姒が三尾の狐となつて古塚へ入ったとする〈盛〉の記述は、〈延〉「彼后後ニハ尾三アル狐ニナリテ、古キ塚へ逃去ニケリ」（卷一五〇ウ）が近く、〈闘〉にも「其時件ノ妃作^テ尾三狐ト如^ニ稲妻^ニ」失^ヌ（其の時、件の妃、尾三つの狐と作りて稲妻のごとくに失せぬ。一下―二二ウ）とあり、やはり三尾の狐とする（〈闘〉欄外注「或尾九」。なお「傾城」説の前に置かれる）。〈長〉は「かくして後は、ほうじ后は、白狐の尾三あるに現じてうせにけり」（一―一七八頁）と「白狐」とし、〈覚〉「さてこの后は、野干^{ヤカン}となつてはしり失せるぞおそろしき」（上―一〇二頁）、〈中〉「其後此きさは、やかんとなりて、かきけつやうにうせられけり」（上―一〇七）

一〇八頁）と単に「野干」とする。ほかに由阿『詞林采葉抄』『烽燧火』は「幽王遂^ニ麗山ノ下ニテ失^ヲ」^{キヤキ}。后ハ尾ニアル命婦（引用者注、狐のこと）トナリテ失^ヲ訖^ヲ」（冷泉家時雨亭叢書『詞林采葉抄 人丸集』二八七頁）とし、褒姒を双尾の狐とし、やはり姿を消したとする。〈屋〉には唯一該当記事がないことから、〈全注釈〉は本来はなかったものとして後補と見、また、後掲の、『纂図附音増古注千字文』に見える姐己九尾狐説をあげて、こうした説との混交と見たが（上―三一五頁）、美濃部重克は、褒姒の妖狐変身譚は、読み本系諸本にも見られること、『唐鏡』にも「或説ニハ狐狸ノ変化トモ申セリ」（古典文庫五七頁）と見え、『神明鏡』『下学集』態^モ門、『玉藻前物語』などに、天然の班足王の塚神、大唐の幽王の後褒姒、日本の鳥羽院の玉藻前に現じたという伝説が見えることをあげ、後補説・混交説については「存疑」を表明している（一九七頁）。王貞は、日中の褒姒変身譚を整理し、「褒姒龍やトカゲに関する変身譚は中国において定着した知識として共有されていた」（五一頁）こと、「中国における褒姒に関する話の中で、狐の化物というような変身譚は存在しない」（五二頁）ことから、日本における褒姒を狐とする説の誕生を促した理由として、『平家物語』が成立した時代の日本において、狐―女性の変身譚が龍やトカゲ

「女性の変身譚より受け入れられやすかった」こと、「時間上、妲己の話がすでに日本に受容されており、そのうえで妲己と褒姒の身分などの面においても共通点があるため、妲己が狐に変身して逃げ去った話は褒姒に流用してしまった可能性」、「日本文学に多大な影響を与えた中国の唐の文学では、国を滅ぼす美女を狐に喩える傾向が見られるため、『平家物語』の作者もこのようなモチーフを吸収して褒姒の話に転用した」(五六頁)ことを想定する。『平家物語』作者によるものかどうかは確定できないが、褒姒の妖狐変身譚が、日中両国で流布した妲己のそれとの関わりなかで発生・流布したものであることは認められよう。王貞が褒姒説話の流用元とみた妲己の狐の変身譚は、明代の小説類『平妖伝』『武王伐紂書』『封神演義』などに見られるが、その最古のものは、日本の大江匡房『狐媚記』(「嗟呼、狐媚変異、多載」史籍)。「殷之妲己、為九尾狐、任氏為人妻、到於馬嵬、為犬被」獲(「嗟呼、狐媚の変異は、多く史籍に載せたり。殷の妲己は九尾の狐と為り、任氏は人の妻と為りて、馬嵬に到りて、犬のために獲られき」)(日本思想大系『古代政治社会思想』一六七・三二〇頁)とされる(堀誠①・二五―二六頁)。ここに「多載史籍」とあることからすでに中国にもこうした所伝があった可能性が高い。なお、(全注釈)が指摘し、それをもって妲己と褒姒の混交説を論じた、『纂図附音増広古注千字文』の「周発殷湯」に対する注に「乃以確」(「即変」作「九尾ノ狐狸」也(現代語訳…そこで妲己を判断(押し切り、ギロチンの如きもの)にかけた。たちまち変じて九尾の狐狸となった」)(国立公文書館デジタルアーカイブ所載内閣文庫本画像による。現代語訳は岩波文庫『千字文』五四頁)が、早い例ともされるが、上野本・敦

煌本『千字文注』には当該記事はなく、果たして唐代以前の李邕(李邕)注に遡れるかどうかについては、疑義が呈されている(堀誠①・二四頁)。この『纂図附音増広古注千字文』の成立年代はおくとしても、『狐媚記』の言うことに従えば、日中両国に妲己妖狐説があったらしい。尾の多い狐は、中塚亮・今村遥も検証するように、古く『山海経』南山経に狐に似たものとして「有獸焉、其状如狐而九尾、其音如嬰兒、能食人、食者不蠱」(傍線部、食べれば、邪気を受けなくなる、あるいは、蠱毒の害を受けなくなる、などの意。中華書局・叢書集成初編二九四―四頁)などの記述があり、瑞祥としての「九尾白狐」が『呂氏春秋』に見えるほか、『白虎通』には子孫繁栄の象徴として見える。また『魏書』には「(高祖太和)十年三月、冀州獲九尾狐」以献。王者六合一統則見。周文王時、東夷歸之。曰、王者不傾於色、則至德至、鳥獸亦至。十一年十一月、冀州獲九尾狐以献。(十年三月、冀州九尾狐を獲え、以て献す。王者、六合一統すれば則ち見はる。周文王の時、東夷之に歸す。曰く、王者色に傾かざれば、則ち至德至り、鳥獸亦至る」)(十月三日、冀州で九尾の狐が捕らえられ、献じられた。王者が天下を統一すれば(九尾の狐が)現れるのである。周文王の時、東夷が(周文王に)帰順し、言った。王者が色に傾くことがなければ、至徳の世が訪れるのであり、鳥や獸もまたやってくるのである。中華書局『魏書』第八冊・二九二八頁)を初めとして数例の献上例が記され、『北史』『周書』にも見える。いずれも「天子の徳が高かったり、社会が正しく治まっている時に現れる、瑞獸として認識されている」(今村遥・一一七頁)。この九尾の狐がしだいに本来の形象から離れて蠱惑のシンボルへと変貌し、妲己と結びついていった

（中塚亮・八〇～八二頁）。以上は姐己妖狐説であるが、宮崎市定が、夏の桀王が末喜を、殷の紂王が姐己を、周の幽王が褒姒をそれぞれに寵愛し、国が滅びた物語は、同一の根源から生じたものであり、幽王・褒姒の物語が最初で、紂王・姐己のものが第二次の反映、さらに桀王・末喜の説話が第三次の反映と推測しているように（一一七～一一八頁）、これら末（妹）喜を含め、姐己・褒姒の物語自体が同趣向が繰り返されたものであるから、それらを並列して捉える例は数多い。例えば『史記』外戚世家に「夏之興也、以塗山。而桀之放也、以末喜。殷之興也、以有娥。紂之殺也、嬖姐己。周之興也、以姜原及大任。而幽王之禽也、淫於褒姒」（夏の興るや、塗山を以てす。而して桀の放たるや、末喜を以てす。殷の興るや、有娥を以てす。紂の殺さるや、姐己を嬖したればなり。周の興るや、姜原及び大任を以てし、而して幽王の禽にせらるや、褒姒に淫したればなり）」（『新釈漢文大系』『史記』七一九一七頁）や劉向『新序』に「禹之興也、以塗山。桀之亡也、以末喜。湯之興也、以有莘。紂之亡也、以姐己。文武之興也、以任姒。幽王之亡也、以褒姒」（明徳出版社・中国古典新書『新序』二八頁）などがあり、『国語』晋語には「昔夏桀伐有施、有施人以妹喜女焉。妹喜有寵、於是乎与伊尹比而亡夏。殷辛伐有蘇、有蘇氏以姐己女焉。姐己有寵、於是乎与膠鬲比而亡殷。周幽王伐有褒、有褒人以褒姒女焉。褒姒有寵、生伯服、於是乎与虢石甫比、逐太子宜臼、而立伯服。太子出奔申、申人鄩人召西戎以伐周、周於是乎亡」（昔は夏桀有施を伐ち、有施の人妹喜を以て女す。妹喜寵有り、是に於いて伊尹と比して夏を亡す。殷辛有蘇を伐ち、有蘇氏姐己を以て女す。姐己寵有り、是に於

いて膠鬲と比して殷を亡す。周の幽王有褒を伐ち、有褒の人褒姒を以て女す。褒姒寵有りて、伯服を生む。是に於いて虢石甫と比して、太子宜臼を逐ひて、伯服を立て、太子出でて申に奔る。申人鄩人西戎を召して以て周を伐つ、周は是に於いて亡ぶ」（『新釈漢文大系』『国語』上三三三頁）など、やはり末喜（妹喜）・姐己・褒姒の三者が並列されるとともに、いずれも滅亡させられた国から滅亡させた国へと献上され、その国を滅ぼしたとされる例もある。日本でもこれらを並列させる理解は広く見られ、藤原敦光『秘藏宝鑑鈔』の「夏運転覆、殷祚夷滅、周末絶廢、秦嗣早亡」の「周末絶廢」に関する注に「夏妹嬖、殷姐己、周褒姒、謂之三女禍」（続真言宗全書刊行会・真言宗全書11・三三三頁）とある。このように並列的に捉えられていた姐己と褒姒とが、妖狐説において交錯する接点の一つとして注目されるのが、白居易『白氏文集』巻四「新樂府」の「古塚狐（戒艶色也）」である（前掲、王頁のいう「唐の文学」もこの白詩をさす）。これは、「古い墳墓に棲みついた狐が、妖艶な美女に化けて人をたぶらかすことから歌い起し、それ以上に大きな災厄をもたらす生身の美女に溺れることを戒めるもの」であるが（『新釈漢文大系』『白氏文集』一七五六頁・解題）、蠱惑によって国家を亡ぼした美女の例として「何況褒姒之色善蠱惑、能喪人家覆人国」（何ぞ況んや褒姒の色の善く蠱惑し、能く人の家を喪ぼし、人国を覆すをや）（一一七五八頁）と褒姒・姐己への言及がある。堀誠②は、「狐魅」「狐媚」といった語の検討をしつつ、この白詩「古塚狐」において狐の「女妖」と女の「狐媚」、そして「褒姒之色」とが対比される点に、「少なくとも狐変姐己説の発生を内在するようで、その胚胎産生をも予感させるものである。加え

て、害毒甚大な女の容色や媚態が「狐媚」の称をもって呼ばれたからには、それが「狐」字を帯びる以上は、あながち姐己の如き狐変の妖婦の誕生を見たとしても何の不思議もあるまい」（四七頁）と述べる。堀誠②の論は、姐己についての指摘だが、同様のことは当然姐己だけで無く、褒姒に対しても当てはまろう。ここに、『唐鏡』「桀方末嬖、紂ガ姐己、此王ノ褒姒、国ヲ亡シ、君ヲ失ヒ奉ル、或説ニハ狐狸ノ變化トモ申セリ」（五七頁）、『十訓抄』中・五——一八「唐の殷紂、周の幽王の後、褒姒、姐己とて、二人ながら化物にてありけるを、帝、さとり知り給はず、ことに寵愛して、かのいふままに振舞ひ給ふあひだ、その国、亡びにけり」（新編日本古典文学全集二〇七頁）などとしてあらわれるような、両者を並列して「狐狸ノ變化」「化物」として捉える説や『神明鏡』『平家物語』『下学集』のような、褒姒を妖狐として捉える説の素地がある。〈延〉「彼后後ニハ尾三アル狐ニナリテ、古キ塚へ逃去ニケリ」も「古き塚」への言及がある点、あきらかに白詩「古塚狐」を意識しているし、次項注解に見るとおり、このあとには「古塚狐」の詩文の引用もある。先行して流布したと思われる姐己九尾狐説から褒姒妖狐説、さらには『平家物語』のごとき褒姒三尾狐説の生じた時期は不明だが、姐己妖狐説との混交によって、褒姒妖狐説が生じたとみてよいのではないか。○狐人ヲ蕩トテハ、「化シテ婦人ト成テ顔色好。頭ハ雲ノ鬢ト変ジ、面ハ嚴キ粧ト成テ、翠眉不挙、華ノ顔低タリ。忽然ニ一タビ笑バ千万ノ態有。見人十人ガ八九ハ迷ヌ」トゾカ、レタル「蕩かす」は、惑わせて本心を失わせる。また、心をやわらげて、うっとりするような感じにさせるの意（日国大）。「化シテ」以下は先述の『白氏文集』の『新楽府』「古塚狐」からの引用。

ただし、『新楽府』には「嚴キ」に該当する字はない。対句的な構成とするために加えられたか。「化為婦人」顔色好 頭変雲鬢「面変粧（中略）翠眉不挙花顔低 忽然一笑千万態 見者十人八九迷（化して婦人と為りて顔色好し 頭を雲鬢に変じ 面は粧ひたるに変じ（中略）翠眉挙げず花顔低る 忽然として一笑 千万の態あり 見る者十人に八九は迷ふ）」（二一七五七頁）。『説経才学抄』『諸聖教説釈』にも「楽府、古塚狐化為婦人、荒村路カタハラニ行キ傍間、日欲没一時人静 処或歌或悲啼、翠眉不挙、華顔低、一笑千万態。此声聞人八九心ヲ迷」（貞福寺善本叢刊『説経才学抄』四一七頁）と引かれる。岡田三津子は、〈盛〉本箇所『新楽府』引用が神田本『白氏文集』と「態」の訓を除いては、用字・訓ともに一致していることが確かめられる」と指摘する（三七八頁）。神田本は「化（カ）して婦人（フシメ）と為りて顔色好シ」（コト）ムナシ。頭「頭（カ）は雲鬢（クモノミヅナ）に變ジ、面ハ粧（カ）を『ニ』變ず（中略）翠眉（アイ）眉（ミ）、挙ケ（ア）ケ」不シテ、花ノ顔（ハナノカ）低（ヒ）リ。忽然に、一、笑（ミ）て（エム）ニ 千万ノ態（マンノカ）アリ、見る者十人、八九ハ迷（ヒ）ヌ」（太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』勉誠社・一一五頁）と訓ずる。〈延〉「狐ノ女ニバケテ人ノ心ヲラブラカスト云事ハ、本説アル事ニヤ、思合スベシ」トゾ宣ケル」（卷二一五〇ウ）、〈長〉「きつねの、女にばけて、人の心をたぶらかすと云、本説あるにや」（一——一七九頁）など、「本説」の存在を匂わせるがそれを示さない。〈盛〉はそれを明示した形。〈闕〉にはこの本説はない。岡田三津子は、〈盛〉が典拠を『新楽府』に求めて記事の補訂をおこなった際、『新楽府略意』の注がその連想に介在した可能性を指摘する（三七八——三七九頁）。『新楽府略意』

「古塚狐戒艶色也」、□□云千年狐能化婦人、法苑珠林云狐歷千歲能成妖怪云々 今案旧狐仮人形迷者為之失心何況人間美姫傾城邑」

亡国家自昔有之賢王聖主不貪艶色不失其国□〔盛〕之人必耽色滅国故誠之」（太田次男・三三五頁）。

引用研究文献

* 今村 遥「中国文学の狐―狐妖譚の変遷と九尾狐姐己の誕生に至るまで―」（長野国文一六号、二〇〇八・三）

* 太田次男「釋信救とその著作について―附・新樂府略意二種の翻印―」（斯道文庫論集五号、一九六六・三）

* 岡田三津子「『源平盛衰記』と新樂府注釈」『和漢比較文学会叢書 軍記と漢文学』（汲古書院一九九三・三）。『源平盛衰記の基礎的研究』和泉書院二〇〇五・二再録。引用は後者による）

* 中塚亮「姐己と狐―『封神演義』に見る、イメージ及び物語の成立に至る一過程―」（金沢大学中国語学中国文学教室紀要三号、一九九九・三）

* 堀誠①「狐変姐己考―故事の源流―」（早稲田大学教育学部学術研究国語・国文学編三六号、一九八七・12。『日中比較文学叢考』研文書院二〇一五・9再録。引用は後者による）

* 堀誠②「狐変姐己考補―狐魅妖惑の位相から―」（早稲田大学教育学部学術研究国語・国文学編三九号、一九九〇・12。『日中比較文学叢考』研文書院二〇一五・9再録。引用は後者による）

* 美濃部重克「『源平盛衰記』の解釈原理（一）」（伝承文学研究二九号、一九八三・8。『中世伝承文学の諸相』和泉書院一九八八・5再録。引用は後者による）

* 宮崎市定「古代史」『中国史 上』（岩波全書一九七七・6。岩波文庫二〇一五・5再刊。引用は後者による）

* 山口仲美「犬は「びよ」と鳴いていた 日本語は擬音語・擬態語が面白い」（光文社新書二〇〇二・8）

* 王貞「日本における褒姒の変身譚の受容と変容について」（大阪大学言語文化学三三号、二〇一四・3）

或説云、褒姒ハ亀ノ子也。周厲王ノ時、南庭ニ二ノ一白龍出来テ、蟠居レリ。帝イブセク思食ケレバ、可レ殺ヨシ宣下セラレケルヲ、大臣公卿僉議アリテ云、「龍ハ命長シテ必如意宝珠ヲ持ト云ヘリ。朝家安穩ノ為ニ出現スルニモヤアルラント。巫ニ依テ死生ヲ可レ定歟」ト奏シケレバ、「然ベシ」トテ、御占アリ。「不レ可レ殺」ト云占也ケレバ、「早汝ガ命ヲ助ク。速ニ可レ罷去」ト被宣下。二龍恩ヲ報ズトヤ思ケン、暫庭上ニ泡ヲ吐テ去ヌ。彼吐所ノ泡ヲミレバ、サマハ厳シキ玉也ケリ。「希代ノ重宝也。末代マデモ朝家ノ宝トスベシ。輒ク不レ可レ開」トテ、是ヲ松ノ唐櫃ニ納入テ、勅封ヲ付ヲカレケリ。其後、厲王・宣王・幽王三代ハ国治リ民豊ナリシヲ、幽王始テ是ヲ開キ給ヘリ。日記ノ如クニハ非ズ、忽然トシテ青亀也。王是ヲ愛シ給ヒケリ。宮中ニ七歳ノ姫宮御坐。即幽王ノ后ニ祝奉ベキ仁ナリケルガ、此亀ヲ愛シ

テ常ニ唐櫃ノ²⁴辺ニ遊給ケル程ニ、何トシタリケン、イマダ齒カ、ザル程ノ御齡也ケルニ、龜ト²⁵嫁テ²⁶懷妊シ給ヘリ。

【校異】 1 〈近〉「びやくりう」、〈蓬〉「白龍」、〈静〉「白龍」。 2 〈近〉「わたかまりをれり」、〈蓬〉「蟠をれり」、〈静〉「蟠居り」。 3 〈近〉「大じん」、〈静〉「大臣」。 4 〈近〉「りうは」、〈蓬・静〉「龍は」。 5 〈近〉「ながうして」、〈蓬・静〉「なかくして」。 6 〈近〉「てうけ」、〈蓬・静〉「朝家」。 7 〈蓬・静〉「ト」なし。 8 〈近〉「かんなきに」、〈蓬・静〉「ト巫に」。 9 〈近〉「御うら」、〈蓬〉「御ト」、〈静〉「御ト」。 10 〈近〉「うらなりければ」、〈蓬〉「ト也ければ」、〈静〉「ト也ければ」。 11 〈近〉「りう」、〈蓬〉「龍」、〈静〉「龍」。 12 〈蓬〉「泡をを」。頁替わりによる。 13 〈蓬〉「吐の」とし、「吐」と「の」の間に補入符あり。右に「トコロ」を傍記。 14 〈近〉「うつくしき」、〈蓬〉「いつくしき」、〈静〉「嚴」。 15 〈近〉「てうけの」、〈蓬・静〉「朝家の」。 16 〈近〉「ひの」、〈蓬・静〉「檜の」。 17 〈蓬〉「付てをかれけり」、〈静〉「付てをかれけり」。 18 〈近〉「三だいはおさまり」とし、「は」の右に「国」を傍書。 19 〈近〉「ゆたかなりしをを」。頁替わりによる。 20 〈近〉「あをきかめなり」、〈蓬〉「青亀なり」、〈静〉「青亀也」。 21 〈蓬〉「姫君」、〈静〉「姫君」。 22 〈近・蓬・静〉「おはします」。 23 〈近〉「いはひたてまつるへき」、〈蓬〉「祝奉るへき」、〈静〉「祝奉るへき」。 24 〈近〉「ほとりに」、〈蓬・静〉「辺に」。 25 〈近・蓬・静〉「嫁して」。 26 〈蓬〉「懷妊給へり」、〈静〉「懷妊給へり」。

【注解】 ○或説云 以下の一字下げ記事（別記文）は、〈盛〉の独自の事。〈早（黒）〉は「別行 低書」と記す。〈盛〉の褒姒の出自をめぐるその内容の出典は未詳。原拠として『史記』卷四周年紀あるいは『国語』が挙げられるが、相違点が多い。また、『史記』『国語』とはほぼ同文が『楚辞』王逸注にも引かれる。前節の幽王と褒姒の婚姻、伯服出生の逸話については、『唐鏡』との本文の近似が楊曉捷によって指摘されるが（三九頁）、『史記』で途中に挟まれる出自譚は『唐鏡』には記載がない。『史記』卷四周年紀によれば、幽王は褒姒を溺愛する余りに、褒姒が子の伯服を生むと、褒姒を正妃にし、正妃との子宜臼を廃嫡しようとした。この叙述に続いて、『史記』は、次の様に記す。

周太史伯陽読史記曰、周亡矣。昔自夏后氏之衰也、有二神龍止於夏帝庭、而言曰、余褒之二君。夏帝卜殺之与去之与止之。莫吉。卜請其幣而藏之。乃吉。於是布幣而策告之。龍亡而幣在、櫝而去之。夏亡、伝此器殷。殷亡、又伝此器周。比

三代、莫敢発之。至厲王之末、発而觀之。幣流于庭、不可除。厲王使婦人裸而諫之。幣化為玄龍、以入王後宮。後宮之童妾、既醜而遭之、既笄而孕、無夫而生子。懼而棄之。宣王之時童女謡曰、檠弧箕服、實亡周國。於是宣王聞之、有夫婦売是器者。宣王使執而戮之。逃。於道、而見鄉者後宮童妾所棄妖子、出於路者、聞其夜啼、哀而收之、夫婦遂亡。於褒。褒人有罪。請入童妾所棄女子者于王以贖罪。褒女子出于褒。是為褒姒。①當幽王三年、王之後宮、見而愛之、生子伯服。②。竟廢申后及太子、以褒姒為后。伯服為太子。太史伯陽曰、禍成矣、無可奈何。③（周の太史伯陽、史記を讀みて曰く、周は亡びん、と。昔夏后氏の衰へしより、二つの神龍有り、夏帝の庭に止まりて言ひて曰く、余は褒の二君なりと。夏帝、之を殺すと、之を去ると、之を止むるとを卜す。吉なる莫し。其の幣を請ひて之を藏むると卜す。乃ち吉なり。是に於て幣を布きて

策して之に告ぐ。龍亡げて縈在り、櫝にして之を去む。夏亡びしとき、此の器を殷に伝ふ。殷亡びしとき、又此の器を周に伝ふ。三代の比、敢へて之を発くもの莫し。厲王の末に至りて、発きて之を觀る。縈、庭に流れ、除ふべからず。厲王、婦人をして裸にして之に諷がしむ。縈化して玄龜と為り、以て王の後宮に入る。後宮の童妾、既に齟して之に遭ひ、既に笄して孕み、夫無くして子を生む。懼れて之を棄つ。宣王の時童女諱ひて曰く、縈弧箕服、実に周の国を亡ぼさん、と。是に於て宣王之を聞くに、夫婦の是の器を売る者有り。宣王執へて之を戮せしめんとす。逃ぐ。道に於て、郷者に後宮の童妾の棄てし所の妖子の、路に出づる者を見、其の夜啼を聞き、哀れみて之を収め、夫婦遂に亡げて褒に犇る。褒人罪有り。童妾の棄てし所の女子なる者を王に入れ、以て罪を贖はんと請ふ。棄てられし女子は、褒より出づ。是を褒姒と為す。①幽王三年に当りて、王、後宮に之き、見て之を愛す。子伯服を生む。②竟に申后及び太子を廢し、褒姒を以て后と為し、伯服を太子と為す。太史伯陽曰く、禍成れり。奈何ともすべき無し、と。新釈漢文大系一一一九六―一九七頁。

ここに褒姒の出自が記されるが、そのさらなる原拠については若干の問題をはらむ。「周太史伯陽説史記」曰、周亡矣」の通釈を、A新釈漢文大系『史記』（以下、新釈）は次のように記す。「周の記録官である太史の伯陽が、各国歴代の記録を読んで、嘆じていった、「周は亡びるだろう！」と。そして、史誌によって次のように述べた」（一一一九七頁）。他の通釈は次のようである。Bちくま学芸文庫『史記』「周の太史の伯陽は史記（史官の記した書）を読んで、「周は滅びるだ

ろう」と言った、その史記には次のように書かれていた」（一八四頁）。C徳間文庫『史記』「折から、古い記録を読んでいた史官の伯陽が言った。「ああ、周ももうこれまでか」記録には褒姒について、次のようなことが書かれていたのである」（一一一八八頁）。D平凡社版中国の古典シリーズ『史記』周の太史（記録官）の伯陽が史記（各国の歴代の記録）を読んでいった」（上―四七頁）。したがって、「昔自夏后氏之衰也以下に続く本文は、傍線部に見るように、周の太史伯陽が、「述べた」「読んでいった」ないしは「書かれていた」内容である。その内容が、どこまでの本文を指すのか、必ずしも明白ではないが、段落替えや引用符等から判断するに、①までと理解しているように読めるのが、C徳間文庫・D平凡社版中国の古典、②までと理解しているかと読めるのがBちくま学芸文庫であり、A新釈は恐らくは①までと解しているであろう。しかし『史記』本文には、それぞれの通釈に付した傍線部に該当する文はなく、これらはあくまでも、訳者が加えた部分であり、一つの解釈にすぎない。では、中国の現代語訳版ではこの点について、どのように解しているのだろうか。中華書局点校本『史記』、漢語大詞典出版社の二十四史全訳の『史記』、中華書局の中華經典名著全本全注全訳叢書の『史記』、貴州人民出版社の中華歴史名著訳注叢書の『史記全訳』によれば、詳細は省くが、伯陽が読んだ歴史記録の内容そのものではなく、恐らくは司馬遷の書いた地の文と解しうるような理解をしていると考えられる。このように『史記』そのものの原拠も問題であるが、《盛》の出典について牧野和夫は、同話が唐代の天台六祖湛然撰述の『止観輔行伝弘決』卷四之三や、これに注を付した具平親王撰『弘決外典鈔』などには、泡を収めた櫃を空

けたのを幽王の代とする点でより〈盛〉に近い本文が見られることを指摘する(三〇)(三二頁)。次に『弘決外典鈔』(国立公文書館デジタルアーカイブ、宝永八年刊本)を引く。本文は『止観輔行伝弘決』に基づき、それに注(へ)の部分)が加えられている。

褒姒者、昔夏后氏之衰^{フル}時、有二龍止於夏庭^ニ。〈史記三云、夏禹名曰文命。堯ノ時鴻水滔^レ天、浩浩懷^レ山襄^レ陵。舜命禹平水土。薦禹於天^ニ為^レ嗣。孔甲ノ時天降龍二。有一雌雄。〉自言余褒姒^ノ之二先君也。〈索隱三云、褒国名与夏同姓。史記二云、禹為姒姓。〉龍亡而褒在^ヘ韋昭云、縻龍所吐沫也。龍ノ之精氣也。縻而韁^レ之。夏亡以此器^ヲ伝^ヘ於殷^ニ。史記二云、夏桀不^レ務^レ德^ヲ而武^ヲ傷^ム百姓。百姓弗堪^ヘ、諸侯皆帰^ス湯。湯遂率^レ兵以伐^ニ夏^ヲ桀走^ル鳴条。湯乃踐^ニ天子位^ヲ。代夏朝^ニ天下^ヲ、是為^ニ殷湯^一也。殷亡又伝^フ於周^ニ。〈周^ニ見上^ニ。三代莫^レ之敢^レ発^ス。至^ニ于幽王末年^一発^レ之、縻流^ニ于庭^一。使^ニ婦人^一保^ニ而嗙^レ之、化^ニ為^ニ玄龜^一、入^ニ王後宮^一。後宮有^ニ未亂^一童女^一、遭^ニ之^一、既^ニ笄^一而孕^ニ無^レシテ夫^ヲ而生^ス。懼^ニ而棄^ニ之^一於路^ニ。有^ニ夫婦^一、夜聞^ニ其啼^一、哀^ニ而収^ム之^一。遂亡^ニ奔^ニ褒国^一。褒人贖^ニ罪^一、請^ニ入^ニ童女^一於幽王^ニ。女出^ニ褒国^一故云褒姒^ト。〈礼二云、婦人称^ニ国^一及^ニ姓^一。其女是龍縻^ニ褒人^一納^ニ于宮^一、故曰褒姒^也。〉幽王三年、於^ニ后宮^一見^ニ而愛^シ之^一生子伯服^ヲ。乃廢^ニ申后及太子^一、立^ニ褒姒^一与^ニ伯服^一。姒不好^レ笑。笑^ナ則百^ニ千媚^一。幽王欲^ニ其笑^一、打^ニ賊鼓^一举^ニ烽火^一。諸侯悉^ニ至^一而無^レ寇^一、姒乃大^ニ笑^一。幽王数^ニ為^ニ之^一。諸侯後^ニ遂^ニ不^レ至^一。至^ニ十一年^一、申后与^ニ犬戎^一共^ニ攻^ニ幽王^一。幽王举^ニ烽火^一打^ニ賊鼓^一徴^ニ兵^一莫^ニ至^一。遂殺^ニ幽王^一虜^ニ褒姒^一。

尽^テ取^テ周ノ略^ヲ而公^ル。申后乃与^ニ諸侯^一立^ニ太子^一。

以下、各項目で〈盛〉と『史記』および『弘決外典鈔』との異同を適宜挙げる。『止観輔行伝弘決』の本文部分と同一であるため、逐一引用はしない。なお褒姒の出生について詳しくは触れない〈延・屋・覺・中〉に対して、〈盛〉のほか〈闕・長〉がその出生譚を語る。ただし、〈盛〉は説話末尾に一字下げ記事として提示するが、〈闕・長〉は説話冒頭に配し、烽火故事に連続させ、その内容も〈盛〉とは異なり、幽王に攻め取られそうになった褒国が狐を変化させた女である褒姒を幽王の許に送り込んだとする内容で、狐になって去ったとする末尾と対応するものである。〈闕〉のものを以下に示しておく。

尋^ニ彼妃の由来^一者並^ニ国^一有^ニ二云^一褒似国^ト々々幽王欲^ニ打^ニ取^ニ彼^一国^一責^ニ此^一已^ニ三分^一被^ニ打^一取^ニ愛^ニ褒似国^一被^ニ回^ニ謀^ニ程^一囚^ニ下^一経^ニ千^一歳^一を^ニ狐^一以^ニ有^ニ験^一の僧^一十人^一百^ニ日^一之間^一令^ニ行^一之^ニ行^ニ成^ニ貌^一形^一の敵女^一帝王向^ニ彼^一女^ニ言^フ我遣^ニ幽王^一許^ニ者汝誑^ニ幽王^一心^一教^ニ我^一討^ニ其^一後^ニ必^ニ可^一放^ニ言^フ化女承^ニ諾^一此^ニ矣^一彼国^一帝化女^ニ副^ニ使者^一被^ニ申^ニ幽王^一方^一者君逼^ニ我国^一難^ニ堪^一然問^ニ奉^ニ我国^一第一^一之美女^一上^ニ向^ニ後留^一責^ニ被^ニ申^ニ幽王^一見^ニ件^一化^ニ女^一心^一則^ニ蕩^ニ成^一欲^ニ受^ニ取^ニ此^一可^ニ止^一責^ニ之^一由留^ニ狀^一已^ニ作^ニ寵^一一妃^一依^ニ自^一褒似国^一出^ニ其^一名^一即^ニ号^ニ褒似^一雖^ニ有^ニ三^一妃^一数^一余無^ニ遷^一心^一偏^ニ鐘^ニ愛^ニ褒姒^一彼の妃の由来を尋ぬるに、並びの国に褒似国と云ふ国有り。幽王彼の国を打ち取らんと欲して此れを責めけるに、已に三分が一は打ち取られにけり。爰に、褒似国に謀を回らされる程に、千歳を経たる狐を囚へて、有験の僧十人を以て、百日の間、之を行はしむるに、貌形の敵しき女と行ひ成しぬ。帝王彼の女に向かつて言ひけるは、「我、幽王の許

へ遣はさば、汝幽王の心を誑し、我に教へて討たせよ。其の後は必ず放つべし」と言へば、化女此れを承諾しけり。彼の国の帝、化女に使者を副へて、幽王の方に申されけるは、「君逼むるに我が国堪へ難し。然る間、我が国第一の美女を奉らん。向後は責むることを留めたまへ」と申されたり。幽王、件の化女を見て、心則ち蕩けて、欲びを成して此れを受け取り、責むることを止むべき由、領状しけり。已に一妃を寵しながら、褒姒国より出でたるに依りて、其の名を即ち褒姒と号く。妃数有りと雖も、余に心を遷すことも無く、偏に褒姒を鍾愛す。二下二〇ウ二一オ）。

○褒姒ハ亀ノ子也 褒姒が亀の子であるという言説は、『史記』に記された、龍の流した沫が「玄龍」となり王の後宮へ入り込んで（「蔡化為玄龍」、以入王後宮）、まだ年端もいかない女子と契り、生まれた子が褒姒だとすることと関わるう（『国語』も同様）。「玄龍」の「玄」は、『漢書・五行志下之上』で「蔡化為玄龍、以入王後宮、……」注が「韋昭曰、玄、黒、小爾雅」広詁が「玄、黒也」とするように、「黒」の意であろう。「玄龍」の「龍」は『国語』鄭語「及厲王之末、癸而觀之、蔡流于庭不可除也。王使婦人不帷而譟之、蔡化為玄龍、以入于王府」の韋昭注は、「龍、或為蜥。蜥、蜥蜴、象龍」とする。つまり、「龍」は「蜥」とも書かれ、「蜥」は「蜥蜴」であり、龍の形であるとする。「蜥」について、『漢語大詞典』は「指蜥蜴或蜥蜴一類的動物」とし、『漢語大字典』も「古代指蜥蜴和蜥蜴類動物。後作『蜥』」とする。つまりイモリや蜥蜴といった類の動物を指すとする。なお、「龍」について、『大漢和辞典』は①「あおうみがめ」と②「いもり」、『漢語大詞典』及び『漢語大字典』は①「大鼈」と②「蜥蜴」、それぞ

れ双方の意を挙げており、『漢書』「蔡化為玄龍」については、いずれも②の例として挙げている。また、現在広く使われる『史記』『漢書』『国語』などの注釈本や中国の現代語訳本なども、一般に②の意としている（新釈（二一九八頁）、平凡社版中国の古典（上十四七頁）、徳間文庫（一―一八九頁）は、「玄龍」を「蜥蜴（とかげ）」、ちくま学芸文庫『史記』は「いもり」（一―一八四頁）と解する。また、新釈漢文大系『国語』は、「玄蜥の意として、くるとかげ。もし龍の字なれば、すっぱんである。いずれにしても、龍の種類であり、男性の生殖器を象徴する」（下―六七―三頁とする）。一般に『国語』韋昭注の説が採られていると言える。一方、現在通行している『漢書』には、唐の顔師古による注が付されているが、『漢書』卷二十七五行志下之上「蔡化為玄龍」の注で、「龍似鼈而大、非蛇及蜥蜴」とする。顔師古は広く行われている韋昭の説（「龍」は「蜥蜴」であり、蛇に似て足が有る、といった説）を否定して、『龍』は鼈に似て大きく、蛇及び蜥蜴ではない」としているのである。

以下は、「龍」が①鼈の類の意である例である。

『説文解字』「龍、大鼈也、……」段玉裁注…「龍、与大鼈同形、而但分大小之别」

『爾雅翼・釈魚』「龍、鼈之大者、……乃復以鼈為雌、故曰、龍鳴鼈心」

『正字通』「龍、鼈類、青黄色、……」

『楚辞・九歌・河伯』「乘白鼈兮逐文魚。」王逸注…「大鼈為龍。」

徐珂『清稗類鈔・動物類』「龍、狀似鼈而甚大、頭有磊塊、故俗稱癩頭鼈、背青黄色、居於江湖。」

『正字通』は「龍」は青黄色であるとし、李時珍『本草綱目』は、「龍」

は青黄色であり、首は黄色であるとしている。また、上記、徐珂の『清稗類鈔・動物類』も、傍線部に見るように、「龍」は背が青黄色であるとしている。また、中国の『漢語大詞典』及び『漢語大字典』は、「龍」の①の意における俗称は「癩頭龍」であるとし、中国の『百度百科』(<https://baike.baidu.com/>)は、「癩頭龍」について、「背暗緑色、具黄点。……腹白至灰白色」とする。①の意の「龍」が黒くないとなると、黒い「龍」は②の意の「龍」であると見る韋昭の説が、やはり妥当だろうと思われる。但し、顔師古のように①として、青海亀とする理解も生じ得るものだったことが分かる。ちなみに『止観輔行伝弘決』は『史記』と同様に「化為玄龍入王後宮」(大正新修大藏経)と記すところを、『弘決外典鈔』は「化為玄龍入王後宮」と記す。なお、〈盛〉も、「後に幽王が泡を封じた唐櫃を開いたところ、「日記ノ如クニハ非ズ、忽然トシテ青亀也」と記し、『漢書』顔師古注や『説文解字』他のように、「龍」を「鼈」と解している。また〈盛〉では、この後に、褒姒の母(七歳の姫宮)が亀と嫁して生まれたのが褒姒であるとす。○周厲王ノ時 厲王は周の第十代の王。夷王の子、宣王の父。幽王の祖父。生没年?前八二八年。『史記』によれば、厲王は、即位後三十年の間、利を好み近臣の諫言にも耳を貸さず、暴虐な政を行い、奢侈で傲慢であったため、国民は皆王を譏ったとする。

○南庭ニ二ノ白龍出来テ蟠居レリ 〈盛〉は、以下の話を周の厲王の時の話として引く。しかし『史記』や『国語』によれば、二匹の神龍が出現したのは、周より二代前の夏の晩年の頃であった。『史記』昔自夏后氏之衰也、有二神龍。この点は『止観輔行伝弘決』『弘決外典鈔』も同じ。『弘決外典鈔』「昔夏后氏之衰^{フル時}、有二龍止於

夏^{フル}庭」。夏の帝王は、この龍を殺すのがよいか、たち去らせるのがよいか、止めておくのが良いか占ったが、いずれも吉と出なかった。そこで龍の口から出る精気の泡を請い受けてしまっておくことはどうかと占ってみると、吉であった。そのことを龍に告げると、龍は去って泡が残ったので、それを櫃に収めてしまっておいた。その櫃は、夏から殷、さらに周に伝えられたが、敢えて開かれることはなかった。しかし、厲王の末年になって、開けてみると、泡が宮廷に流れ出して、取り除くことができなかったとする(本文は「或説云」項参照)。つまり、〈盛〉は、『史記』『国語』等に見る夏の時代ではなく、周の厲王の時に、二匹の白龍が現れ出たと解するのである。○帝イブセク思食ケレバ、可殺ヨシ宣下セラレケルヲ 『史記』では、庭に出現した二龍は、我等は褒国の二人の先君であると言ったとする(『国語』では、褒人の神が龍と化して「余褒之二君也」と語ったとする)。「止於夏帝庭」而言曰、余褒之二君。この後記す褒姒の先祖の二君とするのであろうが、誰を指すのかは未詳。「帝」は、厲王。『史記』『国語』では、「夏帝」を指す。『弘決外典鈔』では、「自言余褒姒之二先君也」とあり、「二先君」とする。〈盛〉では、厲王は、殺せと言ったとするのだが、前項に見るように、『史記』『国語』では、龍を殺すか立ち去らせるか、留めておくかを占わせたとする。○大臣公卿僉議アリテ云、「龍ハ命長シテ必如意宝珠ヲ持ト云ヘリ 如意宝珠云云」という記事は『史記』には見られない。『大智度論』卷十二「初品中檀波羅蜜法施之余」には、婆伽陀龍王の太子が捨身によって転成して大國の太子に生れ変わり、民の貧苦を憐れんで如意宝珠を求めた逸話があり、「菩薩聞是語已白其父母」。欲入大海求龍王頭上如意

宝珠^ト。」（大正新脩大藏經卷二五—一五一頁）と、龍王の頭上を飾る宝物として記される。日本における龍と如意宝珠の関係については、『弘法大師御遺告二十五箇条』第二十四条に、「在^リ大海ノ底 龍宮ノ宝藏ニ無数^ニ玉^一。然^レ而如意宝珠ヲ為^ス皇帝^ト」「此^ニ玉^一 從^ニ宝藏^一 通^ニ海龍王^一 肝頸^下」、『弘法大師全集』二一八〇六頁）と、如意宝珠が龍の「肝頸」に通じるとあり、以降、特に真言密教において龍と宝珠をめぐる秘説が形成されていく。三室戸寺蔵『摩尼宝珠曼荼羅』では、龍の首あたりに宝珠が描かれている（藤巻一宏・五五頁）。また、『摩荊鈔』では、竜の頷の下にあるとする。「金翅鳥没^{シテ}而、其心臓海底ニ落テ如意宝珠ト成^テ、驪竜頷下ニ収^テ、七珍万宝ヲ雨^フスニ表示スル也」（古典文庫上—二二頁）。ステイーブン・トレンソンは、『御遺告』第二十四条に「大海龍王蔵并肝頸如意宝珠権現大士等」とされる「如意宝珠権現」が、中世真言密教では「龍」として認識されていたことを指摘する（三三二—三三四頁）。その他、龍神・龍宮と如意宝珠との関連を示すものとしては、次のものがある。『新羅明神記』『華山法皇御参詣之時、竜神天降、如意宝珠一果・水精念珠一連九穴・鮑一貝奉之』（黒田智・九二頁）、『書陵部本朗詠抄』の「翫其磧礫」注に、「玉淵トハ、竜宮也。如意宝珠ノ有故ニ、玉淵ト云ヘリ」（和漢朗詠集古注釈集成）二下—五一〇頁。なお、『盛』の褒貶譚に、この後に見るように吒只尼天信仰に基づいた解釈（よみ）を指摘する牧野和夫は、吒天の三摩耶形（密教において、仏の持つ持ち物）である「如意宝珠」に注目する（三四頁）。吒天の三摩耶形については、次節「山桑、ナマエハ陀天ノ三摩耶形也ケレバ、カクハカリ事ニシタリケリト（云々）」項注解参照。○朝家安穩ノ為ニ出現スルニモヤアルラント。巫ニ依

テ死生ヲ可定歟」ト奏シケレバ、「然ベシ」トテ御占アリ 校異7・8に見るように、本文は、「……アルラント。巫ニ依テ」と「アルラン。ト巫ニ依テ」と二系統に分かれる。〈早（黒）〉「ト巫ニ」は前者の本文。底本は、漢字の「ト」ではなく、片仮名の「ト」と見て良いだろう。例えば、巻六「奉ラントテ」（三三五三頁八行目）などは同じ片仮名「ト」と見て良い。本文としては、「アルラン。ト筵ニ依テ」とあるのが本来の形だろう。「ト巫」は、〈蓬・静〉のルビ「ホクセイ」に見るように、「ト筵」の意として使用するのである。なお当該記事を『史記』は記さず、前々項に記すとおり三者の占いをしたとする。〈盛〉では、二龍の出現は、朝家安穩のために出現したのではないかとする。その理由としては、前項に見るように、龍は長命であり、龍の持つ如意宝珠は、王権の象徴でもあったことと関わりう。十二世紀頃に著されたと見られる真言密教書『東要記』巻中「精進峰」には、「転輪聖王持如意珠、雨財穀富饒国土。諸大龍王戴摩尼宝。依珠威徳福殊勝」（統群書 二六下—四〇三頁）とあり、転輪聖王と龍王とがそれぞれ持つ宝珠によって福德がもたらされるとする（藤巻一宏・六八頁）。とりわけ真言密教が深く関わった中世の王権において宝珠は欠かせない役割を担っており、例えば正月に宮中で玉体安穩を祈る行事である後七日御修法では、「結願において、大阿闍梨たる東寺一長者は清涼殿に参入し、王に対して直接に加持を行う。この故実もまた重事とされたが、その所詮は、長者が心中に一山舍利如意宝珠（引用者注、室生寺の山中に籠め置かれたとされる如意宝珠）を観念することにあつた」（阿部泰郎・二九頁）。また、鳥羽の勝光明院の宝蔵に秘蔵された宝珠は「宝蔵とそれが担う院の存在を集約して象徴するも

の」であったが、「この宝珠を本尊とする修法は、息災・延命・祈雨
 なんかなく中宮御産つまり皇子の誕生を祈るための祈りなど、王権の
 再生と賦活を目的とするものであり、その最大の行法が如法（宝）愛
 染王法であった。この法は、中世に顕密教団が朝廷のために行った無
 数の祈祷―大法秘法―のうち、東密がもっぱら行ったもので、愛染明
 王の法のうち最も秘密にして、如意宝珠法―駄都（舍利）法と一体―
 であったとされる（同三四―三五頁。勝光明院の宝珠については松本
 郁代第Ⅱ部第八章、愛染明王と宝珠については、小川豊生第Ⅰ部第二
 章も参照）。このような龍―如意宝珠―王権の関わりがこの発言の背
 景にある。 ○「不可殺」ト云占也ケレバ、「早汝ガ命ヲ助ク。速

ニ可罷去」ト被宣下 殺すべきではないとの占いが出たため、厲王は
 龍の命を助けるから早く罷り去れと命じたとする。『史記』は、殺す
 か捨てるか留め置くか占った結果、いずれも吉となるものはなかった
 ため、龍の吐く精気の泡を請うてしまっておくのはどうかと占ったと
 ころ吉であったとする。「夏帝ト殺之与去之与止之。莫吉。ト」
 請其幣而蔵之。乃吉。『弘決外典鈔』は占ったとの記述なし。

○二龍恩ヲ報ストヤ思ケン、暫庭上ニ泡ヲ吐テ去ヌ。彼吐所ノ泡ヲ
 ミレバ、サマバ、蔽シキ玉也ケリ「泡」を、（早（黒））「幣」とする。
 「幣」の表記は『史記』や『国語』、『止観輔行伝弘決』『弘決外典鈔』
 も同じ。二龍は命を助けられた恩に報いるためか、庭上に泡を吐いて
 去った。吐いた泡を見ると色々な素晴らしい玉であった。『史記』では、
 そのことを告げると、龍は姿を消して、泡だけが残っていたので、箱
 に入れて所蔵しておいたと記すのみで、泡が玉であったとする記述は
 ない。「於是布幣而策告之。龍亡而幣在、櫝而去之。『弘決外典鈔』

も同様だが、龍の吐いた泡については、「韋昭云龍所吐沫也龍之精
 氣也」と注する。〈盛〉が、泡をよくよく見ると色々な玉であったと
 するのは、先に「龍ハ命長シテ必如意宝珠ヲ持ト云ヘリ」とすること
 と関わる。 ○「希代ノ重宝也。末代マデモ朝家ノ宝トスベシ。輒
 ク不可開」トテ、是ヲ桧ノ唐櫃ニ納入テ、勅封ヲ付ヲカレケリ 玉を
 朝家の宝とすべく、簡単に開くことができないように、桧の唐櫃の中
 に入れて、勅命が下されて封印されたとする。『史記』は「櫝而去之」、
 『弘決外典鈔』は「櫝而韞之」、いずれも箱に入れて収蔵したの意
 だが、重宝としたとするような記述はない。 ○其後、厲王・宣王・

幽王三代ハ国治リ民豊ナリシヲ、幽王始テ是ヲ開キ給ヘリ その後厲
 王・宣王・幽王の三代は国は治まり民は豊かであったのだが、幽王が
 これまで誰も開かなかった箱の蓋を開いたとする。これに対し、『史記』
 は、龍が出現したのが「夏后氏之衰」つまり夏の時代としていたので、
 夏が亡んだ時、泡を収めた器を殷に伝え、殷が亡びた時、さらに周に
 伝え、夏・殷・周の三代の間、誰も開く者がなかったのだが、厲王の
 末年に開いてこれを見たとする。「夏亡、伝此器殷。殷亡、又伝此
 器周。比三代、莫敢発之。至厲王之末、発而觀之。つまり、
 楊曉捷が指摘するように、『史記』が記す夏、殷、周の三代のことが、
 〈盛〉では周の一代の厲王、宣王、幽王のことにすり替えられている
 のである（四〇頁）。このことは、〈盛〉では冒頭で白龍の出現を「周
 厲王ノ時」とすることに符合する。『止観輔行伝弘決』及び『弘決外
 典鈔』では、「夏亡以此器伝於殷」「殷亡又伝於周」と、夏・
 殷・周に渡って伝えられたとすることは『史記』と一致しながら、「三
 代莫之敢発」ト。至幽王ノ末年「発之」と、周の幽王の時にこ

れを開いたとし、〈盛〉の記述に一致する。これについて牧野和夫は、『正観輔行弘決』は、「三代莫之敢發」の「三代」を「夏・殷・周を繰り返してうけることなく、既に周の代のことと」解き、周の「三代」である厲王・宣王・幽王を指すものと「よむ」ところから発した唐代における異伝であったかと考えて誤るまい」（二二頁）と指摘する。そして〈盛〉もこの誤解を踏襲していることになる。ただし、幽王の時にこれを開いたとする誤解は、早くからあったようである。すなわち、『論衡』卷三・怪奇第十五に、「或曰、夏之衰、二龍鬪於庭、吐螫於地。龍亡螫在、櫝而藏之。至周幽王、發出、龍螫化為玄龍、入於後宮、与処女交、遂生褒姒」（或ひと曰く、夏の衰ふるや、二龍庭に闘ひ、螫を地に吐き。龍亡げて螫在れば、櫝にして之を蔵す。周の幽王に至り發出すれば、龍螫化して玄龍と為り、後宮に入りて処女と交はり、遂に褒姒を生む。新釈漢文大系『論衡』上二四七—二四八頁）とあり、また卷五・異虚第十八にもほぼ同内容の記述があり、やはり「至幽王之時、発而視之」（幽王の時に至り、発きて之を視る。同三二〇頁）とある。幽王と褒姒の逸話からも、容易に生じ得た誤解であったと考えられる。○日記ノ如クニハ非ズ、忽然トシテ青亀也。王是ヲ愛シ給ヒケリ 「日記」は、箱の中身について、記し留められたもの。記録によれば、その中身は、二龍の吐いた泡（ないし「サマ／＼敵シキ玉」）であるはずであったが、にわかに青亀であった。これに対して、『史記』では、泡が庭に流れて取り除くことができない。厲王は夫人を裸にして騒がせたところ、泡が玄龍と化して王の後宮に入ったと記す。「厲王使婦人裸而譟之。螫化為玄龍、以入王後宮」。『国語』は、「王使婦人不幃而譟之、化為玄龍、

(七)

以入王后府」（王婦人をして幃せずして之に課がしむ、化して玄龍と為りて、以て王府に入る）とする。『弘決外典鈔』は「螫流于庭。使婦人裸而譟之、化為玄龍、入王后後宮」と、「亀」とする点が〈盛〉に近い。「玄龍」については、「褒姒ハ亀ノ子也」項参照。新釈『史記』は「裸而譟」とは不浄のしぐさ」（一九八頁）とし、新釈『国語』では、「不幃は、スカートをぬいで、陰部をさらけ出すこと」（下—六七二頁）とする。〈盛〉は玄龍を「青亀」と理解していることになる。○宮中ニ七歳ノ姫宮御坐。即幽王ノ后ニ祝奉ベキ仁ナリケルガ、此亀ヲ愛シテ常ニ唐櫃ノ辺ニ遊給ケル程ニ、何トシタリケン、イマダ齒力、ザル程ノ御齡也ケルニ、亀ト嫁テ懷妊シ給ヘリ（早（黒）「懷妊シ」を、「ハラミ」とする。校異26参照。宮中に七歳の姫宮がいらしかった。つまりは幽王の后におなりになる人であったが、この亀を愛して常に唐櫃の辺りで遊んでいらしかったが、どうしたのであるうか、いまだ齒も抜け替わらない年齢でいらしかったのに、亀と嫁いで懷妊なされたの意。これに対して、『史記』では、「後宮之童妾、既配而遭之、既笄而孕、無夫而生子」とし、泡の化した玄龍は王の後宮に入り、後宮の童女で齒が抜け替わらない子に出会った（『史記』の本文にある「既配」によれば、「齒が抜け替わったばかりの子」の意となるが、新釈『史記』の語釈（一一一九八頁）に、「女子は七歳で抜けかわるという。国語鄭語には「未既配」（未だことごとく配せず）に作る。南化・狩本なども国語に同じ（校補）」とする。そして簪をさす年頃になって身籠もったとする（新釈『史記』は、「笄」の語釈として、「かんざし。女子は十五歳で笄する。ここでは嫁となる年頃のこと」とする）。つまり、『史記』では、後宮の童女

が懐妊したのは十五歳頃であるのに対して、〈盛〉では、姫宮は、七 決外典鈔』は「後宮有^二未亂^一童女^一、遭^レ之^一、既^ニ笄^{シテ}而孕^ミ無^レレ夫而
歳で亀と嫁いで懐妊したとして、より不可思議な話となっている。『弘 生ス』とし、『史記』とはば同様。

引用研究文献

*阿部泰郎『宝珠と王権―中世王権と密教儀礼―』（長尾雅人他編『岩波講座 東洋思想16』岩波書店一九八九。『中世日本の王権神話』名古屋大
学出版会二〇二〇・2再録。引用は後者による）

*小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』（森話社二〇一四・4）

*黒田智『新羅明神記』（東京大学史料編纂所研究紀要二一〇一・3）

*ステイブントレンソン『祈雨・宝珠・龍―中世真言密教の深層』（京都大学学術出版会二〇一六・3）

*藤巻和宏『聖なる珠の物語―空海・聖地・如意宝珠』（平凡社二〇一七・11）

*牧野和夫『幽王始めて是を開く』ということ―天台三大部注釈書と『源平盛衰記』の一話をめぐる覚書―『実践国文学三四号、一九八八・10。

『日本中世の説話・書物のネットワーク』和泉書院二〇〇九・12再録。引用は後者による）

*松本郁代『中世王権と即位灌頂』（森話社二〇〇五・12）

*楊曉捷『源平盛衰記における中国故事説話についての研究』（国語国文五五卷一〇号、一九八六・10）

折節天下ニ¹童部歌ヲ歌フ事アリ。『²山桑』^{四〇}ノ弓、³生柄ノ矢ヲ以テ、此国ヲ⁴可滅^ズトゾ歌ヒケル。不^レ久シテ男一人⁵出来。山桑ノ弓、
⁷生柄ノ矢ヲ賣タリケル。是ヲキ、聞ユル事ニコソトテ件ノ男ヲ⁸搦捕テ、土ノ籠ニ⁹誠入^ル。七歳ノ懐妊ノ姫宮ヲモ追捨ラレタリケルガ、
¹⁰少キ御心ニサマヨヒアリキ給ケル程ニ、彼¹¹籠舎ノ砌ニ迷行^カ。獄人はヲミルニ、ミメ形ヨノツネナラズアリケレバ、「汝ヲバ我子ニスベシ」トテ、
¹²官食ヲ¹³分テコレヲ養フ。懐妊ノ¹⁴期満^{ミチ}テ¹⁵生産ス。即女子也。無¹⁶双^{ナク}ミメヨシ。長大スルニ随テ、美人ノ誉レ¹⁷國中ニ極レリ。幽王是ヲ召¹⁸テ后
トス。此忠ニ依テ籠舎ノ者モ被¹⁹出ケリ。此后²⁰生テヨリ²¹笑事ナシト云云。如²²先。山桑ノ²³弓、ナマエノ²⁴矢ウリケル者ト云ハ、他国ノ
王幽王ヲ亡²⁵サン為ニ、陀天ノ法ヲ祭リ付テ是ヲ売セリ。陀天ハ狐也。山桑、²⁶ナマエハ陀天ノ²⁷三摩耶形也ケレバ、カクハカリ事ニシタリ²⁸ケリ
ト云々。此事大ニ²⁹不審。周ノ³⁰代ニハ³¹仏法³²未渡、真言ナシ。僻事ニヤ。可³³相尋^ニ也。

【校異】1 〈近〉「わらはへうたを」、〈蓬〉「童部歌を」、〈静〉「童部歌を」。2 〈近〉「山桑の」、〈蓬〉「山桑の」、〈静〉「山桑の」。3 〈近〉「なまか
らの」とし、「から」の右に「ゑ」を異本注記。〈蓬〉「生柄の」。ルビ「^{ナマ}」は難読。「スミ」と記し、その上に「エノ」と訂正したか。「栖」は
「棲」の異体字。「栖」は本来は「柄」の誤読・誤写であろう。〈静〉「生柄」。4 〈蓬〉「滅すへしとそ」。5 〈近〉「いてきて」、〈蓬〉「いて来り」、

《静》「出来り」。6 《蓬・静》「山桑の」。7 《近》「生柄の」。《蓬》「生柄の」。《静》「生柄の」。8 《近》「からめとつて」。《蓬》「搦とりて」。《静》「搦取て」。9 《蓬》「誠しめ入る」。10 《近》「わかき」。《蓬》「おさなき」。《静》「少き」。11 《近》「まよひゆく」。《蓬》「迷ゆく」。《静》「迷ゆく」。12 《近》「わかちて」。《蓬・静》「わけて」。13 《近》「くはいのにん」。14 《近》「こ」。《蓬》「期」。《静》「期」。15 《近》「しやうさんす」。《蓬》「生産す」。16 《近》「したかひて」。《蓬》「随て」。《静》「随て」。17 《近》「こくちうに」。《蓬》「国中に」。18 《近》「むまれてより」。《蓬》「生てより」。《静》「生てより」。19 《近》「わらふ」。《蓬》「笑」。《静》「笑」。20 《近》「さきこく」。《蓬・静》「如先」まで割書き。なお、《静》「如先」。21 《近》「山桑の」。《蓬・静》「山桑の」。22 《蓬》「弓に」。《静》「弓に」。23 《蓬》「生柄の」。《静》「生柄の」。24 《蓬》「陀天は」。25 《蓬》「山桑」。《静》「山桑」。26 《蓬》「生柄は」。《静》「生柄は」。27 《近》「さまやきやうなりければ」。《蓬》「三摩耶形也ければ」。28 《蓬》「ケリ」なし。29 《蓬・静》以下「可相尋也」まで割書き。30 《蓬》「不実」。《静》「不実」。31 《近》「よには」。《蓬》「代には」。32 《近》「いまたわたらす」。《蓬》「未渡」。《静》「未渡」。

【注解】○折節天下二童部歌ヲ歌フ事アリ。「山桑ノ弓、生柄ノ矢ヲ以テ、此国ヲ可滅」トゾ歌ヒケル 〈早(黒)〉「生柄」を、「生エ」と記す。『史記』は次のように記す。「懼而棄之。宣王之時童女謡曰、槩弧箕服、実亡周国」。齒の抜け替わらない頃に玄龍に遭った童女は、箕を差す年頃になると懷妊し、夫なくして子供を生んだので、不祥として怖れてその子を捨てた。宣王の時代に或る童女が謡うには、「槩弧箕服」、つまり「山桑の木の弓と、箕(き)の木で作った矢入れ。服は簪」(新釈『史記』語釈。一一九八―一九九頁)は、周の国を亡ぼすだろう」と。このように、『史記』では、幼き褒姒が捨てられたのは童女が謡った宣王の時の事とするのだが、《盛》では、前節に見るように、幽王の時のこととする。また、『弘決外典鈔』は「懼而棄之於路」とするのみで、童謡のことは省略されており、後の「……土ノ籠ニ誠入」まで該当する記述がない。古代中国では、世に流行してうたわれる歌に特別な意義が存すると見做していた。歌を音律美としてのみ鑑賞せず、これに政治道德上の理念を見出そうとのみかたが

根強くあった(柳瀬喜代志①・一五三頁)。この歌は「天下」に流行して「童部」が歌い、政変を予言する「童謡」であった(柳瀬喜代志②・四八三頁)。さて、童部が歌った童謡の表の意は先に記したとおりで、このあと「山桑の木の弓」と「箕の木で作った矢入れ」を売る商人から亡国に至ることになるが、李幼麟は、『史記』が記す「槩弧箕服実亡周国」には、次に見る寓意が隠されているとする。先ず「槩弧」については、「音通」という視点から見ると、「槩」は「靨」(エクボ)という字に通じ、それは褒姒が笑った時にその頬に出来る「エクボ」の意を隠喩的に表現していると考えられ、「弧」についても、父を知らず童女を母とした事も知らぬ孤児であったとすれば、「弧」は「孤」に通じ、とすれば、「槩弧」という語は美女褒姒を隠喩的に表しているとする。また「箕服」についても、「箕」はまた龍尾星の称であり、それは「箕」が龍の末裔であることを意味するという。とすれば、「箕服」とは龍尾である伯服(褒姒の子)を指すと考えられ、その伯服が周を滅ぼすことの予言として読めるとする。ここから、『史

『記』の記述について、太史の伯陽は歴代の記録を丹念に調べあげ、神龍のいきさつから童妾の妊娠、捨て子のこと、商人夫婦のこと、これらと童謡を結びつけて、褒姒の身元を割り出し、まさにこの伯服立太子を指して「周国の禍ができたがってしまっ、もうどうすることもできない」と嘆いたと解する。このように考えると、童謡は、周の国を滅亡に導いたのが「山桑の弓、生柄の矢」であるという表の意味も読めると共に、孤兒から幽王の寵姫となった褒姒の笑みと不当に太子の座についた伯服を言い当てているという重大な意味を秘めて歌われた予言であったとする（九三〜九六頁）。「山桑ノ弓、生柄ノ矢ヲ以テ、此国ヲ可滅」と書き替える〈盛〉に、そうした隠喩を直接読み取ることはできないが、「幽王褒姒烽火事」で、「幽王ノ本ノ后ハ申候ト云人ノ女メナリケレドモ、彼ヲステ、褒姒ヲ后トシ、伯服ヲ太子ニ立給ヒケレバ、世ハ既ニ亡ヌトゾ群臣歎申ケル」（四〇五頁）と記していたように、太史伯陽ではなく群臣とはするものの、意味するところは同じであるとする（九六頁）。李幼麟の説は興味深い内容であり、また童謡に予言の意が含まれているというのも十分ありうるものだが、次に見るような問題点も孕んでいる。「弧」は「孤」につながる点について検討してみよう。確かに、『大漢和辞典』には、「ひとり。孤に通ず」（四一七〇三頁）として、柳宗元「天対」の「挙土作仇、徒怙身弧」のみを例として挙げている。しかし、柳宗元「天対」（『柳河東集』巻第十四）の「問…泥娶純狐、眩妻爰謀。何羿之射革、而交吞揆之 対…寒讒婦謀、后夷卒戕。荒棄于野、俾奸民是臧。举土作仇、徒怙身弧」の内容は、「問い…『寒泥は（后羿の妻）純狐を娶り（娶ろうとし）、（愛欲に）目のくらんだ妻と（ないし、愛欲に目の

くらんだ妻と（人を惑わす妻は）、）羿を謀殺した。羿は革を射ることが出来るほどの弓の名手だったのに、なぜ（寒泥らは）協力して彼を滅ぼすことができたのか」答え…『寒泥と妻がよこしまに企み、后夷（つまり后羿）はついに殺害された。后羿は政治を省みずに狩猟に熱中し、寒泥のようなよこしまな民にとって都合がいいようにさせてしまった。国中みな（后羿の）仇敵となったのに、后羿は徒に自分の弓矢だけに頼った』であり、「弧」はあくまでも「弓」の意であり、「孤」の意ではない。『大漢和辞典』が「弧」は「孤」に通ずるとするのは根拠に欠ける。中国の『漢語大詞典』や『漢語大字典』に、「弧」が「孤」に通ずるとの記載はない。また、『四庫全書』において「通孤」「弧通」「孤弧」「弧孤」その他を検索しても、「弧」が「孤」に通じるという記載は見られない。「弧」の音は中古音を示す『広韻』では「戸呉切」であり、『漢語大詞典』『漢語大字典』も「弧」について、「hú」《広韻》「戸呉切、平模匣」（『漢語大詞典』は「hú」《広韻》「戸呉切、平模、匣」と表記）としている。「孤」の音は『広韻』では「古胡切」であり、『漢語大詞典』『漢語大字典』は「gū」《広韻》「古胡切、平模見」（『漢語大詞典』は「gū」《広韻》「古胡切、平模、見」と表記）としている。「弧」と「孤」は現代中国語での音だけでなく、『広韻』の示す音も異なっている。なお、『大漢和辞典』は「孤」「弧」について、『集韻』の反切を載せ、それぞれ「洪孤切」（現代中国音はhú）、「攻乎切」（現代中国音はgū）とし、そこでもやはり音が異なっていることが確認できる。また、童謡は春秋末期のものであることをふまえ、『小学堂上古音資料庫』（<https://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/shangguyin>）で上古音を調べても、「弧」と「孤」はやはり音が異なっており、「弧」

と「孤」が通ずるといふのは誤りであろう。したがって、李幼麟の提示できているのは説の可能性であり、必ず正しいと証明できているわけではない。○不久シテ男一人出来。山桑ノ弓、生柄ノ矢ヲソ売タリケル 童謡が世に歌われている時、暫くして男が一人現れ、山桑の弓と生柄の矢を売っていたとする。これに対して、『史記』では、宣王がこの童謡を聞いた時、夫婦でこれらを売っているものがあることを聞いたとする。「於是宣王聞之、有夫婦売是器者」。なお〈早（黒）は、「山桑」を「槩」^{ヤツ}、「弓」を「弧」、「生柄」を「箕矢」^{オヤヤ}とする。『史記』の用字に同じ。〈早（黒）は、前節においても「泡」を『史記』の用字と重なる「漿」としていた（前節「龍恩ヲ報ズトヤ思ケン、暫庭上ニ泡ヲ吐テ去ヌ。彼吐所ノ泡ヲミレバ、サマト厳シキ玉也ケリ」項注解参照）。〈盛〉においても、これが本来の用字であるのかについては、今後の検討が必要とされよう。○是ヲキ、聞ユル事ニコソトテ件ノ男ヲ搦捕テ、土ノ籠ニ誠入 幽王はこのことを聞いて、世間で噂になっていることであろうと思い、その男を搦め取って、土の牢屋に誠め入れた。これに対して、『史記』では「宣王使執而戮之。逃」とし、宣王は、夫婦を捕らえて殺そうとしたが、逃がしてしまったとする。「土の籠」は「土牢」とも。〈日国大〉「土牢」の項、「地中につくった獄舎。土をうがって作った牢獄。つちろう。次に見る『愚管抄』の用例は「土牢」のことであろう。（百川の宰相は）桓武ヲバタテヲホセマイラセタレド、アマリニサタシスゴシテ、井上ノ内親王ヲ穴ヲエリテ獄ヲツクリテコメマイラセナンドセシカバ」（旧大系三三七頁）。『つるぎ讃談』『につくいかな。いか様にも、こかちはかねを盗み候たり』とて、あら、むざんや、こかちを

土の籠にをしこめ給ふ。ろうの内の住居、中々申す計り〔も〕なし」『幸若舞曲研究第九卷』三〇一頁）、「宮ハ何ト無ク闇夜ノ如ナル土棲ノ中ニ、朝ニ成ヌルヲモ知セ給ハズ、灯ヲ挑テ御経ヲ遊テ御坐有ケルガ」（玄玖本『太平記』二二三九頁）。○七歳ノ懷妊ノ姫宮ヲモ追捨ラレタリケルガ、少キ御心ニサマヨヒアリキ給ケル程ニ、彼籠舎ノ砌ニ迷行 幽王はこの時亀に嫁いで懷妊した七歳の姫宮をも宮中から追い放ったが、幼い御心にも彷徨い歩くうちに、獄舎の辺りに迷い出た。〈盛〉では、「七歳ノ姫宮」は懷妊したがまだ出産はしていないので、追放されるのが「懷妊ノ姫宮」であるのに対し、『史記』等ではすでに出産しているため、捨てられるのは童女の産んだ幼子である。前掲「折節天下ニ童部歌ヲ歌フ事アリ。山桑ノ弓、生柄ノ矢ヲ以テ、此国ヲ可滅」トゾ歌ヒケル」項参照。また〈盛〉では姫宮が自ら男の繋かれた獄舎に迷い込むのに対して、『史記』では、逃げた夫婦はその途中で、さき以後宮の童女が捨てた怪しくも美しい児（妖子）が、路上に置かれているのを見つけ、その夜泣きを聞いて、不憫に思つて拾いあげ、夫婦は褒の国へ逃げ込んだとする。「於道、而見郷者後宮童妾所棄妖子、出於路者、聞其夜啼、哀而収之、夫婦遂亡奔於褒」。その妖子こそ、のちの褒姒である。一方、「止観輔行伝弘決」では、前述の通り童謡をめぐる記述がないので、ここで夫婦が登場し、子を拾って褒の国へ逃げ込んだとする。「有夫婦、夜聞其啼、哀而収之、遂亡奔褒国」。このあたりの〈盛〉の展開は、『史記』や『止観輔行伝弘決』等と大きく異なる。○獄人はヲミルニ、ミメ形ヨノツネナラズアリケレバ、「汝ヲバ我子ニスベシ」トテ、官食ヲ分テコレヲ養フ 獄に捕らえられた男は、この懷妊した姫宮を見

るに、顔形が尋常でなく美しかったので、「あなたを我が子にしよう」と言つて、自らの食事を分けてこの姫君を養つた。このように、〈盛〉では、姫宮を見つけ世話するのは、獄に捕らえられた男。ただし、獄中に捕えられている男が、姫宮を養うというのは無理があり不自然とは言えよう。『史記』では、前項に見るように、養育したのは逃げた夫婦。○懷妊ノ期滿テ生産ス。即女子也。無双ミメヨシ。長大スルニ随テ、美人ノ譽レ國中ニ極レリ。姫君は月滿ちて出産した。女子であつた。並びなき美人で、大きくなるに従つて、美人の譽れは国中に知れ渡つた。このように、〈盛〉では、七歳の姫宮が懷妊し、月滿ち懷妊を産出したのは、幽王の時であつた。幽王の治世は、前七八一年から前七七一の十一年間であるが、前に幽王が懷妊を得たのが山川が震動した幽王二年の翌年とあるので幽王三年のこととなる。幽王が唐櫃を開いた時期については記載がないが、三年間の間に、七歳の姫宮が懷妊し、生まれた懷妊が成長し、美人の譽れが国中に知れ渡り、幽王の後となったというのは時間的に無理がある。楊曉捷は「この明らかに前後矛盾した記述は盛衰記のこの記事の内部の分裂を典型的に示し、少なくとも、盛衰記のこの説話が当然一つの資料にだけ依つたものではないということを示す傍証となる」と指摘する(四〇頁)。

一方、牧野和夫は、『止観輔行伝弘決』『弘決外典鈔』などでは、幽王が櫃を開いたのを幽王末年としながら(「至于幽王末年^一発^二之^三」、懷妊を見付けたのが幽王三年とされている(「幽王三年於^レ後宮^一見而愛^二之^三」)矛盾を、「天台六祖湛然の「誤」にふれずこれを避ける中世天台の学風」とみて(三〇―三三頁)、天台系資料では、既にこのような錯誤が定着していたことを指摘する。この点、『史記』他では、後宮

の童女が年頃となり、懷妊し懷妊を産んだのは宣王の時であつて、〈盛〉の先に見たような設定の不具合はない。『史記』では、この後、夫婦によって助け出された女子は、褒の国へ逃れたのだが、褒の君が周室に対して罪を犯したときに、童女の捨てた子を王に献上して贖いたいと請うた。棄てられた女子は褒から出てきたので懷妊と名づけられたとする。『史記』夫婦遂亡^レ犇^レ於^レ褒。褒人有^レ罪。請^レ入^レ童妾所^レ棄女子者于王^一以贖^レ罪。棄女子出于^レ褒。是為^レ懷妊。『弘決外典鈔』遂亡^レ犇^レ褒國。褒人贖^レ罪、請^レ入^レ童女於^レ幽王。女出^レ褒國故^レ曰^レ懷妊也。○幽王是ヲ召テ后トス。此忠ニ依テ籠舎ノ者モ被出ケリ。此后生テヨリ笑事ナシト云云。如先。幽王はこの女(懷妊)をお召しになつて后とした。また宮中から追い出され獄舎に彷徨い来た女子(懷妊)を匿い助けた獄舎の男も、その忠義により助け出された。この後は生まれてこの方笑うことはないということだ。先に記してあるとおりである。「如先」を〈近〉は「さきのことく」として、次に続けるが、〈逢・静〉が「如先」を割書とするように、前の内容に続けて読むのが良い。〈早(黒)〉にはこのことに関わる書き込みはない。一方、『史記』では、次のように記す。「当^レ幽王三年、王之^二後宮^一、見而愛^レ之、生^レ子伯服。竟廢^レ申后及太子、以^レ懷妊^二為^レ后伯服^一為^レ太子。太史伯陽曰、禍成矣、無^レ可^二奈何^一。幽王の三年、王は後宮に行つて懷妊を見て寵愛するようになり、子の伯服を生んだ。こうして、遂に申后と太子の宜曰とを廢して、懷妊を正后とし、伯服を太子にした。太史の伯陽は言つた。「周室の禍ができあがつてしまつた。もうどうすることもできない」と。そしてその後に、『平家物語』

では前に記す「烽火の沙汰」に該当する記事が続く。○山桑ノ弓、

ナマエノ矢ウリケル者ト云ハ、他国ノ王幽王ヲ亡サン為ニ、陀天ノ法ヲ祭り付テ是ヲ売セリ。陀天ハ狐也。以下の記述は『史記』『止観輔行伝弘決』等にはない、〈盛〉独自の記事。山桑の弓と生柄の矢を売っていた者と言うのは、他国の王が幽王を滅ぼそうとして、陀天の法を行ってこれを買取った、陀天は狐である、の意。「祭り付テ」の用例、謡曲『鶏竜田』『そも公の放鳥とは。何といひたる事やらん』シテ詞『いつぞや内裏にて四鶏の祭とて。さばへなす神を祭りつけ。都の四方の関々に。鳥獸を放されし。其うち一つの鳥なれば。公鳥とは申すなり』（『番外謡曲』七二九頁）。「陀天ノ法」については、本全釈の注解（三一七頁）参照。陀天は、吒只尼天の略。本話を、陀天の法や狐に関連づけて記すのは、先に「烽火」の話末に、「彼后幽王亡給テ後、尾三ツアル狐ト成テ、コウ／＼鳴シテ古キ塚ニ入ニケリ」（一四〇七〜四〇八頁）と記すことにも関わろう。同様の文は、〈闘・延・長・覚・中〉にもあり、『唐鏡』にも「此王ノ褒姒、国ヲ亡シ、君ヲ失ヒ奉ル、或説ニハ狐狸ノ変化トモ申セリ」（『古典文庫五七頁』）とある。前々節「彼后幽王亡給テ後、尾三ツアル狐ト成テ、コウ／＼鳴シテ古キ塚ニ入ニケリ」項参照。また、〈盛〉には、清盛の栄華を記すにあたり、清盛が外法である陀天の法を行ったことに関わらせて記していることにも関わろう（本全釈巻一「同清水寺詣」「同人行陀天」。三一・一二〜二二頁）。○山桑、ナマエハ陀天ノ三摩耶形也ケレバ、カクハカリ事ニシタリケリト云々。山桑の弓や生柄の矢は、陀天が手に持つ三摩耶形であるので、このようにはかりごとにしたということだ。「三摩耶形」は、『日国大』『仏語』一切衆生を済度するため諸

（七）

仏の発した誓願を具象化したもので、仏、菩薩、明王、諸天などが手に持っている器仗または印契をいうの意。茶枳尼天の持ち物を弓と矢とするものは見られないが、牧野和夫は中世天台の黒谷において、吒天信仰と天台三大部（注疏記も含む）が習合されていたことを指摘し、黒谷の吒天は弁財天に通じる面をもち、『溪嵐拾葉集』にも狐と白蛇とを弁財天に結ぶ記述があることから、おそらく吒天と弁財天とに通う習合の豊饒な秘説が存したものとす。とすれば、〈盛〉が「吒天」の「三摩耶形」とする「弓」「箭」が、竹生島の弁財天の左右の第一手の持ち物であることは、平安・鎌倉時代の図像の世界では一般であったとする（三三五頁）。なお、竹生島に祀られているのは頭上に蛇体の宇賀神を戴いた宇賀弁財天であるが、山本ひろ子①は、宇賀弁財天の三摩耶形は如意宝珠であり（三三八・四〇七頁）、「宇賀神とは弁才天修儀の世界では「頓得如意宝珠王」の謂であった」（四二二頁）と、宇賀神・如意宝珠・弁財天の關係について説明する。一方で、山本ひろ子②は、ダキニ天・聖天・弁才天の三天を同一の尊格として観ずる三天合行法に着目し、この法が如意宝珠を本尊として稲荷山で修せられていたことを指摘する（三五五〜三六〇頁）。他方、如意宝珠に着目すれば、中世の真言密教との関わりも指摘できる。前節「朝家安穩ノ為ニ出現スルニモヤアルラント。巫ニ依テ死生ヲ可定歟」ト奏シケレバ、「然ベシ」トテ御占アリ」項で、如意宝珠法と一体である愛染明王の修法を指摘したが、愛染明王は通常の図像では六臂とされ、その第二手は『別尊雜記』に「次左金剛弓、右執金剛箭」（『大正新脩大藏經図像部』巻三三四五頁）とされるように、左手に弓、右手に矢を持つとされる。このことは平安時代から中世にかけて描かれた多

くの愛染明王像からも確認される（神奈川県立金沢文庫編『愛染明王―愛と怒りのほとけ―』。さらに左第三手には「人黄（人王・仁黄など）」を持つとの解釈がされており、この人黄とは「密教の世界で考えられていた人間の生命の根源のようなもので、吒枳^{だき}尼^に天^{てん}が好んで食らう人間の精气とされる」（同図録四三頁）。阿部泰郎は即位灌頂について論じる中で、東寺方に伝えられた東寺即位法をめぐる伝承に注目し、その即位法の正体はダキニ天法であり、即位法の本尊というべきものがダキニ天であったと指摘する（四八頁）。そして、如意宝珠が王権の象徴であるとしたように、この灌頂儀礼言説の体系も、如意宝珠を象徴の中核とするものであった（同四九頁）。「ダキニを祀ることにより世俗の栄華と福德を得ようとする―それが王権と顕密仏教の、儀礼を介した関係のなかに深くひそむ主題であり動機であった」（五〇頁）であり、「舍利」宝珠とダキニ法が深いところで水脈を同じくしていることが察せられる」（五一頁）。このように、王権の儀礼の中核において、ダキニ天と愛染明王は通じていたのであり、ここでの三摩耶形も愛染明王のそれがイメージされている可能性もあろう。いずれにせよ、本説話において周王権の滅亡に如意宝珠が関わり、ダ

【引用研究文献】

- * 阿部泰郎「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼―」（長尾雅人他編『岩波講座 東洋思想16 岩波書店一九八九・3。『中世日本の王権神話』名古屋大学出版会二〇二〇・2再録。引用は後者による）
- * 神奈川県立金沢文庫編『愛染明王―愛と怒りのほとけ―』（神奈川県立金沢文庫二〇一一・10）
- * 牧野和夫「幽王始めて是を聞く」ということ―天台三大部注釈書と『源平盛衰記』の一話をめぐる覚書^{メモ}―」（実践国文学三四号、一九八八・10。『日本中世の説話・書物のネットワーク』和泉書院二〇〇九・12再録。引用は後者による）
- * 柳瀬喜代志①「童謡考―搜神記「由拳陥没為湖」話をめぐって―」（『中国詩文論叢』五集、一九八六・6。『日中古典文学論考』汲古書院

キニ天法が修されたとする背景には、中世の顕密仏教によって生み出されたダキニ天のイメージが深く関わっているよう。○此事大ニ不審。周ノ代ニハ仏法未渡、真言ナシ。僻事ニヤ。可相尋也（早（黒））「此事……可相尋也」に（ ）を付し、「割註 以下低書」とする。「此事」とは、「或説云」以下の異説全体を受けるとも、仏教がまだ伝わっていない周代に、真言系の陀天の法が修せられたという部分を受けるとも、或いは異説の内の後半部分「山桑ノ弓、ナマエノ矢ウリケル者ト云ハ……」以下を受けるものとも考えられようか。なお、周の時代には仏法は渡来していなかったし、故に真言などはない。こうして真言をあげる点については、『国文叢書源平盛衰記』が、「陀天の法は真言宗の専ら行ふ法なるを以て殊更に真言なしとは断れる也」（上一九六頁）とするのとおりである。そもそも仏法が中国に渡来したのは、『今昔物語集』巻六「震旦後漢明帝時、仏法渡語第二」に見るように、後漢の明帝の時とされ、周の代にはまだ渡来していなかった。『水鏡』「垂仁天皇」「九十三年と申ししにぞ、後漢の明帝の御夢に、黄金の人來たと御覧じて、明くる年天竺より初めて仏法唐土へ伝はりにし」（新典社校注叢書『校注水鏡』三三三頁）。

一九九九・3再録。引用は後者による）

*柳瀬喜代志②「禿童異聞考——「童謡」と平清盛像象形の関係——」（日本文学四六巻五号、一九九七・5。『日中古典文学論考』汲古書院一九九九・3再録。引用は後者による）

*山本ひろ子①「宇賀神王——その中世的様態——叡山における弁財天信仰をめぐって」（神語り研究三号、春秋社一九八九・11。『異神——中世日本の秘教的世界——』平凡社一九九八・3加筆再録。引用は後者による）

*山本ひろ子②「異類と双身——中世王権をめぐる性のメタファー——」（現代哲学の冒険」4『エロス』岩波書店一九九〇・6。『変成譜——中世神仏習合の世界』春秋社一九九三・7。引用は後者による）

*楊曉捷「源平盛衰記における中国故事説話についての研究」（国語国文五五巻一〇号、一九八六・10）

*李幼麟「幽王・褒姒伝説について」（駒澤国文二九号、一九九一・2）

¹内大臣モ此²意ヲ得給ケルニヤ、「今度事無トテ、³後日ノ催シ⁴ニ悠々ヲ不⁵存」トハ仰セケルニコソ。実ニ君ノ為ニハ忠勤アリ、父ノ為ニハ孝道ヲ存ス。「臣⁸以不⁷為^レ臣不^レ可有。子以⁹不^レ為^レ子不^レ可有」ト宣ヘル文宣王ノ言ニ¹²不^レ相違¹⁰ゾアリケル。法皇聞召テ、「今ニ不¹¹始事ト云ナガラ、怨¹⁴ヲバ恩ヲ以テ被¹³報ヌ。返タモ重盛ガ心ノ中¹⁵コソハツカシケレ。四三」¹³勁松彰¹⁴於歳寒¹⁵、¹⁴貞臣見¹⁶於国危¹⁷」ト云ヘリ。恥シクモ憑¹⁸シクモ思食¹⁹臣也。南無²⁰天照太神、正八幡宮、春日、日吉ノ神明、願ハ²¹小松内府ヨリ²²先立テ、²³朕ガ命ヲ召給ヘ」トテ、龍眼ヨリ御涙ヲ流サセ給ケルゾ忝ナキ。

【校異】1〈近〉「うちのおとゝも」、〈蓬〉「内大臣も」。2〈近〉「こゝろを」、〈蓬〉「心を」、〈静〉「意を」。3〈近〉「こにちの」、〈蓬〉「後日の」。4〈蓬〉「ニ」なし。5〈蓬〉「ゆふく」と。6〈近〉「そんなせさは」、〈蓬〉「存せされとは」、〈静〉「存せされとは」。7〈蓬〉「存す」。8〈近〉「もつてしんたらすは」、〈蓬〉「以不^レ為^レ臣¹¹」。ただし「以不^レ為^レ」の傍訓判読不可。〈静〉「以不^レ為^レ臣¹¹」。9〈近〉「こたらすは」、〈蓬〉「不^レ為^レ子」、〈静〉「不^レ為^レ子」。10〈蓬〉「文宣公の」、〈静〉「文宣公の」。11〈近〉「ことは」、〈蓬〉「言に」、〈静〉「言に」。12〈近〉「あひたかはすそ」、〈蓬〉「相違¹³せずそ」。13〈近〉「けいせうとしのさむきにあらはれ」、〈蓬〉「勁松彰¹⁴於歳寒¹⁵」、〈静〉「勁松彰¹⁴於歳寒¹⁵」。14〈近〉「ていしんくのにあやうきにみゆと」、〈蓬〉「貞臣見¹⁶於国危¹⁷と」、〈静〉「貞臣見¹⁶於国危¹⁷と」。15〈蓬・静〉「臣」なし。16〈近〉「てんせう大じん」。17〈近〉「こまつのたいふより」、〈蓬〉「小松の内府より」、〈静〉「小松の内府より」。18〈近〉「さきたちて」、〈蓬・静〉「先たてゝ」。19〈近〉「ちんか」、〈蓬〉「丸か」、〈静〉「丸か」。

【注解】○内大臣モ此意ヲ得給ケルニヤ、「今度事無トテ、後日ノ催シニ悠々ヲ不存」トハ仰セケルニコソ 内大臣重盛も、この事を心得な

さっていたのか、今度何事もないからといって、後日の軍勢催促に悠然とすることがあってはならないと仰せになったのであろう。先の「烽火」の内容を指して戒めたもの。〈盛〉は、他本では重盛の言葉によって語られる「烽火」記事を一字下げとし、その直前に重盛自身の言葉としては、「猿様ニ異国ノ幽王ニアリキ。度々ノ御召ニ事ナケレバトテ、官兵後日ノ催ニ参ラザリケレバ、ツイ二国ヲホロボシケリ。其コ、ロアルベシ」と概要を略述するにとどめるが、これを受けた一節ということになろう。この〈盛〉に比較的近似するのが、〈闕〉。『異国』有^{カシ}此^{其様ニ}様^{其様ニ}。今度召^{各己}各己^無。事後^有有^召召^不不^参参^雖雖^幾幾^度度^可可^隨隨^召召^返返^仰仰^合合^此此^被被^返返^矣矣。〔異国に此^{カハ}様^{ためシ}有り。其の様に〕今度各^{ヲノヲノ}己^{ヲノ}を召すに、事無かりけり。後に召すこと有らんに参らぬことや有る。幾度と雖も召しに随ふべし」と、返す返す此れを仰せ含めて返されけり。一下一二二ウ。〈延・長・中〉は次のとおり。

〈延〉「内大臣実ニハサセル事も聞出サレザリケレドモ、父ノ入道ヲ諫申サレツル詞ニ随テ、我身ニ勢ノ付歟付ヌ歟ノ程ヲモシリ、且ハ又父ト軍ヲセムトニハ非ズ、父ノ謀叛ノ心ヲヤ思有給トノ謀ナルベシ」(巻二一五〇ウ五一オ。〈長〉1—179頁、〈中〉1—180頁)。

〈闕〉は傍線部を欠く。「サセル事」とは、盛国を使者として出した次の触れを指す。「重盛別テ天下ノ大事ヲ聞出シタル事アリ。我ヲ我ト思ハシ者其ハ、忝ギ物具シテ参ルベシ」(四八ウ。〈長〉176頁)。しかし、そのような「天下ノ大事」を重盛は実際に聞き出したわけではなかったのだが、父の入道をお諫め申した言葉に従って、我身に勢がつくのかつかないのかも知り、今一つ父と軍をしようというわけではなく、父の謀叛の心を思いだめようとした謀なのであろうの意。〈屋・覚〉

は、〈延・長・中〉と同じ一文を記すが、その前に次の文を記す。〈覚〉「か様の事がある時わ、自今以後もこれより召さんには、かくのごとく参るべし。重盛不思議の事を聞出して召しつるなり。されども其事聞なをしつ。僻事にてありけり。とうく帰れ」とて、皆帰されけり」(上—180頁)。つまり、〈屋・覚〉の場合、〈屋〉「指タル事」(一六七頁)、〈覚〉「させる事」(上—180頁)とは、直前の「不思議の事」を指すことになる。「不思議の事」というのは、〈延〉のいう「天下ノ大事」に関わるようなことをばかした表現だろう。〈盛〉は同様の内容を「烽火」記事の前に、重盛自身の言葉として置く。「ヤヲレ家貞、貞能ヨ。マコトニハ勅定ナリトテモ、争カ父ニ向ヒ奉テ無道ノ逆罪ヲ、カスベキ。只入道殿違勅ノ振舞ヲシツメ奉リ、天下ノ煩ヲ止トノ方便ナリト云ヘドモ……」(1—180頁)。○実ニ君ノ為ニハ忠勤アリ、父ノ為ニハ孝道ヲ存ス。「臣以不為臣不可有。子以不為子不可有」ト宣ヘル文宣王ノ言ニ不相違ゾアリケル。次に挙げるように、〈闕・延・長・屋・覚・中〉も同様。ただし、前項のように、他本では父を牽制するために兵を集めた重盛の意図が直前に置かれ、この一節へとつながるが、〈盛〉の場合、それが「烽火」譚の前にあるため、この一文への文脈が捉えにくくなっている。また〈盛〉のこの一節は、先にあつた重盛の発言「悲哉、君ノ御為ニ奉公ノ忠ヲ致サントスレバ、迷廬八万ノ頂ヨリ猶高キ父ノ御恩忽ニ忘ナントス。痛哉、不孝ノ罪ヲ遁トスレバ、又朝恩量重ノ底極ガタシ。君ノ御為ニ既ニ不忠ノ逆臣トナリヌベシ。雖君不^レ為^レ君不^レ可^レ臣以不^レ為^レ臣、雖父不^レ為^レ父不^レ可^レ子以不^レ為^レ子トイヘリ」(三九三—三九四頁)と呼応して、重盛の言動の枠組みとして機能している。〈盛〉本文を次のように分割

する。

〈盛〉①実ニ君ノ為ニハ忠勤アリ、父ノ為ニハ孝道ヲ存ス。②「臣以不為臣不可有。子以不為子不可有」③ト宣ヘル文宣王ノ言ニ不相違ゾアリケル

②は、「臣以て臣たらずば有るべからず、子以て子たらずば有るべからず」と読む。

〈闘〉君雖不君臣不可以不臣 父雖不父 子不可以 子 云重盛存知此旨 不違文宣公 言為公 有忠 為父 有孝 ②「君、君たらずと雖も、臣以て臣たらざるべからず。父、父たらずと雖も、子以て子たらざるべからず」と云へり。③重盛此の旨を存知して、文宣公の言ひけるに違はず、①公の為には忠有り、父の為には孝有り。一下一二一ウ）

以下、諸本は次のように記す。

〈延・長・屋〉③内大臣ノ存知之旨、文宣公ノ宣ケルニ違ハズ。①君ノ為ニハ忠アリ、父ノ為ニハ孝アリ（〈延〉巻二一五一オ。〈長〉一―一七九頁。〈屋〉一六七頁。但し、〈屋〉は、③の本文の間に①が入り込む形）

〈覚・中〉②君君たらずと云とも、臣もって臣たらずばあるべからず。父父たらずと云共、子もって子たらずば有べからず。①君のためには忠あつて、父のためには孝あり」と、③文宣王のの給ひけるにたがはず（〈覚〉上―一〇二頁。〈中〉上―一〇八頁）

つまり、〈盛〉の①②③に対して、〈闘〉は②③①、〈延・長・屋〉は③①、〈覚・中〉は②①③となる。②は、孔安国のものでして伝えられる（偽作と考えられている）『古文孝経』序による。また②の当該

(一〇)

本文は、〈長・盛〉では、重複する形になるが、父に背いて不孝の罪を背負うか、君に背いて不忠の逆臣となるかと重盛が懊悩する先の場面に、「雖君不為君不可臣以不為臣、雖父不為父不可子以不為子」（〈盛〉一―三九四頁）として引用されている。当該部分の注解をも参照のこと。なお、遠藤光正によれば、「類書金言集の略抄本である金句集に採録の字句とは甚だ近似している」（二四頁）として、「孝経云、君雖不為君、臣不可以不為臣、父雖不為父、子不可以不為子」（村岡典嗣蔵金句集、父子事の条、東北大学蔵金句抄、文事部の条。二九頁）を引く。また、『山岸文庫本金句集』には、「孝経云、君雖不為君、臣不可有以不為臣、父雖不為父、子不可以有以不為子」（『金句集四種集成』勉誠社一二三―一二四頁）と、傍線部「有」が補われ、〈盛・覚・中〉に一致する。このことから、〈盛〉の当該句は、『古文孝経』序に直接拠るのではなく、類書ないしは〈覚・中〉等に拠るものと考えられよう。また、〈闘〉の場合は、②の『古文孝経』序の文を受けて、「重盛此の旨を存知して、文宣公の言ひけるに違はず」と記すように、〈盛〉と同様に孔子の言説と捉え、①で重盛はその意を帯びて振舞ったと解するのであろう。そもそも『古文孝経』の作者については、新釈の「作者」解説によれば、（一）孔子説、（二）孔子の弟子曾子説、（三）曾子門人説、（四）漢儒説があるが、（三）の説が有力視されるという（二―一六頁）。では、〈延・長・屋〉の③に記される孔子（文宣公）の言葉とは何を指すのだらうか。〈延全注釈〉が記すように、必ずしも明確ではない（巻二―二二六頁）。〈延全注釈〉には、この点に関わる研究史がまとめられておりそれを参照したいが、結論を記せば、父（親）に孝、君に忠は『古文孝経』の基本精神であり、他にも類似の

文言は多く、「文宣公ノ宣ケル」は、『古文孝経』を意識しているものと考えられる。故に、〈延〉の①「君ノ為ニハ忠アリ、父ノ為ニハ孝アリ」は、その大意を取ったものと考えて良からう。○法皇聞召テ、「今ニ不始事ト云ナガラ、怨ヲバ恩ヲ以テ被報又。返タモ重盛ガ心ノ中コソハツカシケレ」「怨ヲバ恩ヲ以テ報ズ」は、〈延全注釈〉（巻二―二二六頁）が指摘するように、もとは『老子』恩始第六十三「報怨以徳、凶難於其易、為大於其細」、天下難事、必作於易、天下大事、必作於細」（怨に報ゆるに徳を以てす。難を其の易きに図り、大を其の細に為む。天下の難事は、必ず易きより作り、天下の大事は、必ず細より作る。新釈漢文大系『老子 莊子』上―一〇七頁）等から発するのだから、日本では当時の諺として使われたのである（『全注釈』上―三二六頁）。諸注が指摘する『十訓抄』一―四「我情をほどこさば、人かへりてしたがふ。『仇をば恩をもて報ずべし』といへり」（新編日本古典文学全集三〇頁）の他、北海道大学付属図書館蔵二巻本『宝物集』「たとひ人われをころさんとすると、我はその人にうらみをなすべからず。あたをば恩をもつてほうずるといふ本文あり」（四九ウ）等が見られる。〈盛〉巻三十八「組モ切ル、モ先世ノ契。讎ヲバ恩デ報也」（五―四〇二頁）。「怨」「恩」がそれぞれ指す内容については、〈評講〉が記すように、「あた」は後白河法皇が平家を倒そうと陰謀を企てたことを指し、「恩」は重盛が父清盛を諫めて院の御所を襲うことを中止せしめたことを指す（上―三三四頁）。

【引用研究文献】

* 遠藤光正『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠（二）（大東文化大学東洋研究七七号、一九八六・一）

○『勁松彰於歳寒、貞臣見於国危』ト云ヘリ 以下巻末まで〈盛〉の独自本文。当該句は、遠藤光正の指摘のように、『文選』潘安仁の「西征賦」が典拠（二六頁）。「勁松彰於歳寒、貞臣見於国危」（勁松は歳の寒きに彰れ、貞臣は国の危ふきに見る）。時候が寒くなつてはじめて強い松が残ることが分かり、国家が危うくなつてはじめて忠臣が現れるの意（全釈漢文大系『文選』（文章編）二―二七―二九頁）。『明文抄』二、帝道部下、『玉函秘抄』巻下、『管蠡抄』第九、貞臣の項にも載る。『十訓抄』六―一七に、「勁松は年の寒きにあらはれ、忠臣は国の危きに見ゆ」と潘安仁が『西征の賦』に書ける、そのころなり」（新編日本古典文学全集三三八頁）とあり。また、『春日権現験記絵』にも、「凡そ我が朝は、神国として宗廟・社稷三千余座、各化現区々に、利益取り取りなれども、斯かる不思議ども、未だ見るも聞くも及ばず。真にこれ、勁松は霜の後に現はれ、忠臣は国の危うきに見る事なれば、時末代に属し、人詔曲なるによりて、不信の衆生の為に、掲焉の化儀を示し給ふなるべし」（続日本の絵巻一四。下―七八頁）とある。○南無天照太神、正八幡宮、春日、日吉ノ神明、願ハ小松内府ヨリ先立テ、朕ガ命ヲ召給ヘ」トテ、龍眼ヨリ御涙ヲ流サセ給ケルゾ忝ナキ 二所宗廟神である「天照大神、正八幡宮」が先ず記され、続いて春日、日吉の神明に対して、重盛より先に我が命を召したまえと後白河法皇が涙をお流しになったのは忝いことであつたとする。

東方朔ガ詞ニ、「水至清無^レ魚、人至察無^レ友」ト云ヘリ。嘉応³ノ相撲ノ節会ニ、大将ニテ右ノ片屋ニ事⁴行シ給ケルニ、見物ノ中ニ立^{たち}タリケル人ノ申ケルハ、「果報冥加コソ目出クテ、近衛大将ニ⁶至リ給フトモ、容儀⁷心操サヘ人ニ勝^すレ給ケル難^レ有サヨ。但此国ハ小国ナリ。⁸内大臣ハ大果報ノ人也。末代ニ相応セスシテ、トク、失給フベキニヤ」ト申タリケルガ、露タガハザリケルコソ不思議ナレ。¹⁰終

【校異】1〈近〉「水いたつてきよければうをなし」、〈蓬〉「水至清無^レ魚」、〈静〉「水至清無^レ魚」。²「人いたつてあきらかなれは友なし」と、〈蓬〉「人至察無^レ友」と、〈静〉「人至察無^レ友」。³〈近〉「すまふのせちゑに」、〈蓬〉「相撲の節会に」、〈静〉「相撲節会」。⁴〈近〉「おこなひし給ひけるに」、〈蓬〉「行し給けるに」、〈静〉「行し給けるに」。⁵〈蓬〉「見物の」。⁶〈近〉「いたり給ふらめ」。⁷〈近〉「心はせさへ」、〈蓬・静〉「心操さへ」。⁸〈近〉「うちのおとゝは」、〈蓬〉「内大臣は」、〈静〉「内大臣は」。⁹〈蓬〉「うせ給へし」とし、以下「終」まで本文なし。¹⁰〈近・静〉「終」なし。

【注解】○東方朔ガ詞ニ、「水至清無^レ魚、人至察無^レ友」ト云ヘリ 当該句は、遠藤光正の指摘のように、『漢書』卷六十五の東方朔伝が典拠（二六頁）。「水至清則無^レ魚、人至察則無^レ徒」。水の、いたつて清むときは魚なく、人の、いたつて察らかなときは徒がない意（ちくま学芸文庫『漢書』6—3—10頁）。なお、〈闘・屋〉は前節の院の感慨に続けて「国^に有^レ諫臣」則其国必安家^に有^レ諫子^に則其家必直云斯言実哉（〈闘・屋に諫臣有らば、則ち其の国必ず安く、家に諫子有らば、則ち其の家必ず直しと云ふ斯言、実なるかな。一下「二一ウ」二二オ」と記し、重盛の諫臣・諫子としての立ち位置を明示する。これは重盛亡き後に国・家が傾くことへの布石ともなる一節か。また〈覚・中〉は、『果報こそめでたうて、大臣の大将にいたらめ、容儀体はい人に勝れ、才智・才学さへ世に超えたるべしやは』とぞ、時の人々感じあはれける。『国に諫る臣あれば、其国必やすく、家に諫る子あれば、其家必たゞし』と言へり。上古にも末代にもありがたかりし大臣也（〈覚・上一〇三頁〉と続け、重盛の勝れた資質を強調する。〈盛〉の一節は、〈覚・中〉の「上古にも末代にもありがたかりし大臣也」を受け、逆に末代

なればこそ、重盛のような生き方が受け入れられたい事を強調する意図によるか。○嘉応ノ相撲ノ節会ニ、大将ニテ右ノ片屋ニ事行シ給ケルニ…… 前文を受けて、末代に比類無い重盛の素晴らしさを示す例として、相撲節会の記事が引かれたか。ただし、「水至清無^レ魚、人至察無^レ友」の例話としては、やや外れた感がある。なお類似記事は、次の〈四・闘・延・長〉に見られる。なお、〈盛〉については、関連記事の〈盛①〉〈盛②〉をも引く。当該本文と共通する部分には傍線を付した。

〈盛①〉七月（嘉応三年＝承安元年）ニハ相撲ノ節ナンド聞エキ。小松大将折節花ヤカニ、最目度ゾ御座ケル。可然宿報ニテ官位コソ思サマ也トモ、ミメ貌ハ心ニ叶ベキニハアラネ共、何事モ闕タル事ナシ。争角ハ御座ヤラント、人々ホメ被申ケリ。子息ノ少将ヨリ始テ、弟ノ公達ニ至ルマデ、形人ニ勝給ヘリ。大将情深人ニテ、詩歌、管絃、神楽ノ歌、笛ナンドヲモ勸メ教給タリケレバ、公達マデモ難有様シニ申合リ（卷三。1—14四頁）

〈盛②〉同（承安四年七月）廿七日ニ、大内ニテ相撲ノ召合アリ（卷三。

1—192頁

〔四〕凡此の大臣は嘉応相撲節に、大將にて御せしか右の樂屋に被^レ行^レ事之時人々の申^{けるは}果報 咄^{クテ}至^{ラセド}近衛の大將容儀可^{シヤ}勝^ル人に讃^メ申^{トカヤ}不相^セ末代^ニ之^ニ人^ニ疾^ク失^ル玉^ヘ（凡そ此の大臣は、嘉応の相撲の節に、大將にて御せしが、右の樂屋に事を行はれし時、人々の申しけるは、「果報こそ咄くて、近衛大將に至らせたまはめ。容儀さへ人に勝るべしや」と、讃め申しけるとかや。末代に相応せぬ人にて、疾く失せたまへるにこそ。卷三一—一五左）

〔闕〕同四月有改元（○）号承安元年同七月可有相撲節之由聞小松内府声花被^テ着屋形^ニ之有様弘^ニ辺^見宿報有限（○）者官位雖思様兒^ノ形不可^{トモ}叶^ニ心^ニ平家ノ人々何^レ勝^ニ容顔中^モ此重盛ノ卿殊^ニ兒事柄優^ニ御目出^{ヨト}申^{ケル}（同じき四月、改元有り、承安元年と号す。同じき七月、相撲の節有るべき由聞こえけり。小松内府は声花にて屋形に着かれたる有様、辺りを払つてぞ見えし。「宿報限り有れば、官位は思ふ様なりと雖も、兒形は心に叶ふべからねども、平家の人々は何れも容顔勝れたり。中にも、此の重盛の卿の、殊に兒事柄優に御す目出たさよ」とぞ申しける。一上—二八オ）

〔延〕七月ニハ相模^アアリ。重盛右二連ヲハシケレバ、「近衛大將ニ至ラムカラニ、容儀身体サヘ人ニ勝給ヘルハ」ト申アヒケルトカヤ。加様ニ讃奉テ、セメテノ事ニヤ、「末代ニ相応セデ、御命ヤ短ク御坐セムズラム」ト申アヒケルコソイマハシケレ。（卷一—一六三オ）

〔長〕七月には相撲の節あり。しげもり宿運おはしければ、右のあく屋にて事を行給ふを、人見て申けるは、「くはほうこそ目出たくて、近衛大將にいたらんからに、ようぎしんたいさへ人にすぐれ給べ

しやは」と申あひけるとかや。「か様美たてまつりて、せめての事には、末代に相応せで、御命やみじかくおはせんずらん」と申けるこそ、今はしけれ（1—164頁）

〔盛〕には、三箇所（盛①）（盛②）と当該記事（盛③）に相撲の節会記事がある。〔盛①〕〔盛③〕の相撲の節会記事は、嘉応三年（承安元年）（七月）のこととして記し、〔盛②〕は承安四年七月二十七日のこととして記す。この相撲の節会記事については、本全釈の注解「同廿七日ニ、大内ニテ相撲ノ召合アリ……」（一〇—一〇〇—一〇一頁）に記すように、承安四年七月二十七日のこととするのが正しい。しかし、諸本は次のように記す。

A 嘉応三年（七月）……〔四・闕・延・盛①③〕

B 承安四年七月二十七日……〔盛②〕

C 嘉応元年七月……〔長〕

〔長〕の嘉応元年は、恐らくは嘉応三年の誤写ないしは誤読と考えられよう。このことから明らかなように、〔四・闕・盛①③〕が、あえて虚構の年次の「嘉応相撲」とするのは、本全釈の注解「七月ニハ相撲ノ節ナンド聞エキ」（九—四頁）に記すように、「嘉応三（承安元年）」のこととする〔延・長〕のような記事を受けるからであろう（今井正之助・三三頁）。なお、重盛が右大將に就任したのは承安四年七月七日のこと。嘉応三年のこととするならば、重盛は権大納言であり、大將ではない。「右ノ片屋」に相当する語、〔四〕「右の樂屋」、〔長〕「右のあく屋」。「方屋」は、「古く、相撲や競馬などで、左右または東西に分けられた力士や乗手が集まっている控え所」（『日国大』）の意。「樂屋」は、「雅楽で、樂人の演奏する場所、および舞人の装束着用の場所、

また、それらの人が休息に用いる場所をいう、「幄屋」は、「朝廷の儀式などのおりに、参列の人を入れるため、臨時に庭に設ける仮屋。あげばり」（日国大）の意。相撲の節における右大将の役割としては、相撲使の派遣を差配したり、内取（稽古のこと）の様子を確認し、召合に候じたり、場合によっては審判を行い、全日程の最後には相撲節に関係した人々を饗したりした。なお、『玉葉』承安四年（一一七四）七月二十六日、二十七日条によると、右大将重盛は相撲内取に候じていて、召合は諸卿の座に座っている。なおこの時の出居（審判のこと）は左中将雅長が行っている。○果報冥加コン目出クテ、近衛大将ニ至リ給フトモ、容儀心操サヘ人ニ勝レ給ケル難有サヨ 前項の〈盛①〉の傍線部に見るように、表現は微妙に異なるが、言おうとすることはほぼ同じと言えよう。「可然宿報ニテ官位コソ思サマ也トモ、ミメ貌ハ心ニ叶ベキニハアラネ共、何事モ闕タル事ナシ。争角ハ御座ヤラント、人々ホメ被申ケリ」（巻三。1—144頁）。果報や御利益がすばらしくて、近衛大将におなりになったとしても、姿や心ばえまでが人に勝れていらっしゃるのはめったにないことよ。「心操」は、「心がけ。心ばえ」（日国大）の意。〈屋・覚・中〉は、相撲節とは関係なく、ここで人々の評価として同様の文言を引く。〈覚〉『果報こそめでたうて、大臣の大将にいたらめ、容儀体はい人に勝れ、才智・才学さへ世に超えたるべしやは』とぞ、時の人々感じあはれる」（上—一〇三頁）。○但此国ハ小国ナリ。内大臣ハ大果報ノ人也 重盛が大果報の人であることについては、先に「果報冥加コン目出クテ」とあることに対応する。当該部の近似本文が〈南〉に見られる。〈南〉「平家スデニ運命末ニ成テ、跡ヲモ継ベキ小松殿ハ、国ハ小国也此人ハ大

人也シカバ、国ニ相応セヌ人ニテ世ヲハヤクシ給ヌ」（巻六。上—二一四—二一五頁）。文覚が頼朝に会って、故に「小松殿ニ継テハ御辺ゾ大果報ノ人ト見奉ル」（二一五頁）と言ったとする言葉である。恐らくは〈南〉には、〈盛〉の本文の影響が考えられようか。なお、〈延〉にも、文覚と頼朝との対面場面で、「大政入道嫡子小松内大臣コソ、謀モ賢ク心モ強ニテ、父ノ跡ヲモ可継人ニテオワセシガ、小国ニ相応セヌ人ニテ、父ニ先立テ被失ヌ」（巻五—三九オ）と、小国に不似合い故に早逝したとする。〈盛〉には、次のような用例も見られる。〈盛〉「我国ノ有様ヲ見ニ、神明ノ御助ナクバ、争人民ヲ安シ国土モ穩カラシ。小国辺土ノ境ナレバ国ノ力モ弱ク、末世濁惡ノ此比ナレバ人ノ心モ愚也。隠テハ天魔ノ為ニナヤマサレ、顕テハ大国ノ王ニアナヅラル、縦仏法渡給トモ、魔障強バ濁世ノ今ヒロマリ難シ」（巻九。二—四二—四三頁）。粟散辺土觀に基づく物言いで、さらに末代故に重盛はこの世に相応することなく早逝したとするのであろう。ただ、重盛が「小国に見合ぬ大果報の人」というような例は未見。○末代ニ相応セズシテ、トク失給フベキニヤ」ト申タリケルガ、露タガハザリケルコソ不思議ナレ 前々々項に引く〈闘〉と〈盛①〉に見るように、〈闘・盛〉は共に、既出の相撲の節会の記事において、重盛が末代に相応せず、早死にするのではと噂されたが、それは本当のことになったとする記事を欠く。そして、〈盛〉は、その記事を、当該記事に移したと考えられよう。その理由として、本全釈の当該部（争角ハ御座ヤラント、人々ホメ被申ケリ）の注解では、〈盛〉が、重盛が短命であった徴証であったとする評をここに欠くのは、平家の栄華を記す記事としてふさわしくないと判断したためであろうか（九—一五頁）と考えた。

なお、〈闘・盛〉のそうした本文が、前々々項に引く〈延・長〉的な本文から改編されたものであることについては、本全釈の同じ注解に触れた（九―五頁）。また、井上翠は、「ここで重盛の早世が示されることは、此度は重盛によって後白河院の幽閉が止められたが、重盛亡き後は後白河院の幽閉が止められないこと、すなわち重盛亡き後、治承三年政変において、後白河院の幽閉が行なわれることを示唆すると

言えよう」〈盛〉においては、「基房が殿下乗合に言及し、重盛亡きいま清盛がその遺恨を晴らそうとしていると語ることとあわせて、これまでの出来事が結びつく形で治承三年政変が描かれている」（五六頁）とする。○終 校異10参照。〈蓬〉も同様に記す。底本では、巻尾に「終」と記すのは、他に巻十五のみ。〈蓬〉は欠く。

【引用研究文献】

*井上翠『源平盛衰記』の西光の機能（古典遺産七〇号、二〇二一・6）

*今井正之助「嘉応相撲節・待宵小侍従―延慶本平家物語の古態性の検証・続―」（長崎大学教育学部人文科学研究報告三〇号、一九八一・3）

*遠藤光正『源平盛衰記』に引用の漢籍の典拠（二）（大東文化大学東洋研究七七号、一九八六・1）

本稿の分担は次のとおりである。

村井が本文・校異の礎稿を作成、早川・志立・橋本・森田が注解の礎稿を作成した上で、特に国語学的事項については村井が、歴史学的事項については曾我・山岡が、中国文学的事項については近藤が中心となって、共著者八名で相互に検討を加えた。

本研究はJSPS 科研費基盤研究（C）JP22K00311『源平盛衰記』の注釈学的新研究（研究代表者：志立正知（秋田大学）、研究分担者：曾我良成、橋本正俊、村井宏栄、森田貴之）の成果の一部である。